宮崎大学教育学部紀要　人文科学　第78号（1995）105～137頁

『諏訪の本地』の研究（五）

白石一美

本稿は、『諏訪の本地』（兼家系）諸伝本中、古態を残すとされる主要伝本三部の校本である。それらはいずれも南九州に伝来するものであるが、その底本を次に示す。

A宮崎県都城市野々美谷諏訪神社所蔵　天和三年[1683]書写（奥書）絵巻

最近まで都城市立図書館に寄託されていたが、都城歴史資料館の創設にともなって、都城市都島町803番地（城山公園内）所在の同館に、平成六年現在寄託されている。その奥書によれば、旧本が傷んだので、新たに写しなおして当該絵巻を作成したことが明らかであるが、原拠本の制作年次は記し残されていない。現状は本文が一巻一軸として存し、絵は各場面の料紙毎に分離されているが、上下各巻末と思しき絵の末尾に絵師竹之下信成の名が「行年四十四清原信成書」・「天和二年壬戌八月吉日　字名竹之下助之進　清原信成書　奉寄進野々美谷御諏訪」とあり、さらに奥書に「當社縁起両巻者」云々とあり、本来は本文と絵が交互に現れる二巻二軸の絵巻であったと判断される。

B鹿児島県姶良郡吉松町　石川タモ氏所蔵　天文十二年[1543]書写絵巻

『諏訪御由来之絵縁起』　二巻二軸

Cえびの市大明司諏訪神社　黒木典子氏所蔵『御諏方御本地』（箱書）

大永五年[1525]旧奥書明暦四年[1658]書写絵巻　二巻二軸

校本の底本は右の三本であるが、直接には次の翻刻に依拠した。

A天和本　宮崎大学教育学部紀要第56号　1984年9月

B天文本　伝承文学資料集第一輯『神道物語集〔一〕』所収

解題・解説　寺師三千夫　福田　晃　伝承文学研究会編

C大永本　宮崎大学教育学部紀要第54号　1983年9月

Cは、後に『神道大系』文学編二（『中世神道物語』1989・9）に収められたので、これを部分的に参照させていただき、拙稿の不備を補正した。

凡例

1字句の破損散佚部分は□により表示した。

2二字の踊り字は／＼により表示した。

3本行内に収め得ない字句は★・☆・○により表示した。

4マヽ註記などに代え、注意すべき箇所には傍線を施した。

5書誌などの上で注意すべき箇所には【　】を施した。

6大永本における行間の追加訂正字句は原則として本行に戻した。

7王（わ）・本（ほ）など、適宜字母を残した。

8改行は天和本を基準とした。

9翻刻間の字句異同などは、本学紀要の次の拙稿の末に載せる予定である。

以上

C 十□の大國五□の中国むりやうのそくさん國のその
B 十六の大国　の
A 十六の大国　の其

C 中にはらなひ國といふ國あり　かの大はう七人の姫　宮を
B 中にはらなひ国といふくに有□□□大皇　七人のひめ　を
A 中に原　内　国といふ国　あり　大王　七人之きさきを

C もち　給　ふ　時に内大□の右大将とてしんま　します　ちうしん
B もたせ　給　ふ　内大臣　左大将□□□□　おはします　ちう人
A もたせたまふ時　内大臣の右大将とて臣　下ま　します　忠　臣

C に□□わうの御□ほへかしこくおはしまして昼　夜のほうこう
B にて大王　の御おほえかしこくおは□まして　しゅう夜の奉　公
A にて大王　御覚　かしこくをはしまして宿　屋の奉　公

C めてたかりしほとに　かた／のくきやう　そねみて　七人のひめ
B めてたかりし★ほとに　かた人　のきやうさう　☆そねみて　七人のひめ
A めてたかりしほとに　かたへ　の大将　そねみて　七人の后

C ★　☆これを　ふよし　大わうにさんそうせらるゝ
B 宮をおかしけいしやうし給　ふよし　大王　にさんそふせらる□
A 宮をおかしけいしやうし給　ふよし　大王　さんそうせらるゝ
C 犯し　たてまつり
B 犯し　たまふよし
A 犯し　たまふよし

C によつて大わうえいりよやすめかたくおほしめしてその　内　大臣
B によつて　えいりよやすめかたくおほしめしてその国の　うち大臣
A によつて　大王　ゑいりよやすめ　たくおほしめして此

C □け　くはんせられ　かの國をついし給ふ　三十七人　しゆなひ
B をけ　くわんせられて　彼国を追ひ出し給ふ　三十七人のしん類
A をけつくわんせられ　彼の国を追い出し給ふ★卅七人　親類／

C おほしひきくして御船　にとりのり　はらなひ國を出
B を　ひきくして御ふねにとりのり給ひてはらなひこくをおし出て
A ひき□し★御ふねにとり乗り　をしいたし
C ★たまいて
B
A

C 給　ふなみかせにまかせてゆられおはするほとに日かすつもりて
B 給　ふ波風にまかせてゆられおはするほどに日数つもりて
A たまふ浪　風　にまかせて□□□わするほとに日かすつもりしかは

C 日本　ちくせんの國はかたの津にそつき　給　ふかの津にある
B 日本国　筑　前の国はかたの津に　つき　給　ふかの津に□□
A 日本国□□　国はかたの津に　付かせたまふ　彼之津に有

C らうしんのもとにとりあかり　て宿　とり給ふ　大臣かの家ぬし
B 老翁□もとにとりあかり　て宿□かり給ふ内大臣かの家ぬし
A 老□のもとにとりあかりたまふて宿　し　給ふ　彼之家主

C におほせられけるはそも／國にぬしなき　所やあるとひ
B に仰　られけるは抑　彼国　ぬしなきくに□なの所や有　とひ
A におほせ　けるは抑　国に主　なき　所や有　とい

C 給へはいゑぬしこたへて申けるは我朝日本　は六十六ケ國
B 給へは家　ぬしこたへて申様　我朝日本国は六十六ケ□しま二つのくに
A たまふ主　答　て申けるは我朝日本国は六拾六ケ国嶋は二つの国

C 也　かたしけなくもてんせう大神の御しそんあるしとなりまし
B なり　かたしけなく天照大神の御子　あるしと成　まし／て
A なり　かたしけなくも天　照　大神の御しそんあるしと成　まし／て

C ます國　にはこくしやうにはしやうし　かうにはかうしなとて
B ますくにゝは国　司城　にはは荘　子★郷　にはかうし　とて
A　国　にはこくし城　にはしやうし☆かうにはこうしなとゝ

C ★こほりには郡司
B　☆郡にはくむし
A

C 申　さためを□せ給ふ也　と申内大しんかさねてと　ひ給ふ　さ
B 申て定　置　給ふなり　と申内大臣　重　てとうて宣はくさもあれ
A　定　置　也　と申内大臣　かさねてとふて宣　くさもあれ

C ともぬし　なきところいかてかなかるへきとの給　へはおきなうち
B　主　なきところいかてかあるへきとのたまへは
A　あるしなき所　いかてかなあるへきとのたまへは【C　以下散佚】

C あんして申けるはそもあふみの國かうかのこほり三千八百町
B あんして申ける　あふみの国かうかの郡　三千八百町

C のところあり　むかしよりぬしをさためられ候へともふしきに
B の所　こそ昔　しよりぬしをさためられ候へ共　ふしきそ

C ぬしさたまらぬところとうけ給候　かゝるところはありとてもたれ
B 主　さたまらぬ所　とうけたまはれ　かゝるところは有　とてもたれ

C 人かちきやうし給ふへきとそ申ける　内大しんこのことを□□
B かちきやうし給ふへきとそ申ける　内大臣　此　こと　聞

C 給ひ　おほきによろこひ　さてはその　ぬしになるへき□□□
B 給ひておほきによろこひてさてはその★主　となるへきわれ／にこそ

C あるらんとて　はかたのつをはいてたまふ★ところの
B あ　らめとて　はかたの津を　出て給　ふ
A

C 【C　以上散佚】

C　あふみの國の江　かうかの國　こほりへ　とていそかれけるあふみの国　こほりへ　とそいそかれける　さてこ　のこほりにあふみの国　夏のこほりへ　そいそかれける★★さて江夏の郡　のこほりえ
B　日数盛しかは
A　つき給ふちきやうせられしにもとより　ぬしさたまらぬところ
B　つき給ふちきやうせられし□□ところはぬしさたまらぬ所
C　着　知行　せられたりもとより　ぬしなき
A　なれはしさい　なく　わうとにすむ身なれはとてねんくを御
B　なれは子細　なく　わう土にすむ身なれはとてねんくを御
C　なれは子細　はなし　土　土にすむ身なれはとて年　貢を御
A　門にそなへ給　ひしかは　ぬしさたまらぬところをしつめてねん
B　門にそなへ給　しかは　主　さたまらぬところをしつめて年
C　門ニそなへたまいしかは★★主　さたまらん所　を鎮　めて年
A　くをそなふる事　しんへうなりとてゑいらんありける　かくて
B　貢をそなふる事　神　妙　とそゑいかん有　ける　かくて
C　貢をそなうることしんへうなりとそゑいかん有　ける　提　て
A　内大しんたもち給ふほとに三人のなんしをまうけ給　ひての給ひ
B　内大臣　たもち給ふほとに三人の男　子をまうけ給　ひの給ひ
C　内大臣　たもち給　ほとに三人のなん子をまうけたまふ　宣　ひ
A　けるははれてんちくにありし時　は大わうにつかへたてまつりし
B　けるはわれ天　ちくにありしときは大王　につかへたてまつりし
C　けるは我　天　竺ニありし時　は大王　につかへたてまつりし
A　かは　内大しんのさ大しやうとてありしかとも　この國にてはおん
B　かは　内大臣　左大将　たりしかとも　此国にて　遠
C　かは　内大臣　の右大将　たりしかとも　此　国にて　遠
A　こくのたみたり　しかれは國にもところにもさうおうしたるなこそ
B　国のたみなり　しかれは国にも所　にも相　応　したる名こそ
C　国のものなり　然　は国にも所　にもさうおうしたる名こそ
A　よけれとの給　ひてわか身はかうかのこんのかみかねさたとかうし
B　よけれとの給　ひてわか身はかうかの権　守かねさたとかうし
C　よけれとのたまひて我　身は江　夏之権　之守　兼　定　と号　し
A　給　ふちやくしかうかの太郎かねまさ二らかうかの次郎
B　給　ふちやくしかうかの太郎かねまさ二郎かうかの次郎★かねいゑ
C　たまふちやくし江　夏の太郎兼　正　次男かうかの次郎☆兼　家
A　★かねみつさんなんかの三郎☆兼光三男かうかの三郎
B　となのり給ふをの〳〵たけき弓とりにてそおはしける太郎
C　となり給各　々たけき弓とりにてそおはしける太郎殿
A　となのらせたまふ各
C　太郎殿

A　四人はりに十四そく　二郎殿五人はりに十五そく　二郎殿七人はりに
B　四たりはり十四そく　二郎殿五人はり十五そく　二郎殿七人はりに
C　四人はりに十四束　次郎殿五人はりに十五束　二郎殿七人はりに
A　十七そく　そい給ひける　かくしてこんのかみ　八十三のよはひ　た
B　十七そく　そい給ふ　かくして権　守は八十三のよはゐをた
C　十七束　をそ射給いける　かくて権　之守　は八拾三のよわいをた
A　もち給ふ御わうしやうありしに　しよりやうを　三人のなんしに　ゆつり
B　もち給て御往　生　ありたり　しよりやう　三人のなんしに　ゆつり
C　もち★御わうしやうありける　彼之所　をは三人　子そく分てゆつり
A　給ふ太郎に　二千二百ちやう二郎に　一千一百丁　三郎殿に　一千
B　給ふ太郎殿に　一千二百町　二郎殿に　一千一百町　三郎殿に　一千
C　給ふ太郎殿に　一千弐百町　次ら殿に　壱千二百町　三良殿　一千
A　二百ちやう　とうふん　に　はいふんせられけるいま二百ちやうをは
B　二百町　みなとうふん　にそ配　分　せられけりいま　百ちやうをは
C　二百町　皆　おなしやうに　配　分　せられけ★今二百町　をは
A　太郎殿に　つけ給ふ　たゝし　てうほうの　きくすいのはなのたねし
B　太郎殿にそつけ給ふ　たし　てうほうの　きくすいのはなたねと
C　太ら殿に　の給ふ　たゝし　てうほうのたから菊　水　の花　のたれ
A　しゆはんちやうのつえとて　し人のよみかへるたからをは太ら殿
B　しゆはんちやう　とて　死人のよみかへるたから　は太郎殿
C　しくしんふ　うのつへとて　し人のよみかへる　をは
A　にも二ら殿にもゆつり給はす　三ら殿にゆつりまいらせ給ひて
B　にも二郎殿にもゆつり給はす　三郎殿にゆつりまいらせ給　て
C　三郎殿ニたひにけり　さて
A　かくて　代をたもち給ひし　ほとにある時　太ら殿しやてい　二人に
B　かく　よをたもち給　し　ほとにあるとき　太郎殿舎　弟　二人に
C　かくて★世をすきまし〳〵けるほとにあるときに　太ら殿しやていの人々に
A　あ　ひての給ひけるは　これに　候　人のあらそひ　申候をうけ給候へは
B　相給　ひての給ひけるは　これに　人のあらそひ　申候をねら　候へは
C　三人ノ人々　のたまいける★★これにて候らん人のあらかいを申ヲ承
A　山　と海　と　いつくにおそろしきもの住　候と申　に山まさりと申候うみ
B　やまとうみと　いつれかおそろしき物　すみ候と申すに山まさりと申物候海
C　山　と海　とはいつれかおそろしきものすみ候ト申　に
A　まさりと申ものも候　たふん海　まさりと申候は　かたく〳〵
B　まさりと申　も候　たふんうみ　まさりと申候は　かたく〳〵
C　山こそおそろしく候へ　いかゝおほし　いかゝおほし

C　めし候やと仰られけれは二ら殿うちあんし　申されけるは海　こそわに
B　めし候　と仰られけれは二郎殿打　あんして申されけるは海　こそ
A　めし候哉と仰られけれは二良殿うちあんしてのたまひけるうみにこそわに

C　ふか　くちらさ　ちほこなとゝ申て　おそろしき　おほきなる物とも　お
B　ふか　くちらさ　ちほこなとゝ申て　おそろしき　なる物ともはお
A　ふか★くじらしやちほこなとゝ申て　おひたゝしくおゝきなるもの　お

C　ほく候へ山にはとこ　に候とそ申されける三ら殿　うちあんして申され
B　ほく候へ山にはいつくに候とそ申されける三郎殿　打　あんして申され
A　ゝく候へ　と　のたまへは三郎殿★うちあんしてのたまひ★と申又

C　けるは二ら殿□ほせ候やうにうみにはおそろしき　★これも
B　けるは二郎殿仰　候様　々海　にはおそろしきなる　おほうほなと候へ共
A　けるは　魚　なと候へ共

C　いかてか山に□さり候へき　山にはまわうの物候あひたさらに　いかゝ
B　いかてか山にまさり候へき　山にはまわうの物候間　さらにたいあふ
A　山にこそおそろしきものは　たい

C　すへきけ□物候はすとそ申されける　太ら殿　の給ひけるはかねまさ
B　すへきもの　候はすと　申されける　太郎殿の給ひけるはかねまさ
A　すへき　とそ申されける　太郎殿　被仰　けるは兼　正　は

C　いつれ　もそんせす候いさゝせ給へかゝるあらそひ　我／かよにあるこそ
B　いつれとも不存　候ゐさゝせ給へかゝるあらそひのわれらか世にあるこそ
A　いつれとも存すといさゝせたまゐ彼かゝるあらかいのわれらか代にあるこそ

C　しかるへき事にて候へたつねて見候はんとかつうはかゝるあらそひ
B　可然　事にて候へたつねて見候はむ　かつ　はかゝるあらそひを
A　しかるへき事にて候へ尋　て見候はん　かへらはかゝるあらかひを

C　むかしより　きはめたる人　候はぬにかうかのとのはらかたつねきは
B　むかしより　きはめたる人　候はぬそかうかの殿　原かたつねきは
A　むく　よりしてきわめたる人々は候はす　かうかのとのはらかたつね究

C　めたりけるとつたへて　ものかたりにもせられ候はんする　そかしとの
B　めたりけるとつたへ候　物　語　にもせられ　候そかしとの
A　たるなとゝ世の末の人の物　語　にもすへきとそ申傳へ候そかしとの

C　給　【無シ　目移カ】　尤とそ申されける
B　給　ひけれは二郎殿も三郎とのも
A　たまひけれは二郎殿も三郎殿　もおもひ／／に尤とそ申されける

C　給へはそれは二ら殿も三ら殿申さるゝにつきてまつ山よりたつ
B　　されは　三郎殿申さるゝにつきて先　山よりたつ
A　太ら殿被仰ける　三郎殿儀に付て山よりはしめて　たつ

C　ねて見候はん人々　いてたち給へとてきやうたい　三人の人々おもひ
B　ねて見候はむ人々を　出立給へとて兄　弟　の三人の人々おもひ
A　ね　候はん殿原もはや出　立　給へとて　三人の殿原

C　／／に出　たち給ふ太ら殿　くきやうの弓　とりゐらひてあひくし給ひて
B　／／にいてたち給ふ太郎殿★究竟　のゆみとり語らひてあひ　給ひて
A　くきやうのつわもの卅四人　相　具　て☆★二郎殿　☆兄弟うちつれて

C　五き七たう東國西國四國九州おくむつの國まてたつね給へともて
B　五畿七道　東国西国四国九州　むつの国まて尋　給へともて
A　東国西国　奥州　まてたつねたまへとも

C　まわう□山そなかりける
B　まわう〻の物すむ山そなかりける
A　魔王　住　山そなき

C　□てに三年八月七日と申　に　しなのゝ國くろ□□の□かしの□
B　すてに三年八月七日と申すに　信　濃　国くろひめのひかしのとりゐ
A　すてに三年八月十日と申　ニ　信　濃　国黒　姫　の東　の鳥ゐ

C　のもとにつき給ひて　ひるのかれいゝをおこない　けるに　太ら殿お□
B　のもとに着ゐて　ひるのかれい　をおこなひ給ひ　けるに　太郎殿仰
A　のもとに着　たまふ　ひるのかれい　ををこなひ　けるに　太郎殿被仰

C　せられけるは　三ら殿か儀につきて此年月日本　國の山／をめくり□
B　せられけるは　三郎殿か儀につきて此年月にほんの国の山々　をめくりて
A　けるは　三郎殿　儀に付て此年月日本　国　を廻　りて

C　たつねぬ候へともつゐにまわうの物　候はす　せんするところは三ら殿ふしつ
B　たつねぬ候へともつゐに　物も候はす　せんするところ　三郎殿ふしつ
A　たつねぬ候へとも終　に广王　の★すむ山は　候はす　せんする所　に三郎殿ふしん

C　のとかに　ちきやうふんのところをとりて我々　はんふんつゝちきやう
B　のとかにかのちきやうふんの所　を取てわれらはんふんつゝちきやう
A　のとかに★かれらか　知行　の所　をと　て我　等半　分つゝもち候はん

C　せん□　の給ひけり三ら殿此　よし　きゝ給ひて　なけきたまふ　所□
B　せんと　の給ふ　三郎殿このよしをきゝ給ひて　なけき給ふ　所に
A　とそ申されける三郎殿是　を聞たまひて大になけきたまいける　所に

C　八□□かりのおきないてきたり　三ら殿おきなに問ひ給ひけ□
B　八十はかりのおきな出てきたり　三郎殿おきなにとひ給ひける
A　八十八拾はかりなる翁　出　来　りて有に三郎殿翁　にとひたまふやう

C　★年　山かしり
B　★何方よりともなくして　山はし
A　はとしたけ給ひたる人にておはしませは申候もしまわうのすむ山はしり
B　はとしたけ　たる人にておはしませは申候もしまわうのすむ山や知て
A　は年　たけ　摩王　の★ものゝすむ所の

C給ひて候らんと仰られれは　おきなの給ひけるはわかさの國かう
B給ひ　候らんと仰らるれは　ひけるは若　狭　国から
A候か　ととひたまひけれは翁　申　けるは若　狭の国から

C山は尋ねて御らんし候や彼山にこそまわうの物　はすむなり
B山は尋て御覧　候や彼山にこそまわうのものは住　なり
A山は尋　て御覧　候や彼山　こそ広王　のものはすみ候なれ

C【A以下散佚】
B いらすかたにかへらすか谷とておそろしき名ある所なりとそ申ける三郎殿
A　と申ておそろしき名のあるところ　とそ申ける三郎殿☆
C　いりたる★　★人の二たひかへらぬ　☆これを

C　あまりのうれしさに　しろきこそてをぬきて　たひ　けり
B聞給ふてあまりにうれしさに★白　き小　袖をぬきて翁にたひにけりさて
A　★めしたりける

C修行の人々の★申給へはおの〳〵よろこひてわかさの国へそ越られける【A以上散佚】
B　あにのとの原の前にて此由をかたり給へはおほきに悦をなして若狭の国
A　★前にまいりてかくと

C　つき給ひて　この山のひかしのかたより
B すてにくたんのかうかけ山に　つき給　て　この山の東　の方　より
A すてにくたんのからかけ山に　つき給　て　の山の東　のかたより

C　からかけの山にそつきにけり★
B　からかけの山にそつきにけり★
A　★扨ていりて御らんすれは

C八十はかりの　らうおうくみなわをこしにつけてをのうちかつ　て　いて
B八十はかりの　老翁　くみなはをこしにつけ　おのうちかつきたるに
A年八拾はかりなるおきな　くみなわ　こしにつけておのうちかつきて

C　たるかあひたてまつりての給ひけるはとのはらはいつく　におはする
B　ゆきあひ　相　たてまつりての給ひけるはとのはらはいつく　へおはする
A　ゆきあひ　て申ける　はとのはらはいつかたへおわす　そ

C人□これよりとく　かへり給　へ　このはまわうのすむ山なりとのはらより
B人そこれよりとく〳〵帰　り給　へ　此山はまわうのすむ山なりとのはらより
A とく〳〵是ゟとく〳〵かへり給ふへし此山は広王　のすむ山なりとの原　より

C　さきに入　し人もかへりたる事　なしこれともにさんとゝをしへたてまつる
B　さきにいりし人もかへりたることなしこれともに三　と　をしへたてまつり
A　さきに★　★ふたゝひ人のいりて　かへりたることなしこれともに三　度なりとそ申ける

C　をの〳〵よろこひてくろひめの東のとりゐのもとにておきな□
B　をの〳〵よろこひてくろひめの東の鳥　居のもとにておきなのいひしは
A　是を聞★　くろひめ　東の鳥　ゐのもとにて翁　のいひしは

C　★たまひてよろこひたまひける
B　まことなりけりとて　うれしさに　小袖一　つゝぬきてたひ給ひけり　□□
A　まことなりけり　うれしさにこそて一つゝぬきてたひ　けり　二日
C　まことなり　とて★　うれしさに☆小袖一　つゝぬきてたひにけりさて二手
B　★あまりの　☆これにも又

C　はかりわけ入て見給へはたてさま　七里よこさま　七里　のはらありすゝき
B　はかり分　入て見給へはたてさま　七里よこさま　七里　のはら有　すゝき
A　に　わけ入て見給へはたてさまも七里よこさまも七里計のはらありすゝき

C　かるかやもおひぬ　ひろ野　也　おほきなるかはらそ一見えたりける
B　かるかやもをい□な　あれはらなり　□な　□　はらなりそれにしゝかはねはかりそ見えける
A　かるかやもおひさりし

C　ちかつきて　見給へは　しやりたるかうへはつこつともなり又それより
B　ちかつきて　見給へは　かうへは　こつともなり又それより
A　ちかくよりてみ給へは★　しやり　かうへ　ともなり☆それゟ

C　十里はかり行て見給へは　又　たてさま　七里よこさま七里のはらあり
B　十里はかり行て見給へは　又　竪　様　七里横　はら有　あり
A　★一かうの　☆あらふしきやとおもひ給ふて

C　又十里はかりの　　またたてよこも七里はかりの　　原
B　又十里はかり行て見給へは　　七里様　七里のはら
A

C　けりこゝにもこ草　おひぬ　まん中　にたかさ十丈　はかりのくすの
B　けりこゝにも小草もをいす　はら中　に高　さ十丈　はかりのくすの
A　是も　草木　おいすしてなかほとにたかさ十ちやうはかりの楠　の

C木一本　ありその木の中にかみ　五丈　はかりあかりて一のさかり枝の三
B木一本　ありその木の中にかみに五ちやうはかりあかりて一のさかり枝の三
A木一ほんある其木のうへに　五ひろ　はかりあかりて　さかりゐたのさん

C方　に三の枝　さしたりけり　此三のえたに三のやくら　を　かきたりける
B方へ三　へたさしたりける　此三の枝　に三のやくら　をそかきたりける
A はうへ　さしたりけり　屋くら一つゝ　そかきたりける

C三ら殿これを御覧してこはいかに　人のかよへはこそやくらも　かきたり
B三郎殿これを御覧してこはいかに　人のかよへはこそやくらも　かきたり
A三良★これを見給いてこはいかにや人のかよへはこそ屋くらをはかきつらめ
C　★とのは

C　とて南のやくらには太ら殿北　は二ら殿のほり給へは東のやくらには
B　とて南のやくらに太郎殿★西のやくらには二郎殿おはしませ東のやくらには
A　とて南の矢くらには太郎殿西のやくらには次郎殿　東の矢くらには
C　★おはしませ

C　かねいゐゐ候はんいかなる人のやくらにてもあれと　とて三十三人の人々
B　かねいゐゐ候はむいかなる人のやくらにてもあれと　とて三十三人の人々
A　兼　家　候はん　とて三十余人　殿原たちみな

C　此やくらにとりのほり給　ふ　比　は八月中旬　なりけれは月　くまなし
B　此やくらにとりのほり給　ふ　ころは八月中旬　なりけれは月　くまなし
A　矢くらにとりのほりたまふ　ころは八月中旬の事な　れは月はくまなし

C三ら殿　下知にしたかひて人々　かたて矢はめて　相待給ふ　處　に
B三郎殿　の下知にしたかひ　人々　かたてやはめて　相待給ふ　ところに
A三郎との　けちにし　かひて人々はかたて矢はめて★　待　ところに
C　★いまや〳〵と

C 鹿　三十二三つれて　いてきたり三十三人の人々一　つゝこそ　とめに
B しか　三十二三つれて　出　来たり三十三人の人々一つゝこそ　とめに
A しゝこそ三十二三つれて　いてきたれ三十余人はこれを一つゝ　いとめ

C けれ　ねの刻　計　におよひてむら雲さつとたなひきて　いかつち
B けれ　ゐのこくはかりにお　ひて村　雲さつと　なひきて　いかつち
A たり★祢のこくはかりに成　てむら雲　たなひきて　らひてん
★さるほとに

C おひたゝしくなりさはくちしんけはしく　天地　と　そ
B おひたゝしくなりさわく地しんはけしくて天地　ひとつになれ　とこそ
A おひたゝしくして　地しんはけしく　天地も一　になるかと　そ

C もみたりける　人々　心　はたけく思　ひ給ひしかともたましゐをけし
B もみ　けれ　人々　心　はたけくおもひ　しかともたましゐをけし
A おみたりける★人々はこゝろはたけくおもへ　ともたましいをけし

C　弓矢をすて　ふし給ふやゝしはらくありけれはつの三　おいたるあ
B　弓矢をすてゝ　ふし給ふやゝしはらく有　けれはつの三つおゐたるあ
A てそ弓矢をすてゝそふし給ふ　しはらくありて　角三　おひたる霰★されは

C られ　さつとふつて　はれ月はもとのことく　かゝやく屋くらの人々
B られ一むらさつとふりて　はれ月はもとのことく　かゝやくやくらの人々
A　一村　ふりてさて晴★月はもとのことくにかゝやく　人々

C すこし心ちをなをしてかくて矢はけて待　給ふ　ねの刻　に及　て
B すこし心ちなをしてかたてやはけてまち給ふ　ねのこくにおよひて
A すこし心　をなをして　矢を★待給ふまた祢のこくはかり成て

C 南のかたの山のはより　からかさはかりの雲たち出るかと見えしかは
B 南の方　からかさはかりの雲たち出つ　と見えしかは
A 南の方の山のはより　唐笠はかりの雲たち出る　と見えしかは★とりあはせて

C 程　なくひきおひ雲　のうへに　大おんあけて　あら人くさやよき人
B　ほとなくひきおひ雲　の上　に　大音　あつて　あら人くさやよき人
A　くもの上　より大音　あけて　あら人くさやよき人

C しきにして心ちをなをさんすらんうれしさよとて　屋くらのうへに
B しき　して心ちなをさんすらんうれしさよとて　やくらのうゑに
A しき　して心ちなをさんす　とて　矢倉　のうへに

C 舞　さかる　と見へけれは　太ら殿二ら殿　二人の人々三ら殿はなきか
B まいさかるかと見えけれは　太郎殿二郎殿　二人の人々三郎殿はなきか
A まひさかる　と見えけれは　あにのとのはら二人のたふさをつかんて

C たけ給へとそさけはれけるその時　三ら殿七人はりに十七□□
B たけ給へとてさけはれけるそのとき三郎殿七人はりに十七そく
A 空へさかる　其其時　三郎殿七人はりに十七束の

C 神　通のかふら矢をさしはけ　よく引　てはなち給ふ手もとに　こたへ
B しんつのかふら矢を　はけて　よくひきてはなち給ふてもとに　こたへて
A 神　通のかふら矢をとつてつかひよつひき★はなち給ふ手にものをこたへて

C ものを　そいおとしける　明る　を遅　しと待　給ふ太ら殿二ら殿を始
B 物　をこそゐおとしけれあくる日をおそしとまち　給ふ太郎殿二郎殿をはしめ
A　いをとすされはあくるをおそしとそ★太郎殿二郎殿をはしめ

C　★まちたまひけるほとに
B
A

C として三十二人のとのはら　むなしくなり給ふ　三ら殿の　父よりゆつり
B として三十二人の殿　原　むなしくなり給ふ　三郎殿　父よりゆつり
A て卅余　人　殿　原　皆むなしく成　給ふ　三郎殿★父よりゆつり

C　給　ひ　しきすいのはなのたね水にてそゝき　しゆはんちやうのつへを
B　給　し菊水　のはなのたね　しゆはん杖　のつゑを
A たまひたりし菊水　の花　の種を水に　そゝきて★おゝきになけきて其時

C もちてみ　なて給ひしかは　人々みな／よみかへり給ひけりそのゝ
B も　て三　なて／給へは　人々みな　よみかへり給　けり其　後
A 持　て三度なてたまふほとに人々みな　よみ帰　りぬ　其　の★口にいれて

C ちほしいゝをあらひて進　め給ひけれは　人々ほんの心　にちうして
B ちほしい　をあらひてすゝめられけれは　人々本　の心　に□し
A　ほしゐ　をあらひてすゝめられけれは　もとのこゝろになりぬ

C　天も明　けれはいおとしつる物を見給へは　うてのめくり　四尺八すん
B　天もあけゝれはゐをとしつる物を見給へは　うてのめくり　四尺八寸
A ★天もあけれはいをとしたる物を見給へは　うてのまはりは　四尺八寸

C ★さてこかうの　をそいきりて落　され
B 有るかいなのゆひは十二おひたりける　をそゐきりておとされ
A 有ける　おいたりける　手をそい　をとす

C　身のけ　よたつてそ見給ひ　ける　三ら殿此手のぬしを
B　身の　よたつてそ見給ひ　ける　三郎殿此てのぬしを
A たり人々　たり人々　見えたりけるやかて　ぬしを

C 尋　太ら殿二ら殿上下の人々みなおくし給ひて　かなはし
B　んとの給へは　太郎殿　上下の人々みなおくし給　て　かなはし
A たつねんとの給へは　太郎殿　一家の人々　おくし　て　かなはし

C とのの給へは三ら殿　しきりにすゝみ給へは太ら殿二ら殿　てを見た
B とのの給へは三郎殿　□□すゝみ給へは太郎殿二郎殿　手をみてあれ
A とのたまふ　三郎殿はしきりにすゝみ給ふ　あにの人々は★手を見た　れ

C はぬしを見たる　同　し　こと　ゝの給　ふ　こゝに三ら殿おちあひ給ひ
B は主　を見たる　おなしき事　との給　ふ　こゝに三郎殿をちあひ
A は主　を見たるもおなしきことなりとのたまふ★こゝに　おちあひ給ひ★其時に三良との

C て　くろひめのとりゐの前　にてはまさしくふしつの科　に兼　家か
B て　くろひめのとりゐ　まえにてはまさしくふしつのとかにかねいゑかか
A て★くろ姫　の鳥　ゐのまへにては　ふしんのとかに兼　家か

C 知行　のところをとらんと仰候しもの　を此手のぬしを　尋　しと
B ちきやうの所　をとらんと仰候ひし物　を此手のぬしを　たつねしと
A 知行の分　をとらんと仰ありしものを★手の主　をはたつねしとは

C 仰候はゝをそれは候へともかた〳〵の御知行　兼　家
B 仰候はゝおそれは候へ共　かた〳〵の御ちきやう　ふんを半分つゝ給てかね
A おほせ★おそれ候て候へとも方　々の御ちきやう　はんふんつゝ給て兼　家

C 知行　★候やさやうに候はゝ　太郎殿たうりに任せ
B ちきやう　つかまつり候へしとの給　ひけれは　太郎殿道　理につけて
A 知行　仕　つかまつるへきことの給　ひけれは　太郎殿道　理にまけて

C しはらく思ひあんしておほしけるは　かうかのものともこそ魔王
B しはらく思ひ案　しておほしけるは　かうかの物　ともこそまわう
A 案　して仰られけるは　かうかのものともこそ広王

C の物を見んとて　弟　は尋　んといひけるを兄のものともおくひやう
B の物を見んとて　をと〳〵はたつねんといひけるをあに物　ともおくひやう
A を見ぬとて★おとゝは尋　んといゝけるをあにのものともほく

C にして　たつねしといひて　あますへ所領　をわかれて知行
B にして　ゐにたつねしといゐて　あまつさへ所領　をわかれてちきやう
A してつゐにたつねぬといはれ　あまつさへ所りやうををとゝにとらせて

C せらるゝならは人　にはれんことこそ末代までも口　惜　けれ　命に
B せらるゝなれと人々にゐはれん事　こそ末代までも口　惜しけれ　命に
A 帰たると　いわれんことこそ　くちをしけれ

C かへても弓　取　の名こそおしけれとおもひかへして　さらはいさや
B かへてもゆみとりの名こそおしけれとおもひ返して　さらはいさや
A とおもひかへして　いさやさらは

C 尋　んとて　あしのあとを見つけて御覧しけれはよこさま三尺六寸
B たつね　んとて　足のあとを見つゝ御覧しけれはよこさま三尺六寸
A たつねみんとて　あしの跡　を見付て　見給へは　よこさま三尺六寸

C たてさま四尺八寸ありけり　あとをたつね　見給へは　一二丈あゆみ
B たてさま四尺八寸有　ける　跡を尋　ねて見給へは　一二丈あゆみ
A たてさま四尺八寸有　あとを　見給へは　三　町あゆみ

C たる所　もあり二三丈　にまたかりたる所もあり　十里はかり尋
B たるところも有　二三ちやう　またかりたる所もあり　十里はかり尋
A たる所　もあり　扨十里はかりたつね

C て　くろひめのとりゐの前　にてはまさしくふしつの科　に兼　家か
B て　くろひめのとりゐ　まえにてはまさしくふしつのとかにかねいゑかか
A て★くろ姫　の鳥　ゐのまへにては　ふしんのとかに兼　家か

C 入て見給へは高　さ四十丈　四方　なる岩屋ひとつ
B 入て見給へは高　さ四十丈　よこさま四十ちやう　ほうなる岩屋ひとつ
A て見給へはたかさ四拾ちやう横　三十ちやうはかりなる岩屋ひとつ

C こそ見つけたれ　岩　屋の口　にて　聞　給へは大　きなるいきを吹
B そ見つけられる　いわやのくちにて　聞　給へはおほきなるいきをふき
A こそ見つけたれ★いはやの口　にてたちきゝし　給へは太　なるいきをふき

C いたして　あらやすからすや　おほ　くの人を取　てえしきにしつれ
B いたして　あらやすからすや　おゝ　くの人をとりてえしきにしつれ
A いたして申けるはあらやすからすや　そこはくの人をとつて　しき　したれ

C とも　これほと手こはき衆生　こそいまたあはさりつれ　そく
B とも　これほとてこわき衆生をこそいまたあはさりつれ　そく
A とも　是　程　手こわき衆生に　いまたあはす　おほく

C はくの人たねをほろほしつる　身つからか手を　切　れつる　やす
B はくの人たねをほろほしつる　身つからかてをいきられつる　やす
A の人たねをほろほしつるにみつから　をいきられぬることのやす

C からす　かゝすへきそと　たけりける
B からすさよこはいかゝすへき　とそたけりける
A からす

C 三ら殿此よしを聞　給ひて　如何なる物そ　此岩屋のうちに　聲　するは
B 三郎殿此よしをきゝ給　ひて　いかなる物そ　此岩屋のうちに　こゑするは
A 三郎殿此由　をきこしめして　なにものそや　此岩屋のうちにてこゑするは

C 如何なるまゑんの物なりとも　出　よくわいんをむすひてゐるへき也
B いかなる広ゐんの物なりともはやくいてよくわゐんをむすひてゐるへきなり
A ★まかりいてよいてすんは☆なけいれて唯今宮のうちにてほろほさんす
とせめ給へは叶　はしとやおもひけん十七八の男　のゆう　なるに
とせめ給へはかなわしとやおもひけん十七八のおとこ　のゆふ　けいなるに

C へんして　せいかうの大くちにしろかたなさして　こちくのよこ□え
B へんして　せいかうの大くちにしろかたなさして　こ竹　のよこふゑ
A へんして　せいかうの大くちに白　刀　なるに□　よこふゑ

C さしそへて　つまくれなゐのあふきひらき　岩屋の戸をおし開
B さし添　て　つまくれなゐのあふきひらき　家　の戸をおし明　て
A さし添　て　くれなゐのあふきひらき　石　の扉を　あけ

C いかに候とて　まことにうちゑみて對面す　三ら殿　けしからすと御覧しけ
B いかに候とて　まことにうちゑみて対面す　三郎殿　けしからすと御覧しけ
A いかに候とて　まことにうちゑみて對面申　三良とのけしからすに御覧して

A れはたしかにをのれか本躰になれとせめ給へはいかに　おほせ候哉覧
B れはたしかにおのれの本躰になれとせめ給へはいかにかく　はおほせ候やらん
C のたまふ　いかにかやうに仰られ候やらん

A みつからはこの山の　もくし大ゆふと申て　八十　あまりにまかりなる
B みつからは此山の　もくしたゆうと申て　八十　あまりに罷　成候
C それかしは此山のあるしもくし太夫　申候而年八拾にあまり　候

A か　こにももくし三らと申候ものにて候也　と申
B　こに　もくし三郎と申　物　にて候なりと申　いてゝ　ほんふにて
C ものゝ子に　もくし三らと申　ものにて候なりと申★　いて　ゐて／／凡　夫にて　ほんふにて

A あるかなきか見んとて十七そく　よくひきてはなち給　へはちのあ
B あるかなきかみ見　とて十七そく　よくひきてはなち給　へはちのあ
C あるかなきかみんとて十七束　の矢つかをよつ引　てはなちたまへはちのあ

A ひたを　つ　とい　ぬき給ひて　うしろへ石　の戸ひらにやゆるきして
B ひ　を　つゝとゐつらぬかせ給て　うしろのいしのとひらにやゆるきして
C ひ　を　つ　といとおして　後　の　戸板　に

A たちにけり　きやつはされともち　ともしらます　三ら殿　いよ／／
B 立てたり　きやつはされともちつともしらます　三郎殿　やゝ／／
C いたてたり　三郎殿はいよ／／

A あやしくおもひ　てのこり　三十三人　い給　へと下知し給ふをの／／
B あやしく思い給てのこりの三十三人【脱文・目移カ】
C あやしとおほして　のこりの人々にもはやくいたまへとおほせけれは面々に

A ひきつめ／／い給ひけれとも　ぬきては　すて／／しけり　三十
B 引　つめ／／いけれは　矢をはぬきてうちすて／／しけるか三十

A 三　の矢めよりなかるゝちはたゝうかみにて　おしのこひとこ　に候
B　のやめよりなかるゝちはたゝうかみにて　おしひたしいつくに候
C あまりの矢めより　いつるちおひたゝしく　あれともおしのこいて

A ほんふにて候ものをとてちともさわかさりけれは　三ら殿あら
B ほんふにて候物　をとてちともさわかさりけれは　三郎殿あら
C　ちともさはかす　三郎殿このやとはらを

A たてゝはかなはしとおほして　すかされけり　や　との　まわうはさな
B たてゝ　かなはしとおほして　すかされけり　や　との　まわう　さな
C たてゝは叶　ましとおほして　すかされける　山　の　王との　さな

A きたに　まゑんの物　はつみ　ふかきに　あれほとの手をおひて
B きたに　まゑんの物　はつみ　ふかきに　それほとのてをおひて
C きたに　まゑんのものはつみのふかきに　それ程　のて　おいて

A はかなふましき　いそきけんたい　になり給へ　我ら　見てとふらひ
B はかなふましき　本躰　になり給へ　われ／／見てとふらひ
C かなふましそ　たゝもとのすかたになり給へかし我等　見★とふらひ

A 申　さんとの給ひけれは　すかされて　いつのまにか　成　ぬらん
B 申　さむとの給ひけれは　すかされて　いつの間に　なりぬらん
C 申候はんとの給へは　すかされて　いつのまにか　なりぬらん

A そのたけ五丈　計　にたちあかり　八のおもて八方　にうちふり　十六
B そのたけ五ちやうはかり　たちあかる　八のおもて八はうに打　当り　十六
C そのたけ五ちやうはかりにたちあかりて八めんの　八方　にうちふりて十六

A の眼　を見ひらきて百　のつのをふりたて
B の眼　をみひらき　百　のつのをふりたて
C のまなこを見ひらき　百八の角　をふりたてゝ★

A なのらしとおもへともよくきけ我　はいかなる物とか思ふきりん國　のぬし
B なのらしとおもへともよくきけわれはいかなるものと★きまんこくのぬし
C なのらしとはおもへとも　なにものそとおもふかゆいまん国のあるしに

A 八めん大わうの三なんきりん　わうとはみつからかこと也　この山におも
B 八面　大わうの三　麒麟　王　とはみつからの事　なり　此　山におも
C 八けん大王　の三なんきりん王　とは　わか　こと也　越

A むきし事　は　ちゝの大わう　太ら殿　みかとの一の　ひめ宮　をとりて
B むきし事　は　ちゝの大わうのたうとのみかとの一の　ひめみやをとりて
C　しことは　ちゝ　大王　の太郎殿　みかとのひとり　ひめきみをとりて

A ひさうしてをき給ひしを　あまり　うつくしかりし間　ぬすみて
B ひさうしておき給　しを　あまり　うつくしかりしあひた　ぬすみて
C ひさうしておきたりしを　あまりにうつくしかりしあひた　ぬすみて

A　しき　したりしゆへに　ふつほうにこまうなし　まわうにわう
B　しき　したりしゆへに　ふつほうにこまうなし　まわうにわう
C ゑしきにしたりしゆへに　仏　法　にちかつかす　まわうに王

A′ たうなしとこそ申たれ　ぬすみ心　ありとて　ふけうせられて
B たうなしとこそ申けれ　ぬすみこゝろ　有　とて　ふけうせられて
C たうなしとこそ申に　ぬすみこゝろをありとて　ふけうせられて

A 此國におもむきて一千歳を一日とし三萬五千歳　にまかり
B 此国におもむきて　一千歳をへる　三万五千さひに罷
C 此国にこえて　一千歳をへて　三万五千さいにまかり

A なる也　今五百歳　をたもたすしてをのれらか手にかゝりて四萬
B 成たり　今五千歳　をたもたせすしておのれ　かてにかゝりて四万
C なる　今五千さいをたもたすして

C 劫をつくさん事　かなしさよとてもをのれらか
B 劫をつくさん事の　かなしさよとてもおのれら
A うせんことことそかなしけれされはおのれ　を　一人ものこさすえしき
C 壱人もなくみな忝しき
B にせんする物　をとて三十三人の人々に　かゝる　をの〳〵あやまち
A にせんする物　とて三十三人の人々　かゝる　おの〳〵あやまら
C にせんするものをとて三十　人の人々に争かゝりける
B せられ給ふなしりそき給へとの給へ　は太ら殿二ら殿をはしめとして五
A れ給ふなしりそき給へとの給ひけれは太郎殿二郎殿　はしめとして五
C ちやう計　のき給ふ　三ら殿にわうたちにたち給ひて　つるきに
B 丈　はかりのき給ふ　三郎殿仁わうたちに立　給ひて　つるきの
A　そのとき三郎殿にわうたちにたち　御つるきに
C ほう　をむすひて　きりんわうになけかけ給ふつるき舞　あかりて
B 法　をむすひて　きりんわうになけかけ給ふつるきまいあかりて
A ほうのいんをむすひてかけてきりん王になけかけ給ふつるきまいあかりては
C きりんわうかくひ　うちきりて　地に　落　すしんてんにあかりては又
B きりんわうかくひを打　切　て　地には落　す　天　にあかりて
A きりん王　か頸　をうちおとす★地にはおちすして空　へあかりては又
C もとのことくにつかはる　ゆんてよりうつもつかはる　めてよりうつも
B もとのことく　つかはる　ゆんてよりうつもつかわり　めてよりうつも
A もとのことく　つかわる　ゆんてよりうつもつかわり　めよりうつも
C つかはる　三ら殿つるきをまねきよせて　ほうをよく〳〵　さつけられ
B つかはる　三郎殿つるきをまねきよせて　法　をよく〳〵　さつけられ
A つかわる其時三郎殿つるきをまねきよせて又ほうをよく〳〵ふくめられ
C たりつるきしらます　たゝかひたり十八度まて　そ　つきたりける
B たり劔　しらます　たゝかひたり十八とまて　そ　つきたりける
A たり★しらますしてたゝかいたり十八とまてこそくひをはつきたりける
C されとも　たひかさ　なりけれはちからおよはす　なをもしたへはおちす
B されとも　とゝかさるなりけれはちからおよはす　猶　もしもへはおちす
A されとも　てにたひかさなる★　なをも下　へはおちす
C してくもへあかるとて　むくろにあひていゝけるは　むくろとの　わとの
B して　あかる　むくろに相　ていひけるは　むくろとの　わとの
A して空　へあかるとて　いゝけるは　むくろとのよむくろ
C はなにゝなり給はんそ　我　は空　にあかりてあふかのみといふ物になり
B は何　になり給はむそ　われ　は空　にあかりてあふ蚊★　といふ物になり
A 何　になりたまふそやわれらはそらへあかりてあふはちのみと★のみしらみ　なり

C 生をくはんと思　むくろはくちはみひるといふ物に
B 生をくわんとおもふなり　むくろはくちはみひるといふ物に
A くはんとおもふなり★口はみひるむかてといふむし　に
C て末也　の世の衆生をくはんと思　ふ也　の空へあかり給へ我は地ありて
B て末のよのしゆしやうをくはんとおもふなり　て王との　わとの　は空へもあかり給へと
A て末の代の衆生をくわんとおもふなりとて　て　の世の衆生をくわんとおもふなりとて　わとの　そらにあかり給へと
C 下にてこたへけり　さて山のかたへそさゝめきてはらはひを　する
B 下にてこたえけり　さて山の方へそさゝめきてはらはひをそする
A　山の奥　へ　むけてそ　はいうせにけり
C さて　三ら殿しやきやうの人々にきりんわうはつたなうしんつ　この
B さて　三郎殿舎　兄　王　はつゑたうし候ぬ　此
A さるほとに三郎殿　仰けるは　人々に麒麟　きりん王　はうちとりぬ
C 岩屋のうちに入て御覧候へと申給　へは　とこに候おもひもよらぬ
B 岩屋の内　に入て御覧候へと申給　へは　こゝに候おもひもよらぬ
A 岩やのうちに入て御覧候へとのたまへは太郎殿は　思　ひもよらん
C 事に候わとのたにもいり給はすとの給へは　三ら殿さらは入てみんとて
B 事に候　とのたひ入　給はすとの給へは　三郎殿さらは入候はんとて
A ことなり御へんたに入★三郎殿さて　我等いりて見候はんとて岩屋のうちに
C 入給へはおりものゝへりさしたるたゝみ十てう計　しき　たり　したんの
B 入給へはおりもの　へりさしたるたゝみ十帖　はかりしき　たり　したんの
A ★給へはおりものゝへりつけたるたゝみ十てうはかりしきおきたり　したんの
C ★入て見　にしきのふすまをおきたり　これはたゝいまきりんわうか
B けうそくに　にしきのふすま　をきたり　これ　たゝいまきりんわうの
A けふそくに　にしきのふすま★　たりけり　これは　きりん王　の
C 住　たる所　★をそへておき　と見えたりあたりを御覧　すれはあゆみの板　三まいしき
B 住　たる所　と見えたりあたりを御覧　すれはあゆみの板　三枚しき
A やすみたるところと見えたり　あゆみの板　三まいしき
C たる所あり三ら殿あや　しと　ひきのけて見給へはあなこそありけれ
B たる所あり三郎殿あやうしとおもひてひきのけて見給へは穴　こそありけれ
A たる所あり　あや　しと思　ひて板をあけて見給へは★あなこそあ　れ
C 三ら殿弓　をいれて御覧しけれとも　弓のはすにもさはらす　三十　★あなる
B 三郎殿ゆみを入て御覧しけれ共　弓のはす　もさわらす　三十
A 御　弓　をいれて見給へは　弓のはす　とつかす　其時三十
C 三人の人々の弓　のつるをはつして　のへてはおとし〳〵聞　しめしけれ
B 三人の人々のゆみのつるをはつして　のへてはおとし〳〵きこしめしけれ
A 余人の　弓のつるをはつして　つきて　おとし

C　ともおちつく所も聞えす　このあなはきはもなく深きあな也
B　共　おちつく所も聞えす　此　あなはきわもなく深き穴　なりとて
A　ともをちつかす　其時此　あなはきはもなき　あな成　とて

C　ふちをたちよせてつきて　おとし　けるほとに七千ひろそ　おとしたる
B　ふちをたちよせてつきて　おとし　けるほとに七千ひろそ　おとしたる
A　★★をたちよせてつきてはおとし☆けるほとに七せおひあまりそをとしたる
　　★ふちかつら　三らの殿　の給ひけるはあらいゝしのあなのふかさや　此あなのそこに
　　其時三郎殿　三郎殿の給ひけるはあゝゐゝしの穴　の深　や　此あなの底　に
　　仰られけるはいかめしくふかきあなかな　★★いかさま

C　ふしきはあるらん　なにとしてか此あなのそこを見んと思　ひ給ひて
B　ふしきは有　らん　何　としてか此あなのそこを見むとおもひ給ぬ
A　ふしき　あるらん　いかゝしてかこの穴のそこを見ぬとおもひ給ふところに

C　まことや弓取は四十八のあんのある　物をあんしてみんとて　一時あんして
B　まことに弓取は四十八の案の有　成物を案んして見んとて　一時案　して
A　まことや★四八あんしのあるなるものをあんしてみんととて一時あんして
　　★弓矢とる者は

C　の給ひけるは　此山にあるらん　かつらをたちてこよとて　たちよせて
B　の給ひけるは　此山にあるらん　かつらをたちてこよ　たちよせて
A　の給ふは　此山にあるらんさねかつらをたちてこよとて　とりよせて

C　大　つなをいくらともなくうたせて　すかりといふ物　を人二三人のる
B　大　つなをいくらともなくうたせて　すかりといふ物　を人二三人乘
A　おゝきにつなをいくらともなくうたせて　すかりといふものを人二三人のる

C　ほとにこしらへて　おほつなのすゑにつなかせて　三ら殿太ら殿に仰
B　ほとにこしらへて　つなのすゑにつなかせて　三郎殿太郎殿に仰
A　ほと　こしらへて　大　綱をつけておとしいれて　三郎殿太郎殿におほせ

C　られけるは此すかりにのらせ給ひて穴　のそこを御覧　候へと申されけれは
B　られけるは此すかりにのらせ給　てあなの底　を御覧　候へと申されけれは
A　られけるは此すかりにのらせ給　てあなのそこを御らん候へと申されけれは

C　わとのたに　のりの給はす我ら　のらんこと★との給へは　さらは兼　家
B　わとのたに　のりの給　すわれ／＼のせん事　★との給ひけれは　さらはかね家
A　わ　とのたに　いりたます我は叶まし　との給へは　さらは兼　家
　　★ABおもひもよらす

C　のりてみ　んとてすかりにのりつゝおとし給へもしあなのそこにふしきも
B　のりてみ　候らんとてすかりにのりつゝおとし給へもし穴　のそこに不思議も
A　の　て見候はんと　し給に　もしあなのそこにもいりていかなることに

C　まふりにはたの小袖　をそへてこれを
B　ありてかへらぬ事　もありとて　まふりにはたのこそてを添　て是をは
A　有　て帰　らぬ事　も有　とて　あいてかへらんこともあるとてはたのまふりとはた　小袖　をは

C　北のかたにつけてたひ候へ　こしの刀　をは今年四歳になり候亀一わらはに
B　きたの方へつけてたひ候へとこしのかたなをは今年四歳になり候亀一王に
A　きたのかたへとつけて★候へかたなをは今年四になり候かめいちわらはに

C　たひ候へとてしたひのかたまはり　をは二人のしやきやうにあつけ　すかりに
B　たひ給へとてしたひの形見　をは二人の舍　兄　にあつけてすかりに
A　たひ候へとてしたひのかたみの★をは二人　あにゝとつけてすかりに
　　★ものとも

C　のり給ふ取　のへ／＼　おとしたりすてに六ちにおちつき給ひてすかりの
B　のり給ふとりのへ／＼　おとしたり　陸地に落　付　給　てすかりの
A　のり給てさて人々のつなをおとし★　ほとに六ちにおちつき　て　あなの
　　★いれたりける

C　うちをおりて見給へは我　朝の月夜はかりのあかりに南のかたとおほしき
B　内　をおりて見給へは我　朝の月夜はかりのあかりに南のかたとおほしき
A　うちを　見給へはわか国の月夜はかりにあ　りて南のかたとおもふ

C　所　にあゆみ入て見給へは御所作　りして人のすむていも入　て見給へは
B　ところにあゆみ入て見給へは御所つくりして人のすむていなりいかて見給へは
A　所　に　ゆき　て見給へは御所つくりして人のすみてゐたり

C　一のつほね　かうらいへりのたゝみ百てうはかり敷たり　から草つけたる
B　一のつほね　かうらいへりのたゝみ百てうはかり敷たり　から草つけたり
A　一のまには　かうらいへりのたゝみ百てうはかり敷て

C　こき紅の錦のへりさしたるたゝみ百てうはかりしきたり七　八　十二三
B　★にしきのへりさしたるたゝみ百帖　斗　敷　たり七ツ八ツ十二三はかり
A　★こいくれなひの　七　八　十二三はかり

C　のわら　へをぬかこさしにさして百くしはかりをきたり二十四五
B　のわらはへをぬかこさしにさして百くしはかりをきたり二十四五
A　のわらはへをぬかこさしに　百くしはかりとりをきたり廿四五　三十四五四十三十

C　よりうちのをんな　をは人ふくさといふ物　にして　百れんはかりあみ□□
B　よりうちの女房　をは人ふくさといふ物　にして　百れむはかりあみかけ
A　はかりの　おんなこをは人ふくさといふものにして　百れむはかりあみかけ

C　たり七重の屏風八重の木丁　九重のまく　十　重のみすうちあけ
B　たり七重の屏風八重の几帳　まん　十　重のみす打　あけ
A　たり七重の屏風八重のきちやう　まん　たう一のみすうちあけて

C　かきあけて七つほ　一　々　に見給へとも人もなしかたはらを　聞給へはとし
B　かきあけ七のつほいろ／＼に見給へは　人もなしかたはらにて聞給へは年
A　七の★★めに御らんしけれとも人もなし　かたはらにてたちきゝし給へは年

C　のほと十二三　とおほゆる
B　の程十二三　はかりとおほしき
A　のころ十二三　とおほしき
　　★一まを

C　ひめ君の御聲にて法華経を　よみ給ふ
B　ひめきみの御こゑにて法花経を　よみ給ひて
A　姫君のこゑにて法華経をそよみたまふ　三ら殿あやしみ給ひて
　　三郎殿あやしとおもひて

C　うちに入て見給へは姫君十二ひとへをめしてすいしやうのしゆすを
B　内に入て見給へは　ひめきみ十二ひとへをめして水精のの珠誦を
A　いりて御覧すれは十二重きたるひめ君の　すいしやうのしゆすを

C　てにぬききやうをよみ給ふ三ら殿御覧して　まゑんの物にてそある覧
B　手にぬき経をよみ給ふ三郎殿御覧して　まゑんの物にても有覧
A　手にぬきて御経をよみ給ふ三郎殿★　まゑんの物にてそあるらん

C　とて三尺二寸の太刀をぬきさしあてゝ仰られけるはまえんの物
B　とて三尺二寸の太刀をぬきさしあてゝ仰られけるはまゑんの物
A　とて二しやく二すんのつるきをさしあてゝおほせられけるはまゑんのもの

C　ならはたしかに本躰になれ　その儀なくは命　をたゝん　との給へは
B　ならはたしかに本躰になれ　其儀ならは命　をたゝむ　との給へは
A　ならはたしかにもとのすかたに★そのきなくはいのちをとゝめんとの給へは

C　我はまえんの物にては候はす日本國花のみやこに一条の大納言
B　われはまゑんの物にて候はす日本国の花の都に一条の大納言
A　姫君★まゑんのもの物にて候はす日の本の国の花の都に一条の大納言

C　のちやく女にて侍しかこの所のぬしきりんわうにとられこの三とせのほと
B　の嫡女にて侍しか此所のぬし麒麟王にとられて此としのほと
A　のちやく女にて候へしか此所の主きりん王★にとられて此三年かほと

C　うちこめられて候間日本の人と見たてまつれは★と申摩の手あまりになつかしく
B　打こめられて候間日本の人と見たてまつれは　あまりになつかしく
A　おしこめられ侍る也日本の人と見まいらせ候とて

C　こそおもひまいらせ候へあやまちせさせ給ふなとかなしみ給へは
B　こそおもひまいらせ候へあひまちをさせ給ふなとかなしみ給へは　三郎殿も
A　　かなしみたまふ

C　さすかにあはれとおほして　まことにさる事　もあるらんさらはたすけて
B　さすかにあはれとおほして　まことにさること　有覧　さらはたすけて
A　さすかにあはれとおほしけれは　さることもあるらんさらはたすけ

C　奉らん　きりんわうをはやうちて候そ日本の國へかへりたくおほしめさは
B　たてまつらんときりんわうを打　て候そ日本　国へ帰り度　おほしめさは
A　たてまつらんとてきりん王はやうちとりて候也もとの国へ御帰り候へき★

C　かへしたてまつるへしと仰られけれは　ひめきみよろこひ給ひ　さて
B　帰し可奉と　悦給ふ事かきりなしさて
A　帰しまいらせ候はんと仰られけれは　姫君　ひめ君　よろこひ給ひて　さて

C　三ら殿とすかりにのらせ給ひてあからせ給ひぬ　おもはすに姫　きみなけ
B　三郎殿とすかりにのらせ給て　あからせ給ひぬ　おもはすにひめきみなけ
A　三ら殿　すかりに乗りて　あかり　給いぬ★　おもはすにうちなきたまひ

C　き給ふけしきなけれは三ら殿こはいかにあなのそこのすまゐの　なこり
B　き給ふけしき見えけれは三郎殿こはいかに穴のそこの御栖の　名残
A　　けれは三郎殿こはいかにあな　そこのすまい　なを名残

C　おしくはしおほしめされ候やその儀ならはやすきほとの御事　帰しいれ
B　おしくはしおほしめされ候やそのきならはやすきほとの御事也　帰しいれ
A　おしく　おほしめされ候やそのきならはやすきほとの御事也　帰しいれ

C　たてまつらんとの給ふ　ひめ君　涙をなかしての給ひけるはその儀にて候
B　たてまつらんとの給へは姫　ひめきみ涙をなかしてのたまひけるはその儀にては候
A　申候はん　との給へは姫　君　御なみた★　被仰けるは　其儀にて　候

C　はす父より給はりたりし八はなかたのからのかゝみをこかねのはこに入
B　はぬ父より給りたる　やつ花かたのからの鏡を　金の箱に入
A　はすわか父こせんより給て候し八　花かたのからの鏡をは　金の手箱　いれ

C　てにしき七重につゝみて命とともにおもひ　てすこしも身をはなさす
B　て錦　七重につゝみて命とともにおもひ　てすこしも身をはなさす
A　かたはらにをきて候つるを　御うれしさのこゝろ　まよひのあまりに

C　かたはらにおきて候つるを　うれしさのこゝろのまよひのあまりに
B　かたはらに置て候し　をあまりの　うれしさに心　のまよひて

C　とりおとし候か心にかゝりてあまりにかなしくおほえ候と仰せらるれ
B　とりおとし候か心にかゝりてあまりにかなしくおほえ候て候てなけき給へ
A　とりをとして候か　かなしく

C　は三ら殿けにもとおほして　さらはやすき　事なりかねいゑ入てとりて
B　は三郎殿けに　とおほして　さらはやすきほとの御事なりかねいゑ入てとり
A　は三ら殿けにもとおほしめしてさあらはやすきほとの御事也兼家いりて取て

C　まいらせん　とて又　あなのそこにそ入　給ふひめきみのおはしつるかた
B　参　せん　と　又　穴の底にそ入　給ふひめ君のおはしつるかた
A　まいらせ候はんとてまた穴　のそこに　いりたまふ姫君　のおはしつる傍

C　はらにあんのことくかゝみありけるをとりて　あからんとし給ひしに
B　はらにあんのことくかゝみ有　けるをとりて　あからんとし給へは
A　に　有　けるをとり　★すかりにのりて

C　太ら殿三ら殿に仰　けるはこのひめきみを見るに誠　にうつくしきひめきみ
B　太郎殿三郎殿に仰せけるは此　ひめきみを見るにまこと　うつくしきひめ君
A　太郎殿次ら殿に被仰ける　此ノひめ君を　見たてまつる★申におよはすされは　にうつくしき事★

C なり三ら殿　さる物なれはいかにいふともわれらにあてつくるへからすわか
B なり三郎殿　さる物なれはいかにいふともわれらにあてつくへからすわか
A 三郎殿はさるものなれは　われらにあてつくるへからす我らか

C 取てあかりたれはわかしんたい　せんとこそ申さんすれ　されは三ら殿をは
B 取てあかりたれは我　しんたひにせんとこそ申さんすらんされは三郎殿をは
A とりてあかりたるなとゝてしんたいせんとそ申さんすらんされは三ら殿を

C 此　あなのすもり　せさせんとおもふはいかにはからひ給へと仰られけれは
B 此　穴のすかりに　せさせんとおもふはいかにはからひ給　と仰られけれは
A このあな〳〵すもりにさせ候はんとおもひ候いかゝはからい★★　と被仰　けれは

C 二ら殿ともかくもしやきやうにてわたらせ給へは　御命　をいかてそむき
B 二郎殿ともかくも舎　兄　にて渡　らせ給へは　御めひをはいかてそむき
A 次郎は　あにゝこそ御わたり候へは　御めいを　そむき★たまふそ

C 申へきと　申されけれは　太ら殿よろこ　ひてすかり　なはをあなの
B 申へきと　申　けれは　太郎殿よろこ　ひてすかるのなわをあなの
A 申へからすと申されけれは其時太郎殿よろこ★★はせ給　ひてすかりの綱　をあなの

C そこにそおとしいれ給ひける三ら殿　のり給ひていつか引　あくる
B そこに　おとし入　給ふ三郎殿　のり給　ていつかひきあくる
A うちに　おとしいれたまふ　三ら殿はすかり乗ていつか引　あくる

C と　しきりになはをゆるかしてまち給ひけるに　おもひの外　に
B と　しきりになわをゆる　して待　給ひけるに　おもひのほか
A と　しきりに綱　をうこかしてまちたまへとも　おもひの外　に

C さなからなはを　おとしにけり　三ら殿かしこきをのこにておはし
B さなからつなをそおとしたる　其時三郎殿思ひ給ひけるは　三郎殿かしこきをのこにておはし
A さなからつなをそおとしたる　其時三郎殿思ひ給ひけるは　三郎殿かしこきをのこにておはし

C けれはいかさまひめきみに心　さしをなしてしやきやうの人々のはからひ
B けれは　いかさまひめ君　にこゝろ　うこかしてしやきやうの人々のはからひ
A 是は　いかさま様　ひめきみに心　さし　てあにのとのはら　のはからひ

C 也　とすいし給ひてんにあをきちにふし　なけき給　ふ事　かきり
B なりとして　天　にあをき地にふし　なけき給　ふ事　かきり
A なりと★★　たまひて天　にあをき地にふしてなけきたまふことい　ふに限

C なしさて　あるへきにあらねは　三ら殿　すかりのうちをおり給ひて
B なしさても有　へきならねは　三郎殿　すかりの内　をおり給ひて
A なしさて　あらんことなれ　は又三郎殿は

C せめての事に又御所へ入　て　ひめきみのおはし　つるところをこま〳〵
B せめての　又御所へ入　て　ひめ君　のおはし　つるところをこま〳〵
A 彼御所にいりて★★ひめきみのおはしましつるところを★せめてのことにや

C と御らんしけれとも　なくさむたよりもなし　しかいせんとし給ひけれ
B と御覧　しけれとも　なくさむたよりもなし　しかひせんとし給へ
A 御らんしけれとも　なくさむたより　なし　しかひせんとおもふこと

C ともかたな　なしかたみにとゝめつれはなし　たゝなき給　より外の
B 共　かたなも　形　見にとゝめつれはなし　たゝなき給ふより外の
A かきり　なし　なくさむたより　なし　たゝなく　よりほかの

C 事そなき　なみたのひまにかたはらを御らんしけれは　あゆみのいた
B 事そなき　なみたのひまにかたはらを御覧　しけれは　あゆみのいた
A 事そなき　なみたのひまにかたはらを御覧　しけれは　あゆみのいた

C 三まいしきたるところあり　三ら殿あやしみをなしておもふか心　くるし
B 三枚　しきたる所　有　三郎殿あやしみをなしておもふかこゝろくるし
A しきたる所　あり　三郎殿板を引あけて見たまへは太なるあなあり

C きに此のあなに身をなけはやとおもひてにしに　むかひて
B きに此穴に身をなけはやとおもひて西に　むかひて
A 此　穴　に身をなけはやと思　ひて西のかたとおほしめしてさしむかいて

C かうしやうに念佛となへ給ひて　生年廿　五と申せしにつゐに穴　に
B 高声　に念仏となへ給ひて　生年二十五と申せしにつゐに
A かうしやうに念佛を申て　生年卅　五と申　につゐにあなにそとひ

C 入給　ひけり　いかなるたかきはんしやくに　われあたりてこせんすらん
B 入給　ひける　□かなるたかきはんしやくにも　あたら　んすらん
A いりたまひけり　いかなる　岩　にもおちあたりてうせんすらん

C とおもひしかともさはらすして　幾千萬といふ事もなくおち給　ふ
B とおもひしかとも　いくせんはくともなくおち給　ひ
A と思給ひしに　さはるものなくしていく千万　ともなくおちたまふ

C あまりに久　しくおち　けれはうつふしになり　あをのけになりて　おち
B あまり　久　しく落給ひけれはうつふしになり　あをのけになり
A あまりにひさしくをち　けれはうつふしになりてはおちあはなきになりては

C そはさまになりよこさまになりおち給　ふ　たま〳〵たてさまに
B そはさまになり　落　給　ひ　たま　たてさまに
A そはさまになり　おちたまふ

C なる時　左右の　手をうちひろけてみ給へ共御手にあたる所もな□
B なる時に左右の　手を　ひろけて見給へは　てにあたる所もなし
A 左右の御手を　のへて　見給へは　さはるものなしされは

C 三ねん　におつなとゝいふはちまんちこくにおつる　こそかなしけれ
B 三年三月におつ　と　いふ八万地獄　におつるなりと思　い給ふそいたましき
A 三年三月といふなるに　八万地こくにおつるよ　とおもひ給て

C やゝ久しくおち給給へはねいりてはおち　おとろきてはおち／する
B 三郎殿久敷をちさせ給へは
A あまり久しくをちたまへはねいりてはをち　おとろきてはおち落給ふ

C ほとに いかなる岩はんしやくにか身をうちあて　そんすへきと
B ほとに いかなる岩屋をしやくまくに身を打　あてゝそんすへきと
A ほとに何所にもおちつきたりとも命はあらしと

C おもひ おもひの外に木の葉まششりのこすなはらにそおちつき
B おもひ給へは おもひの外に木の葉まششりの小すなはらにそおちつき
A おもひ給へは おもひの外に木の葉まششりの　すなはらに　おちつき

C 給ひ□る
B 給ひけ
A たまふ

C やゝ しはらくこゝろをしつめて東西をきつと　御覧　しけれは我朝
B 三郎殿しはし　心　しはらく心をしつめて東西をきら／＼と御覧　しけれはは我朝
A 三郎殿しはし　心　をしつめて東西お　御らんしけれはは我国

C の月のことく　ほからかに　いて給　ふさるほとに南のかたにみちあり
B のことくに日月ほこたてはかりゐて給　ふ去　程　に南の方　に道　あり
A のことくに日月ノ光ほとにたちそひたまふさるほとに南の方　に道　あり

C このみちをきたにむけてあゆみ給ふ　一時はかりあゆみ給ひて　くぬ木
B 此　大道を北に向てあゆみ給ふ　ひと時はかりあゆみ給ひて　くぬ木
A 此　道を北へむきてゆきたまふ　一　時はかり行て　くぬ木

C はらのはやしの中にゆきいて給ふ　此木を御らん　しけれは我　朝のくぬ木
B はやしの中へ行いて給ふ　此木□□□□見給へは我　朝の□□□
A はやしの中にゆきいて給ふ　此木を御覧　しけれは我か朝のくぬ木

C にはにすたかさ六七丈もあかりけるかやうのくぬ木はやし　を七里　はかり
B □似すたかさ六七百丈★　かゝる　くぬ木はやしの中を七里半はかり
A には☆高さ六七百ちやうもあかりける　櫟　はやし　を七里　はかり

C □きて御覧しけれは東　西に　みちありける　かゝる大たうのつしにゆき
B 行給て御覧しけれは東より西へ　道　あり　かゝる大道　のつしに行
A 行出て見れは東より西に又道　ありける　かゝる大道　のつしに行

C 出て　三郎殿心　のうちにおもひけるは六道のつしとはこのつしの事にや
B 出給ふ三郎殿心　の中　に思　い給ひけるは六道の辻とは此辻　の事にや
A 出て　三郎殿こゝろのうちにおもひ給ひけるは六道　辻とは此道のことかや

C 我朝にて人のかたりしはにしをこそしやうとはいひしかおな□くは
B 我朝にて人の語　しは西　とこそ浄　土と　いひしかおなしくは
A 我朝にて　語　しは爰　をこそこゆる　とは云　しか　わか

C つみのほとはしらねともしやうとにこそまいらめとおもひてきたへふみたる
B つみのほとゝはしらねとも浄土へとこそ参　らめと思い給ひて北へふみたる
A つみのほとはしらねともしやうとへこそまいらめと思たまふ　北へむきたる

C みちをすて　にしのみちをゆき給ふ四五日はかりゆき給へは山河のはたへそ
B 道　をすてゝ給て　にしの道へそ行給へは山川のはたへそ
A 道　をすてゝ　西　の道を　行給ふ四五里　ほと行て候へは山川ははたへそ

C つき給ふ　なかれにつきてさとはあるらんとくたり給ふ　七里はかり　行て
B 付給ふ　なかれにつきて里　は有らんとくたり給ふ　七日　行て
A 行出たまふ里はまはあるらんと★★なかれる水につきてくたり給ふに一時行て

C 見給へはあはたけに出給ふ★おもひて　すたかさ　五丈
B 見給へはあはたけに行出給ふはのやうはわか國□□□　四丈
A 見給へはあはたけに行いて給ふ粟のほは我か国にはにすして四五丈はかり

C ありけり　ほのなかさ　四五しやくはかりありけりあわのつふのせい七すん
B ありけり　穂のなかさ　四五尺六七尺はかりそ有ける粟のつふのせいは七寸
A あかりける本のなかさは四五尺六七尺はかり也　あはのつゝのせいは壱寸

C 五ふんそありけりあはは□たのなかにたかさ十ちやうはかりのいほやくら　かき
B 五分　そ有けるあはは畠の中に高　さ十丈　はかりのいほやくらをかき
A 四五分　ありける★★かゝるはたけのなかにたかさ十丈　はかりにしゝ矢倉　をかき

C て　八十はかりのおきなの七　まはり八まはりのまゆみをもちてすゝけたる矢
B て　八十はかりのおきなの七　まかり八まかりのまゆみ　すゝけたる矢
A て年八拾はかり翁　のなゝまかり　の　弓　に　すゝけたる矢

C を一一とりそへてあはのしかをあれ／／とそおふ三郎殿たちよりて　なふ
B を一一とりそへて粟穂のしゝをあれ／／とおふ三郎殿立より給ひて　いかに
A 二三取　そへてあはのしゝをあれ／／とそおい給ふ三郎殿たち寄て

C おきな　物申さんと申てそれかしはいつくより　いつちへまかり候つるそと
B 翁との　物申候はん　某　は何所　より　いつくへ参て　候つるそと
A 翁との物申候はん　それかしはいつくよりしていつかたへ　罷くるそと

C の□へはおきなおほせられけるは　けふかるとのゝことはかなきたりたるみち
B の給へは翁　申されす　るは　けうかな殿　の言　葉かな来　りたる道
A のたまへはおきなのたまひけるは　けふかるとのゝことはかな★来たりたまひ

C をはとのたにもしり給はすおきな　いかゝしてしるへきそとおほせられけり
B を　殿　たにもしり給　すおきなは何　としてしるへきそ
A を主　こそ　しり給ふへきに★★いかゝしてしるへきや

C そも／／とのはいつくの人そとはれけれは三郎殿日本　のものにて候とのの
B 抑　殿は何所の人そとはれけれは三郎殿日本国の物にて候そとの
A 抑　とのは何所の人とひけれは日のもとの国のものとこたふる時に

CBA 給★さる國　しらすとの給ふ　三郎殿まさしく候物をとしきりにの給へは
給ふさる国　しらすとの給ふに三郎殿まさしく候物をとしきりにの給へは翁
さる国はしらす

CBA ★へはさては　さらに　なしと
いてさら□くし□★ひきて見んとてくしやをひきて　なしと
いてさらは倶舎　を引　て見んとて倶舎　をひきて見るに
さらはくしやくを引て見んとてくしやろんを引て見給へはさる国はなしと

CBA ★といふ□
の給へはいとゝこゝろよはくそおもひけり★　とかさねての給　へは　おきな
の給へはいと　心　よはく　思　い給て★を と重て　の給　へは　翁
の給ふにいとゝ心　ほそく　おもひけり★★とて重而のたまひけるはさあらは

CBA ★ABCまさしく候物
よく／／見んとてこまかに見給へはしゅみのなんゑんふたひにあたりて小しま
能　く見　とて委　敷　見給て　須　弥の南　閻　浮堤　にあたりて小嶋
よく／／みんとてくはしく見給ひて★しゅみの南　にあたりて小嶋

CBA ★おほせられけるは
ひとつみえたり　國にはほそしまにはおほき也　日本ともあきつしまとも
★見えたり此島は国にはほそくしまにはおほきなり日本とも秋　津しまとも
☆見えたり此嶋は国にはをそく又嶋には太　なり○　あきつ嶋　とも
★一つありと　☆一有と　○日本ともなつけたり

CBA □つけたりさては　この國の人かとおほせられけれはさん候と申されける
名付　たりさては殿は彼　国の人かと仰　られけれはさ候とこそ申されけれ
なつけたりさては　彼　国の人かとありけれはさん候と申されけれは其時

CBA □なあはれみ給ひてさ　そ　つかれ□のそみ給ひてあるらん　あのあはの
おきなあはれみ給　てさ　そ　つかれにのそみ給　覧　と　あはの
おきなあはれみ給ふてさこそ★つかれておはすらん　しはらく粟の

CBA ★とのは
□□□□せたまへ　おきなやとにかへりてよくしをもとめてまいらせんと
しゝをおひ給へ　翁は宿　にかへりて食　をもとめてまいらせんと
しゝをいてたひ候へ　わか宿　へ行て　しき　をもとめて　めさせんと

CBA □□□□
の給へは
の給へは

CBA 三郎殿よろこひて　やくらにのほりて★やゝしはらくありておかしらともに
三郎殿悦　ひて　やくらにのほりて　しはらく有　て尾かしら
三郎殿よろこひ給いて矢蔵へのほりておはしますにしはらくありて

CBA 五いろはかり　のしかいて★あはのほをははますしてやくらにむきてきたり
五ひろはかり候のしゝ出来る粟　の穂を☆やくらにきたて三郎殿にむかひ
しこそ出来あはをくらひて　屋くらにむきてきたり
★きたりて　☆はまむとして
けり★おほせ給へとも　すこしもさわかす　ちかくよりけり三郎殿弓を
たり★をわせ給へとも鹿すこしもさわかすしてちかくよりけり三郎殿弓
けり三ら殿あれは／／とおひ給へとも獅子はちともさはかすしていよ／／☆
★AB三郎殿あれ／／と　☆近く寄ける其時翁の置たる弓を

CBA とりてやをはけひかんとし給へともこの間のつかれにひきかねてそおはし
とり　矢をはめひかんとし給へ共　此　間のつかれにひきかねてそおはし
とり　矢をはめひかんとし給へとも此　間のつかれにひきかねて　おはしまし

CBA ける三郎殿　せめての事に　あしにふまへひきてそはなし給ふ　まなこのあひ
けるしかるにせめての事に　足にて　ひき　はなち給ふ　眼　のかた間
けるか　せめての事にや足にて　ふんてそはなされけるまなこのあひ

CBA をいとをしてしろけのもとをつといいたし給ふしゝ一そくもひかすふしにける
をゐとをし　しろけのもとにつゝとゐ出し給ふ　一足　もひかすまろひぬ
をつといとをして白毛のもとにそいとをし給ふしゝ一足　もひかすまろひぬ

CBA 三郎殿　おきなをいまや／／とまち給ひしかは★おきな物をもちて
翁　今　や／／と待　給ふ　翁　物を持　て
扨三郎殿　をきなをいまや／／と待　給ふ処　ものもちて
★しはらくして

CBA いてきたる　見給へはもちたる物は★くみなわ　こしにつけてかま二
きたり　見給へはもちたる物は★くみなはを躰　につけてかま二つ
いてきたりしを見るに　くみなは　こしにつけてかま貳つ

CBA てにもちてきたり給ふ★　いとゝこゝろよはくおもひけりおきな日本の
手に持　てきたり給ふ★★はいとゝ心　よはく思　ひ給ひけり翁　日本の
もちて来たり給ふ★★はいとゝ心　よはく思　給ふ　☆おきな日本の
★ABC三郎殿　☆さるほとに

CBA 人これへおり給★とのの給へはいそきやくらよりおり給ふ　おきなの給ひ
殿これへおり給へとの給へはいそきやくらよりおり給ふ　翁　の給い
殿是　にをり給へとの給へはいそき　おり給ふ　翁　の給い

CBA けるはうはにて候人と申あはせ候へはこれにとゝまり給ふへき人ならは申に
けるはおはと　申合　候へはこれにとゝまり給ふ　人ならは申に
けるはうはに　申あはすれ　は是　にとゝまり給ふへき人ならは申

CBA をよはす日本にかへりたまふへきこゝろさしあらはこの國の物すこしもしきし
およはす日本　国へ帰り給ふへき心さしあらは此国の物　をすこしも食し
をよはす日本の国へ帰り給ふへき心さしあらは此国のものをはすこしもくい

CBA 給ふましきと申也　いかゝはからひ給ふそとあれは三ら殿しやうとにて候へは
給ふましと申すなりいかゝはからひ給ふ　とあれは三郎殿生　土にて候へは
給ふましと申候也　如何　はからい給ふそとのたまへは★

CBA ★其時三郎殿仰られるはわかしやうと
日本へこそかへりたく候へと申給ふさらはあのしゝのかはをならさせ★
日本へこそ帰　り度　候へと申給ふ　其時翁あの獅子をきりたまへとありけれは
日本へこそ帰　り度　候へと申　給へとてかまをたてまつり給ふ四の

CBA なにとしてならし候へきこれにてならし給へとて二つのかまを奉り給ふ★四の
何にて　ならし給へきこれにてならし給へとて二のかまをそ　給ひしかはならし給て
何にてきるへきそとありけれは是にてきり給へとて二のかまを　☆四の
★三郎殿此の鎌を得給て悦ひ給ひしかはひ我朝にて見ならしこと給ひて
☆たてまつる三ら殿此かまをもちて　我か朝にて見なれしことなれはきり給ひて

C　ゑたをおろし給ひて　にけをこ　たひにとりおこなひ給ひてうへをやすめ
B　ゑたをおろしせ給ひしにけをこむたひにとりおこなひ給いてうへをやすめ
A　えたをおろす　給ひてうへをやすめ給ふ三郎殿におきなとの物かたりし給ふこの國をはのへの

C　給ひぬ去程に　三郎殿　物語　し給ふ此国をは★□□の
B　給いぬ去程に　三郎殿　翁語　し給ふ此国をは★□□の
A　給いぬ去程に　三郎殿　翁なとゝものかたりしたまひて此国を☆野邊の

C　★何と申候そととひ給□此国をは☆いつくと申候やらんととひたまへは此国をは
B　國とも申　ゆいまんこくとも申也　そこの國とも又祢の國とも申也とかたり
A　國とも申也ゆ□国　共　申也　此国□□　禰の国とも申也　□□

C　国共も申ゆいまん国とも申又そこの国とも祢の国とも申也とそこたゑける
B　給は　★この國より日本へかよふみちや候ととひ給へはいくらもみちは候日本
A　給は　★この國より日本へかよふみちや候ととひ給へはいくらもみちは候日本

C　三ら殿　扨　此国よりにほんにならせ給ふ道候やとととひたまへは道はいくらも道は有日本
B　三ら殿　扨　此国より日本へかよひし道や候ととひたまへは道はいくらも候日本
A　三ら殿　扨　三郎殿　★

C　のすいしやくたちの祢の國にかよはせ給ふみちは八十六　候そのなかにちかき
B　すいしやくたちのねの国へかよはせ給ふ道　八十六候そ其　中にちかき
A　の垂　跡　の此祢の国よりかよ給ふ道は八拾六候也其　中にもちかき

C　みちはくまのゝこんけんのかよはせ給ふみちこそすくちなれ　それはなん十里はかり
B　道は　権現の　かよはせ給ふ道　こそ直　道なれ　それなん十里はかり
A　道は　熊野　権現のかよはせたまいし道こそちかき道にて候へ　それはなん十里はかり

C　候やらん　★いかによくきゝ給へちかきちやう九十九年のみちなりそれをは
B　候やらんな　★いかてよく聞給へちかきちやう九十年の道そかしそれを
A　候やらんな　★よく／＼きゝ給へ近道は十九拾九年の道そかしそれは

C　★AB☆十里とは　☆翁こたへて道なん十里とはいかにありとも
B　★AB十里とは　ゆきつくへき★候なりとて　あのしゝをやいかはにして
A　★AB☆十里とは　☆翁こたへて道なん十里とはいかにありとも

C　いかにして　★命の内に行つき給ふへき★候けりとてあのしゝをやいかはにして
B　いかにして　命の内に行つき給ふへき★候けりとてあのしゝをやいかはにして
A　いかゝして命の内に行つき給ふへき★候けりとてあのしゝをやいかはにして

C　いかゝして　いのちの内には行付候へき翁☆あり彼しゝの皮をやい皮　にして
B　いかゝして　いのちの内には行付候へき翁☆あり彼しゝの皮をやい皮　にして
A　いかゝして　★ABふしきにさる事も　☆ふしきにてさることも

C　たてさまこさま一すんに　きりをきて　かそへ給へとて★かそへれはれは
B　給へとてゑ皮にしたて横一寸に切おきて　かそへ給へとて　かそふれはれは
A　給へとてゑ皮にしたて横一寸に切置ていくらと　かそゑ給へとそ☆数ふれは

C　たて様もよこ様も一寸に切置ていくらと　☆申けるをさやうにきり置て
B　たて様もよこ様もはにして　☆申けるをさやうにきり置て
A　★いかはにして

C　四百八十六まいにてかそへたりけりになひたはらにせよとてたはらに　せはせ
B　四百八十六枚にそかそへたり　になひたはらにせよとてたはらにてせをわせ
A　四百八十六枚数へたりけるを　たはらにいれ　て三郎殿に　せをはせて

C　給ひぬ　いとおしき　ありさまなりされ
B　奉りぬ　いとをしき　有様なりされ
A　奉りぬ　我国にて　いつかならひ給ふへきに　いとをしき御ありさま也

C　とも日本のこいしさにくみなわもつらからす　翁　おきなの給ひけるはあいかまへて
B　とも日本の恋しさにくみなわもつらからす　翁　の給ひけるはあひかまゑて
A　とも日本の国の恋しけれはくみなはもつらからす　翁　の給ひけるは　ひかまいて

C　／ゆき給はんするに七日ゆきてはやい／かは一きれめしてて★まいり／／して
B　／行給はんするに七日行　て　其　此　☆水三すくひ皮一つゝのみ／／し給ひて
A　／行たまはんするに七日行　て　此　☆水三すくひ皮一つゝのみ／／し給ひて

C　ゆきたまへこの四百八十六まいのやいかはみなになりたらんする時そ日本へは
B　行給へ　此　四百八拾　まいのゝゑかはみなになりたらんする時そ日本へは
A　ゆき給へ　四百八拾　★水三すくひ皮一つゝのみ／／し給ひて

C　つき給はんするそさて七日／／のみちのさかい候はんするやらんと申給へは
B　つき給はんするなりとのそのひけれは三郎殿よろこひて承ぬ七日／／のさかひ
A　行付たまはんすとの給へはは　悦て　七日／／のさかいの内には

C　候はんする也　七日よりうちに水は候はぬそいつみをたよりに　ゆき給へかま
B　候はんするなり　★七日より中には水候はぬそいつみをしるへにて行給へかま
A　水あり　其清水をさきのしるへにて行たまへかま

C　へて／／／この國のものはし草の葉にてもあれしき　し給ふなさあらむには
B　えて／／／此の国の物はし草　葉にてもあれ候へし給ふなさあらんにつるては
A　いて／／此の国のものを草　葉にてもあれ候へしよくし給ふな　左様にあらは

C　日本には　つき給ふましき也くるしく　てやすみ給はん　時も　行さきを
B　日本へは　つき給ふからすくるしく　てやすみ候はん　時は　行先　を
A　もとの国へつき給ふへからすくるしくしてやすみ給はんする　時は時は行先　を

C　枕　になして　ふし給へかまへて／／あとを見給ふなとねんころにをしへ
B　まくらにしてやすし給へかまゑて　跡を見給ふなと念比にをしへ
A　まくらにしてやすし給へかまゑて／／あとを見給ふなと念比にをしへ

C　給ひけり日本人おきなかめいのあるもとにふみをつかはさんとてこうはいの
B　給ひけり日本に翁めひのもとに文をことつてぬとて紅　梅
A　給ひけれは日本へ翁のめいのあるところに文　はい

C　のたんし一かさね　とりいたして　かき給ひぬ
B　の檀　紙ひとかさねて取　出　て　文書給ふ
A　のたんし一かさね　取　出　して御文かき給ふ

C　戀しくはとひてもきませやまとなるみはの山本　杉たてる門
B　恋しくはとひても来ませ大和なる三輪の山もとに杉たてるかと
A　恋しくはとひてもきませやまとなる三輪の山もと　杉たてるかと

C　とかき　て三郎殿にまいらせ給ふ　たしかにおさめ給ひけり三郎殿らう
B　とかき給ひて三郎殿に参らせ給ふ　たしかにおさめ給ひけり三郎殿此
A　かやうに書て三郎殿にことつて給ふ　たもとにおさめて　さても

C　翁　おうによく／／いとまをこひて行給ふ
B　翁　に能　と　乞　て行給ふ
A　翁　によく／／いとま　こいて行給ひける

A　みちは木の葉ましりのこすなはら　あゆみよき事かきりなし　いまは七日
B　道　は木のはましりのこすなはら　あゆみよき事かきりなし　いまは七日
C　★　は木　葉ましりのこすなはら也あゆむ　こと かきりなし　いまは七日半は
★去程に道／＼の様

A　きたるらんとおもはしき所にけにもしみつありこれにてそあるらんと★ひて
B　来たるらんとおもはしき所にけにも清水　あり是はこそ有らんと思い給ひて
C　過ぬらんとおほしきところにけにもし水あり　是にて　あるらんと　思ひて
★おもひ給

A　こゝにてやいかは一きれしみつ三すくいをこなひ給ひて行給ふかくしつゝ
B　爰にてやゐかわを一きれしみつみすくひおこなひ給ひて行給ふかくしつゝ
C　やい皮　一きれ清水　三すくいまいりて　行給ふケ様にしつゝ

A　したひに月日へにけるほとに　四百八十六まいのやいかはもみになり
B　次第に月日経にけるほとに　四百八十六枚のやいかわもみに成
C　したひに月日を送る程に　四百八拾六枚のやい皮もみになり

A　にけり　このやいかはのみになるまてとこそおきなの給ひしかされとも
B　にけり　此やゐ皮　みになるまてとこそ翁　の給ひしかされとも
C　けり★此やい皮のみになるまてとこそ翁はおしへられしかされとも
★其時三郎殿

A　いまた日本へはつき給はぬ事のかなしさよ　よく／＼おきなのふひんに
B　いまた日本へはつき給はぬ事のかなしさよ　能々　翁　のふひんに
C　いまた日本に行つかぬことのかなしさよさしも翁のよく／＼　ふひんに

A　し給ひしに祢の國にもとゝまらすとちうにはてん事よとなけき給ふ事
B　し給ひしに禰の国にもとゝまらす途中にてはてん事よとなけき給ふこそ
C　したまひしに祢の国にもとゝまらす★　よとなけき給ふこと
★日本にも行つかすしてしらぬ道のとにてうせぬことこそかなしさ

A　なのめならす　まことにことはり也かなしみなから行給ふほとになみたの
B　なのめならす　誠　にことはり也かなしみなり行給ふほとになみたの
C　かきりなし　されは　かなしみなからゆき給ふ程に涙の

A　ひまよりゆくすゑを御らんしけれはまことのあかりのやうにほのかにあかく
B　隙よりゆく末を御覧しけれはまとのあかりの様にほのかにあかく
C　ひまに　行先を見たまへは誠のあかりのことくに　あかく

A　見えけれは三郎殿いさみをなし給ひてあゆみ給ふほとにたてさま七尺
B　見えける　三郎殿いさみをなし給ひてあゆみ給ふ程に竪様七尺
C　見えける其時三郎殿いさみをなしてゝ行給ふにたて様も

A　よこさま四方　なるあなのくちをつといてゝ給ひて見給ひけれはいつれ
B　横様　七尺四ほう　なる穴の口をつと出て　見給ひけれはいつれ
C　よこ様も七尺はかりの　穴　の口をつと行出てたまいて見給へは何所

A　の所とはしらす山のいたゝきひたい也東西をきら／＼と見めくらし
B　の所とはしらす山のいたゝき遠くなり東西をきら／＼と見くたし
C　とはしらぬ山のいたゝきなり東西を見めくらし

A　給へは日月ほこたてはかりにゐて給ふ南のかた見くたして御らんしけれは
B　給へは日月ほこたてはかりそ出て給ふ南のかたを見くたして御覧したれは
C　給へは日月の光そ出給ふ南の方を見くたして見たまへは

A　松原しけりてへう／＼たりにしのかたを見給へは人里つゝきてゆう／＼
B　松はらしけりて眇々たりにしのかたを見給へは人里つゝきてゆう／＼
C　松原茂りてへう／＼たり西の方を御覧しけれはひとむらつゝきてへう／＼

A　たり南のかたへきこりみちのほそ道一くたりあり　かのみちをくたりに
B　たり南のかたへ木こり道のほうみちひとくたりあり　彼の道をくたりに
C　たり南の方はきこり道のこ　みち一くたりたり　かのみちをくたり

A　南へくたり給ふ　四五里かほとくたりたまひて　ひかしよりにしのかたへ大たう
B　みなみへ御下給ふ　四五里かほと下　給　ひて　東　より西への方　の大道
C　行給ふ　四五里かほと行て　東方　より西へ　又　道

A　ありかのおほちを東へあき人二人うし二ひきにしほつけて　一人は三十
B　あり彼の大道を東へ商人二人ひきしほつけて　一人は三十
C　あり彼の大道を牛に塩をおほせてあき人弐人行あひたるに　壱人は三拾

A　四五のあき人いま一人は廿四五はかりのもの成けるに　三郎殿立よりて
B　四五　一人は二十四五のあき人せいやほいにて出来る　三郎殿よつて
C　四五今一人は弐拾四五はかりのものなりけるに　三良殿立寄て

A　おほせけるはな物申候はんとの給へはあき人何事にて候そとこたへたり三郎殿
B　仰られけるはな物申候はんとの給へは商人何事候そとこたふれは
C　物申候はんとのたまへは何事候とこそたへたる其時三郎殿

A　とひけるはとれよりとなたへ身はきたり候そととはれけれは廿四五のあき人
B　とひける様はとれよりとなたへ身はきたりて候そといわれけれは商人
C　仰られけるは★何方へきたりて候やらんといゝ給ひける　廿四五のあき人
★それかしは何所よりして

A　申けるはけうかるとのゝ物とひやうかなきたりたるみちをはわとのたに
B　申けるはけふかる殿の　とひ様かな来たる道をわとのたに
C　申けるはきようかるとのゝ物のとひ様かな　わ殿たにも

A　しり給はすいかにしてそのほかの人　しるへきそやほれたり　あほれたり
B　しり給はすいかにして其外の人のしるへきはやほれたり／＼　あらほれたり
C　したまはすいかにしてかよその人は★しるへき　やほれたり／＼
★とのゝ来たる路を

A　とそ申ける三十四五はかりのあき人　わとのはなさけなき事をの給ふ
B　とそ申ける三十四五の商人申けるはわとのなさけなき事をの給ふ
C　とそ申けるいま壱人の★ものゝ申けるはわとのはなさけなきことをゆふ
★をとなしき

A　物かな色をも香をもしる人そしると申にわれらかやうにはい／＼
B　物かな色をも香をもしる人そしるそかし　我等か様にはい／＼
C　かな色をもかをもしる人そ知るとこそ申に我等か様ニあき人を

C　してありくに　しらぬ道しらぬとまりにてはとふにくるしくなにとも
B　してありくに　しらす道しらぬと帰りにて　とふに委　敷人の
A　してありくに　しらぬみち　のとまりを　とふに　人の

C　あかしたる　はうれしきそかしのやうにあのとのもやと　をしらすして
B　あかしたる　はうれしきそかしのやうにあのの殿も宿　をしらすして
A　あかしたる時は★うれしくおもふ　そかしそのやうにあの殿とのもとまりをもしらすして

C　こそいて給ふらめ　これこそやとの日本国信濃国あさまのたけなきの
B　たつね給ふらめ　これこそやとの日本国信濃国あさまのたけなきの
A　こそ出つ★★らめといへて　これこそやとの日本の国

C　松原よといへはあなうれしやさてはやは日本につきたるにこそあん
B　松はらよといへはあなうれしやさてはやは日本につきたるにこそあん
A　松はらといふところよ★★あら嬉しや扨は日本の地に着たることのうれしさよ

C　なれ　これはわれら　★その時三郎殿
B　　　　　なきの松原にこそ　と
A　　　　　なきの松原にこそ　と

C　おも　ひて　よろこひ給ふ事かきりなし
B　思　いて　よろこひ給ふ事かきりなし
A　思　ひて　よろこひ給ふ事かきりなし

C　又　三郎殿又とひ給ひけるは今日はなん月のいくかの日にて候そや　との
B　三郎殿又とひ給ひけるは今日はなん月のいくかの日にて候そや　とひ
A　三郎殿又とひ給ふやう今日は何の月のいくか　にて候やらんと　の

C　給へ　二十四五のあき人　申けるはちたひわとのはほれたるなあほれた
B　けれ　はは　廿四五の商人　申けるはちたいわとのはほれたりなあほれた
A　たまへは　又　あきんと申けるは　申けるはちたいわとのはほれたりなあほれた

C　りと　／＼よくほれたりやとのけふこのころはむまれいつ
B　／＼よくほれたりやとのけふ　はむまれおつれはきのふけふを
A　／＼よくほれたりやとのけふ　はむまれおつれはきのふけふを

C　今日此　今日
B　昨日
A　今日

C　ほれたるものや　とのの今日此　比　生　おちぬれは昨日　今日を
B　ほれたりやとの　比
A　ほれたるものや　とのの今日此　比　生　おちぬれは昨日　今日を

C　もしるそかし　こへんのとし　十月の日のうつりかはるをしらぬか　六六
B　もしるそかし　こへんのとし　十月の日の移りかわるをしらぬか　六六
A　はしるそかし　★御へんの年として月日のうつり行はかりたにもしらぬか　六六

C　月　日　日本國しなのゝ國　二人のあき人のをしへにそ
B　月　日　日本国信濃国浅間のたけなきの松原　二人のあき人のおしへにこそ
A　月　日　日本の国とも　あさまのたけともなきの松原共　二人のあき人のおしへをもつてこそ

C　日とはけふそかしといひてそとをりける
B　日とはけふそかしといるてそ通りける
A　日とはけふそかしといひてゝ★とをりける

C　月　日　日本國信濃国浅間のたけなきの松原共六月一日ともしりたまいけれ
B　月　日　日本国信濃国浅間のたけなきの松原共六月一日ともしりたまいけれ
A　月　日　日本の国とも　あさまのたけともなきの松原共六月一日ともしりたまいけれ

C　此浅間の嶽には三つの穴あり　あさまのたけには三つの穴あり　國へかよわせ給ふ一つのあなはくすみの権現の稱の国へかよはせたもふ一つのあなはとかくしのこんけんの稱の国へかよはせたもふ一つの穴は★熊野の権現の稱の国へすぐ道にかよはせ
B　あさまのたけには三つの穴あり　國へかよわせ給ふ一つのあなはくすみの権現の稱の国へかよはせたもふ一つの穴は★熊野の権現の稱の国へすぐ道にかよはせ
A　あさまの嶽　現の稱の

C　給ふ此なるなか穴あなよりあなあ出し　てさくちいまかたきそちにかゝりて
B　給ふ此なるなか穴あなよりあなあ出し　てさくちいまかたきそちにかゝりて
A　給ふ此なるなか穴あなよりあなあ出し　てさくちいまかたきそちにかゝりて

C　あふみの國へとそいそき給ひけるに日かすもつもりしかはは　おなしき
B　近江の国にとそいそかれけるに日数もつもりしかはは　おなしき月の
A　ふみの国に　そいそかれけるに日数もつもりしかはは　おなしき月の

C　十六　十六　十六
B　十六　十六　十六
A　十六　十六　十六

C　日夜半はかりにかうしかうかの御たちへそつかせ給ふみなみにしのひろ
B　日夜半はかりにかうしかうかのみたちに　つき　給ふ南西のひろ
A　日の夜半はかりにあふみの国江夏のたちに　つき　給ふ南おもてのひろ

C　ゑんにのほり給ひてつま戸をうちたゝきいらはやとはおもへともへ人ま
B　ゑんにのほり給ひてつま戸をうちたゝきいらはやとはおもへとも人誠ま
A　ゑんにのほりたもてつま戸をうちたゝきなのらはやとは思へとも人ま

C　ことしともはしあけてこそとおもひてあくるをおそしと待給ふ心のこと
B　ことしともはしあけてこそと思いてあくるをおそしと待給ふ心のこと
A　ことにおもはし明てこそと思しつめてあくるをゝそしとそまちたまふ心の

C　うちこそいはん方なけれすてにはしきりにつけわたり　あけかた
B　内こそいはんかたなけれすてにはしきりにつけ渡り　明方
A　うち　いふ計なし　なけれさる程に鶏もすてになきて　かた

C　ちかくなりけるに三郎殿の御嫡　ちやくし　おとて
B　ちかくなりけるに三郎殿の御　子　小太郎殿　わらへ　おとて
A　ちかくなりけるに三郎殿の御ちやくし小太郎殿わらへ名　亀　おとて

C　はします　はゝこせんにあひたてまつりて御物かたりあり
B　はします　はゝ御前にあひて　御物かたりあり
A　はします　はゝ御前にあひて　御物かたりあり

C　けりなう母こせんきこしめされ候へちゝにて候人
B　けるはゝ前きこしめされ候へ父にて候人
A　けるはゝ前きこしめされ候へちゝにて候人

C　はかれたてまつり候けるやらんこよひそれかしか枕かみにたちかゝり給ひて
B　わかれまいらせてそあるやらん今宵　兼次か　枕もとにたち　たまふて
A　わかれまいらせて　候やらん今宵　兼次か　枕もとにたち　たまふて

C われ
B 我こそ
A 物は子なりけり兼家か

C きたり
B たれとあらたに仰候
A 一人の子をもたすはたれか

C とおほ
B 思ひてうちおとろきて
A 物はこなりけりかねいゑ

C 候と
B おもひておとろきて
A 一人のこをもたすはたれか

C 候へは
B 候
A 人の子をもたすは誰の人か

C 見え
B 見
A 只今ちゝのために

C 給はす
B 給
A 今父かやうに

C まこと
B 誠
A

C にて
B にて
A

C 夢に
B 夢
A

C 候
B 候
A

C 物を
B 物
A

C や
B や
A

C 候
B 候
A

C やらん
B やらん
A

C 此
B 此
A

C 世に
B 世
A

C なき
B なき
A

C 人の
B 人
A

C つみ
B つみ
A

C の罪
B の
A

C 深
B 深
A

C ふかき
B ふかき
A

C こそ
B こそ
A

C おや
B おや
A

C こし
B こし
A

C ん類
B ん
A

C るいの
B るいの
A

C の夢
B の夢
A

C めに
B めに
A

C には
B には
A

C とふら
B とふら
A

C はれん
B れ
A

C とて見え
B むとて見
A

C けれ
B けれ
A

C もつ
B もつ
A

C 御つみ
B 御つみ
A

C はしふかく
B はしふかく
A

C おはしまし
B おはしまし
A

C ましく
B ましく
A

C おはしまし
B おはしまし
A

C 候にや
B 候にや
A

C 御けふやう
B 御けふやう
A

C うなれ
B うなれ
A

C ふかく
B ふかく
A

C おはしまし
B おはしまし
A

C 候やらん
B 候やらん
A

C 御きうやう
B 御きうやう
A

C を
B を
A

C は
B は
A

C 心のおよひ
B 心のおよひ
A

C ほとつかまつり
B ほとつかまつり
A

C 候へはさりとこそおもひまいらせ候へ
B 候へはさりともこそおもひまいらせ候へ
A 南無

C 心のまひはつかまつりて候へはさりともこそ思い参せ候へ
B 心のまひはつかまつりて候へはさりともこそ思い参せ候へ
A 南無

C 程に仕
B 程に
A 南無

C ★とて御なみたをなかしたてまつり
B ★とて御なみたをなかしたてまつり
A ★夢にて候けるものをやとふらふらとにて

C 阿弥陀佛／＼と念佛申てちゝのためとてへかうしたさては
B 阿弥陀佛／＼と念佛申てちゝのためとてへかうしたさては
A

C 阿弥陀仏／＼と申てちゝ御前父の御ためにこうしたまへり御せん
B 阿弥陀仏／＼と申てちゝ御前父の御ためにこうしたまへり御せん
A

C 廻向し給ふさてちゝのの給ひけるは
B 廻向し給ふさてちゝのの給ひけるは
A

C 母★是を聞たまふて
B 母★是を聞たまふて
A

C ちゝはわとのゝ四歳になりし時
B ちゝはわとのゝ四歳になりし時
A

C 二人のしやきやうにあひて
B 二人のしやきやうにあひて
A

C 父はわとのゝ四つになりし時
B 父はわとのゝ四つになりし時
A

C 二人の舎兄に相て
B 二人の舎兄に相て
A

C あに御せんの海と山とには
B あに御せんの海と山とには
A

C まさりのおそろしき物のありなし
B まさりのおそろしきものの有なし
A

C いれかおそろしきものあるなしとのあらそひし給ひしに
B いれかおそろしきものあるよなしとのあらかひをし給ふて
A

C 見んとて山／＼をめくりけるに
B 見んとて山／＼をめくりけるに
A

C 山山にまさりといひけるに依てまうを
B 山山にこそまさりといひけるに依てまうの物
A

C 若々を見んとて
B 若々を見んとて
A

C 狭国をくりけるに
B 狭国をくりけるに
A

C 山／＼をめくりけるに
B 山／＼をめくりけるに
A

C ちゝはまさりといひけるに
B ちゝはまさりといひけるに
A

C 父は山にこそまさりと候といゝ
B 父は山にこそまさりと候といゝ
A

C ★つてさかしけるに★さかしけるに
B ★つてさかしけるに★さかしけるに
A

C ／＼をさかしけるに
B ／＼をさかしけるに
A

C 山にてまうの物にとられてからぬとこそいゝしかあにたち二人
B 山にてまうの物にとられてからぬとこそいゝしかあにたち二人
A

C 山にてまうの物にとられて帰
B 山にてまうの物にとられて帰
A

C 広王のものにとられて帰らんと
B 広王のものにとられて帰らんと
A

C はは
B はは
A

C 帰へり給ひし也
B 帰へり給ひし也
A

C わとの殿の
B わとの殿の
A

C かそふ年をかそふ
B かそふ年をかそふ
A

C 今年三十八に成
B 今年三十八に成
A

C 帰たまふ
B 帰たまふ
A

C 年井八になる
B 年井八になる
A

C 給ふと
B 給ふと
A

C おほゆると
B おほゆると
A

C 語たまひけれは
B 語たまひけれは
A

C ★★あらむさんや
B ★★あらむさんや
A

C 扨亀
B 扨亀
A

C 聞給ふ
B 聞給ふ
A

C 山山の奥にも
B 山山の奥にも
A

C 持へき
B 持へき
A

C もつへき
B もつへき
A

C たるむさんなれ
B たりむさんなれ
A

C ★三郎殿是を聞給ふ
B ★三郎殿是を聞給ふ
A

C 如何なる野ゝす
B 如何なる野ゝす
A

C 中の
B 中の
A

C 野の
B 野の
A

C 中の
B 中の
A

C 世の
B 世の
A

C やや
B やや
A

C 物御覧候へといひけれは
B 物御覧候へといひけれは
A

C 出て
B 出て
A

C いて
B いて
A

C 廣
B 廣
A

C 二三
B 二三
A

C 女房たち
B 女房たち
A

C 達
B 達
A

C 去程に
B 去程に
A

C 十人はしりいて
B 十人はしりいて
A

C 女房
B 女房
A

C そろへとのゝしりける
B そろへとのゝしりける
A

C 出て
B 出て
A

C ひろ
B ひろ
A

C ゑんにおはしますら殿を見まいらせて申けるはあなゝいかめしの大へひ
B ゑんにおはしますら殿を見参らせて申けるはあなゝいかめしの大へひ
A

C ゑんにおはしますら殿を見まいらせて申けるはあなゝいかめしの大へひ
B ゑんにおはしますら殿を見まいらせて申けるはあなゝいかめしの大へひ
A

C ゑんにおはしますら殿を見まいらせて申けるはあなゝいかめしの大へひ
B ゑんにおはしますら殿を見まいらせて申けるはあなゝいかめしの大へひ
A

C おそろしやとそ申けるゝはうたちなるらむ
B おそろしやとそ申けるゝはうたちなるらむ
A

C ひろゑぬにつとめ見たてまつりて
B ひろゑぬにつとめ見たてまつりて
A

C ★やかに内へ入て申ける女房たちなんといひけれは今広ゑんにあなゝ
B ★やかに内へ入て申ける女房たちなんといひけれは今広ゑんにあなゝ
A

C ★山とはつ目見たてまつりて★あなゝ
B ★山とはつ目見たてまつりて★あなゝ
A

C ★人／郎殿をたゝ
B ★人／郎殿をたゝ
A

C ★郎殿を只
B ★郎殿を只
A

C をひらきて廣
B をひらきて廣
A

C 早朝に今日は御つくりの田の草とらせんとて南の妻の戸
B 早朝に今日は御つくりの田の草とらせんとて南の妻の戸
A

C 参りて
B 参りて
A

C 今日は御まいりやうの草とりせんと申て南おもての
B 今日は御まいりやうの草とりせんと申て南おもての
A

C 五更の天も明けれは三郎殿後見ゆきゝ家とゝいふ物有けるかの
B 五更の天も明けれは三郎殿後見ゆきゝ家とゝいふ物有けるかの
A

C 五かうのてんもあく殿御らんするやうふといひけるもの
B 五かうのてんもあく殿御らんするやうふといひけるもの
A

C こかうの天もあけれは三郎殿こうけんゆきゝゑとゝいふ
B こかうの天もあけれは三郎殿こうけんゆきゝゑとゝいふ
A

C ★あらはこそとおもひ給ふてあくるを☆おそしと☆待給ふ程に
B ★あらはこそとおもひ給ふてあくるを☆おそしと☆待給ふ程に
A

C ましあくるましき夜ならはこそとおもひてあくるをまち給ふほとに
B ましあくるましき夜ならはこそとおもひてあくるをまち給ふほとに
A

C ましきあくるましき夜にて★こそと思いてあくるをまち給ふ程に
B ましきあくるましき夜にて★こそと思いてあくるをまち給ふ程に
A

C きゝてまわうのものゝへんしてきたりたるらめとて聞てまわうの物らめとて
B きゝてまわうのものゝへんしてきたりたるらめとて聞てまわうの物らめとて
A

C きゝてまわうのものゝへんしてこそきたるらめとてもちゆる事ある
B きゝてまわうのものゝへんしてこそきたるらめとてもちゆる事ある
A

C おほしめしけれとも人うつゝとおもはし我等かたりつる事を
B おほしめしけれとも人うつゝとおもはし我等かたりつる事を
A

C おもへ共けれとも人まことにもおもはしかれらかたりつる事を
B おもへ共けれとも人まことにもおもはしかれらかたりつる事を
A

C 念仏申てゑかうすへきこれにつけても是につけてもたゝ今こそきたれといはゝやと
B 念仏申てゑかうすへきこれにつけてもたゝ今こそきたれといはゝやと
A

C 念仏申てゑかうすへきこれにつけてもたゝ今こそきたれといはゝやと
B 念仏申てゑかうすへきこれにつけてもたゝ今こそきたれといはゝやと
A

C ゑんにおはしますら殿を見まいらせて申けるはあなゝいかめしの大へひ
B ゑんにおはしますら殿を見まいらせて申けるはあなゝいかめしの大へひ
A

C 世の中のひろけれはこれほとの大へひを見つるかなへひはふと
B 世の中のひろけれは共かほとのおへひをも見つるかなへひはふと
A

C　けれはなかく　こそあれこのへひはおほきふして
B　くしてなく　こへひはふと　みしかきそやこれこそ
A　けれはなかふして　こそあれ此　へひ　大　してふとみしかきそや是　こそ

C　まことの人へひといふ物にてあるらむと申　けれは三郎殿仰られけるはいかに
B　まことの人へひといふ物にてあるらむと申　けれは三郎殿仰られけるはいかに
A　まことの人へひといふ物にてあるらむと申　けれは三郎殿仰られけるはいかに

C　にやれをのれらとものかねゑをはへひとは申　そ　との給ひけれは女房達
B　にやれをのれらとものかねゑをはへひとは申　そ　との給ひけれは女房達
A　にやれをのれらとものかねゑをはへひとは申　そ　との給ひけれは女房達

C　をのれは兼ね家をはへひとは申すそやとの給へは
B　をのれは兼ね家をはへひとは申すそやとの給へは
A　をのれは兼ね家をはへひとは申すそやとの給へは

C　申されけるはこゝなるへひの物いへは人をのろうそ人のろうへひは
B　申されけるはこゝなるへひの物いへは人をのろうそ人のろうへひは
A　申されけるはこゝなるへひの物いへは人をのろうそ人のろうへひは

C　　爰なるへひの人の物をいへは　のろふそやされは
B　　爰なるへひの人の物をいへは　のろふそやされは
A　　爰なるへひの人の物をいへは　のろふそやされは

C　からきめを見せんとて　つはきをさん／／／／にはきかけけり　又いつく
B　からきめを見せんとて　つはきをさん／／／／にはきかけけり　又何所
A　からきめを見せんとて　つはきをさん／／／／にはきかけけり　又何所

C　にも人のうちにけすをんなのこさかしきかにも人の御内ニけすおんなのこさかしなさは　そのなかにこさゝといひ
B　にも人の御内ニけすをんなの　中　に小さゝといひ
A　にも人の御内ニけすをんなの　【C篠原本竹冠ニ条小篠以下同】

C　けるけすをんなけるけすを女けるけすをんなのありけるか出て／／／／きこふる大きゆゑしおほへひろへ見ぬんとて見ぬとて廣
B　けるけすをんなけるけすを女けるけすをんなのありけるか出て／／／／聞きゆゑしおほへひろへ見ぬんとて見ぬとて廣
A　けるけすをんなけるけすを女けるけすをんなのありけるか出て／／／／聞きゆゑしおほへひろへ見ぬんとて見ぬとて廣

C　ゑんにはしりいてゝ三郎殿を見まいらせて　あなゆゝし　大　へ　ひのふと
B　ゑんにはしりいてゝ三郎殿を見まいらせて　あなゆゝしおほへんひのふと
A　ゑんにはしりいてゝ三郎殿を見まいらせて　あなゆゝしおほへんひのふと

C　ゑんにはしり出て三郎殿を見まいらせて★申けるは　あらいかしのへひやこれこそ
B　ゑんにはしり出て三郎殿を見まいらせて★あらいかしのへひやこれこそ
A　ゑんにはしり出て三郎殿を見まいらせて★あらいかしのへひやこれこそ

C　みしかさや人へひなりと　いふをきゝ給ひて三郎殿いかにやれせんそ
B　みしかさや人へひなりと　いふをきゝ給ひて三郎殿いかにやれ先祖
A　みしかさや人へひなりと　いふをきゝ給ひて三郎殿いかにやれ先祖

C　きこゆる誠の人へひよんめりと　ヲ聞給ひて　いかにやをのれは
B　きこゆる誠の人へひよんめりと　ヲ聞給ひて　いかにやをのれは
A　きこゆる誠の人へひよんめりと　ヲ聞給ひて　いかにやをのれは

C　さうてんのをのれらかしうにてあるを　かくは　申すそ　ふしきなりと　の
B　さうてんのをのれらかしうにてあるを　かく　申　そ　ふしきなりと　の
A　さうてんのをのれらかしうにてあるを　かく　申　そ　ふしきなりと　の

C　相伝のをのれ　かせうなりあるを　かやうに申　そやふしきなりと
B　相伝のをのれ　かせうなりあるを　かやうに申　そやふしきなりと
A　相伝のをのれ　かせうなりあるを　かやうに申　そやふしきなりと

C　給へはこさゝ★こゝなるへ　ひのせめてこうのふかさにはひろゑんにいてゝ
B　給へはこさゝそこゝなるへんひのせめてもの業のふかさはひろゑんに出て
A　給へはこさゝ　こゝなるへ　ひのせめてこうのふかさにはひろゑんにいてゝ

C　たまへは小篠おんな　こふのふかきにとて　そのきならはわへひめ
B　たまへは小篠おんな　こふのふかきにとて
A　たまへは小篠おんな　こふのふかきにとて　そのきならはわへひめ

C　こうさいしてあまつさへ人をのろう　いかにいてゝ　其　儀ならはわへひめ
B　こうさいしてあまつさえ人をのろふ　いかにゐて／／／／
A　こうさいしてあまつさへ人をのろう　いかにいてゝ　其　儀ならはわへひめ

C　うきめ見せむとて　うちにはしり入て　やをそきからにひをつけて
B　みしめ見せむとて　内にはしり入て　やをそきからゝに火をつけて
A　みしめ見せむとて　内にはしり入て　やをそきからゝに火を付て

C　からきめを見せんとて　竹のさきにつけて　三郎殿の御□なのもとに　さしつけ／／／／
B　からきめを見せんとて　竹のさきにつけて　三郎殿の御はなのもとに　さしつけて／／／／
A　からきめを見せんとて　竹のさきにつけて　三郎殿の御はなのもとに　さしつけて／／／／

C　あまりなるほとにそふすへられて　かゝりこさゝにふすへられて　いかにやれ
B　あまりなるほとにそふすへたる　かゝりこさゝにふすへられて　いかにやれ
A　あまりなるほとにそふすへたる　かゝりこさゝにふすへられて　いかにやれ

C　すみになるほと　ふすめける　三郎殿小さゝにふすめられて　如何に
B　すみになるほと　ふすめける　三郎殿小さゝにふすめられて　如何に
A　すみになるほと　ふすめける　三郎殿小さゝにふすめられて　如何に

C　をのれは★★ふしきなる事をはつかまつり候　小篠
B　をのれは★★ふしきなる事をはつかまつる
A　をのれは★★ふしきなる事をはつかまつる

C　おのれらはAC　とくしんなる事をはする　そとのたまへとも
B　おのれらはACかゝる　そとのたまへとも
A　おのれらはACかゝる　そとのたまへとも

C　かさねて申しけるはこゝなるへひのふすむれとも物　とも　せすいよ／／／／人を
B　かさねて申しけるはこゝなるへひのふすむれとも物　とも　せすいよ／／／／人を
A　かさねて申しけるはこゝなるへひのふすむれとも物　とも　せすいよ／／／／人を

C　かさねて申　成　へひのふすむれは共　もの共　せすして弥々人を
B　かさねて申　成　へひのふすむれは共　もの共　せすして弥々人を
A　かさねて申　成　へひのふすむれは共　もの共　せすして弥々人を

C　のろうふしきさよとて　さん／／／／にふすへるこ□そふしきなれ
B　のろうふしきさよとて　さん／／／／にふすへるこ□そふしきなれ
A　のろうふしきさよとて　さん／／／／にふすへるこ□そふしきなれ

C　のろふ事　さよとて　うちこ★良殿其時おほせられ
B　のろふ事　さよとて　さん　こ★良殿其時おほせられ
A　のろふ事　さよとて　さん　こ★良殿其時おほせられ

C　ゐたるこそふしきなれ
B　ゐたるこそふしきなれ
A　ゐたるこそふしきなれ

C　さては　われ　へひのたひ　になりたるむさんなれかやうなるへきとしりたる
B　さては　われ　へひのたひ　になりたるむさんなれかやうなるへきとしりたる
A　さては　われ　へひのたひ　になりたるむさんなれかやうなるへきとしりたる

C　我か身はへひのすかたになりたるむさんなれかやうなるへきとしりたる
B　我か身はへひのすかたになりたるむさんなれかやうなるへきとしりたる
A　我か身はへひのすかたになりたるむさんなれかやうなるへきとしりたる

C　りしかはなにしにこきやうへかへり　二たものをおもふらんおきなの
B　りしかはなにしにこきやうへかへり　二たものをおもふらんおきなの
A　りしかはなにしにこきやうへかへり　二たものをおもふらんおきなの

C　りかはなにしに故郷へ帰り　て　二度物をおもふ翁の
B　りかはなにしに故郷へ帰り　て　二たひものをおもふ翁の
A　りかはなにしに故郷へ帰り　て　二たひものをおもふ翁の

C　りせはなせにきたりて　殿
B　りせはなせにきたりて　殿
A　りせはなせにきたりて　殿

C　さしもよく　あたり給ひしに　称の國　と　もかく　なるへかりし身
B　さしもよく　あたり給ひしに　称の國　と　もかく　なるへかりし身
A　さしもよく　あたり給ひしに　称の國　と　もかく　なるへかりし身

C　さしもふ能々　給ひに　禰の国　にて　も成へかりし身
B　さしもふ能々　給ひに　禰の国　にて　も成へかりし身
A　さしもふ能々　給ひに　禰の国　にて　も成へかりし身

C　ひんにしたまいしに★★　にゝてもとにもかくにもなるへきに
B　ひんにしたまいしに★★　にゝてもとにもかくにもなるへきに
A　ひんにしたまいしに★★　にゝてもとにもかくにもなるへきに

C　のせんなき本國を戀しくてこきやうにかへり　かなし
B　のせんなき遠国を恋　て　古郷　に帰り　来たれは　★★　へひといはるゝ　かなし
A　のせんなき遠国を恋　て　古郷　に帰り　来たれは　★★　へひといはるゝ　かなし

C　さよとてこさゝにふすへられてなく／／／／ゑんよりしたにおり　給ふ
B　さよとてこさゝにふすへられてなほ／／／／ゑんよりしたにおり　給ふ
A　さよとてこさゝにふすへられてなく／／／／ゑんよりしたにおり　給ふ

C　御心★かくてあるへきにあらねはとてたひ道へきゆきいける★
B　御こゝろの内こそ哀なれ去程に十斗ゆきはかり出て十二三のわらはへ
A　御心★かくてあるへきにあらねはとてたひ道へきゆきいける★

C　のうちこそあはれにをほゆれさるほとに十ヲ計十二三のはらへ共
B　計十二三のわらはへ　二十人
A　のうちこそあはれにをほゆれさるほとに十ヲ計十二三のはらへ共　二十人

A　□かりはしりきたりて申けるはいかめしのへひのふとさよと人へひにて
B　はかりはしりきたりて申けるはいかめしのへひのおほきさよ人へひにて
C　来りて申けるはあらいかめしのへひやこれは人へひにて

A　あるそとてあふさみけりまた三ら殿いかにをのれらかせんそのしうにて
B　有そとてあさみける又三郎殿のいかにおのれらは先祖のせうにて
C　あるそやと申てそうちける三良殿★我はのれらかせんそのしうにて
★仰られけるは

A　わたらせ給ふそ見しりまいらせぬ★さよとの給へはわらはへこゝなるへひ
B　わたらせ給ふそ見しり参せん★さよとの給へはわらへこゝなるへひ
C　あるそやいかに見知らぬ事★なりとのたまへははらへ共申ける爰なるへひ
★ABCふしき

A　の人のろうはいかにうきめを見せんといひてさん〳〵にさやなみけり
B　の人のろふはいかになきめ見せんとゐゝてさん〳〵にさひなみけり
C　かのはらをのろふそやさらはからきめをみせんとてうちさひなみ★其時に
★したてまつる

A　なにとしきわか身はへひとなりけるよとおほしめしてなく〳〵
B　何として我身はへひになりにけると思いてなく〳〵
C　なにとしても我身はへひのすかたにたりけるよとおほしめしてなく〳〵

A　かとよりそとへいて給ひてたいたうにうつふしてこそやすみ給ひ
B　門よりとく出て給ひて大道にうつふしてやすみ給ひ
C　門よりそとへ出て道のほとりにうつふしてこそやすみ給へ

A　けり三ら殿おほしけるはかくてこゝにあらは大たうとをらむ人々に大へひ
B　けり三郎殿★おほしけるは☆かくてこゝにあらは大道を通らむ人々に大へひ
C　三郎殿おほしけるはこゝにかやうにしてあらはみちをとをらむ人〳〵のへひ
★の心をかへて　☆われら

A　ありとてよけみちせられんもつみふかしとおもひて大たうより南のお
B　有とてよけ道せられんもつみふかしと思いて大道より南のかたに大
C　ありとてよけみちせぬもつみふかしとおもひてたいたうよりおくに大

A　ほきなるつかのありけるにあゆみよりてこそうつふしかなしみ給へさる
B　なるつかの有けるにあゆみよりてこそうつふしてかなしみ給へさる
C　なるつかのあるに入てうつふしにふしてそかなしみ給ふさる

A　ほとに十七八はかりの女房申けるはあなゆゝしやこゝにさうりうしたて
B　ほとに十七八はかりの女房申けるはあないゝしや造立し奉
C　ほとに十七八廿四五の女房★申けるはあらこゝにいみしく作
★たちの十人はかりつれてとをりけるかわかきにようはう

A　まつりたるみたうのけつこうのおもしろさ御ほとけのたつとさよ
B　る御たうの結構おもしろさよ御仏のたつとさよ
C　たまひたるみたう

A　と申けれは二十五はかりの女房いまたわこんせんはしらすやあれこそ
B　と申けれは廿四五はかりの女房いまたわこせんはしらすやあれこそ
C　と申けれはおとなしきおんな申けるはいまたわこせんはしらすやあれこそ

A　かうかの三ら殿のちやくしに小太郎殿のちゝの三十三年のけう
B　かうかの三郎殿の嫡子にかうかの小太郎殿の父の三十三年の深き孝
C　江夏の三郎とのゝちゝこせんの三拾三年のく

A　やうのためにつくりたてまつりし観音堂よ佛はけんふつにて
B　養のためにつくりたてまつりたる観音たうよほとけはけん□にて
C　やうの御ためにつくり給ひたるくわおんたうにて★けんふつにて
★ましますか此くわんおむこそきはめて

A　ましますしゆしやうのねかひをみてさせ給わすといふ事なし
B　ましますす衆生のねかひをみてさせ給はすといふ事なし
C　しゆしやうのねかひをみてさせ給ふといふなりされは

A　観音の御りしやうにはいつも申なから六月十七日なれは夕さりは
B　観音の御利しやうはいつも申なから六月十七日なれは夕さりは
C　くわん音の御りしやうはいつれも申なから★六月十七日なれは夕さりは
★ことに今日は

A　おもひ〳〵にしよまう申さんすらんあなたつとやとてふしをかみて
B　おもひ〳〵所望申さんすらんあなたつとやとてふしおかみて
C　★おもひ〳〵のきねん申さんすらむたつとさよとておかみて
★きせん上下参りて

A　そとをりける三ら殿これをきゝ給ひていかなる野のすゑ山の奥
B　そ通りける三郎殿是を聞給ひていかなる野のすゑ山のおく
C　そとをりける三郎殿是を聞給ひておもわれけるは我も人も

A　にもつへき物は子也けりかねいゑ一人の子をもたすはたれか
B　にもつへき物は子也けりかね家一人の子をもたすは誰か
C　持へき物は子なりけり兼家か一人のこをもたすはたれの人か

A　かゝ□けふやうをはすへきかねいゑかためにつくりたる御ほとけの人
B　かゝる供養をはすへきかねいゑのためにつくりたる御仏の人
C　かゝるくやうをはすへき★兼家か為とてつくりたつるみほとけのさやうの人
★いまたしなさる

A　のねかひをかなへさせ給ふらんたつとさよそれにつけても参てへひの
B　の申ねかひをかなえさせ給ふ覧まつたつとさよそれにつけても参りへひの
C　のねかひをかなへさせ給ふ事たつとさよそれにつけてもまいりてへひの

A　すかたをいのり申さんとてつかのもとをいて給ひて御しやうめんにて
B　すかたをいのり申さんとてつかのもとをは出て給ひて御しようめんにて
C　すかたをいのりかへ申さんとてつかのうちを出たまひて★かたにて
★みたうの前へそまいらせ給けるしやうめんの

A　きねんこそふかかりけれ大し大ひの観世音ねかはくはほんせいくわんへひ
B　きねんこそふかゝりけれ大悲大慈の観世音ねかわくは本様の悲願へんひ
C　きねんこそふかけれ★大慈大悲の観世音菩薩兼家かへひ
★南無きみやうちやうらひねかわくは

A　のたいをひきかへてかねいゑかほんたいにほんふのかたちになし給へと
B　のたひを引かへてかね家の本躰の凡夫のかたちになし給へと
C　のすかたを引かゑてもとのほんふのすかたになし★給へとて
★てたまはり候へ其れ叶すはたゝ今いのちをはやくめして後生ほたひをたすけ

三十三十三度のおかみをして三拾三度の観音経を
三十三度をかみを申卅三巻の観音経をよみたてまつりて
申て三十三巻の観音きやうをよみ給ひて廻向しゐかうし

たてまつりなく／＼きねん申されける
たてまつるなく／＼祈請申されけり我泣々きねん申されけるかくてしやうめんにあらはゆふかやうにてしやうめんにあらは
させいの申されけりわれはかくてしやうめんに有ならは夕

さりまいりたらん人にきたり来たらん人にきたれ参たる人におちらるゝへし又佛
おちられぬへしおちらるゝへし又佛ほとけのおほしめさんこと事もほとけのおほしめさんこともこと

つみふかしとてつみふかしとて罪ふかしとてつみふかしとて
ゑんの縁ゑぬより下にくゝり入
したにくゝり入給ひて下にくゝり入給ひてほとけの仏檀のしたにて佛のふつたんのしたにて

きねんあり祈念ありけるさるほとに日もくれかたになりぬれはすまん人まいり集
へひのすかたかへさせ給はすはいのちをめせとていのり給ひ
祈念ありけり去程に日も暮かたになりぬれは数百人参りあつまりて経をてきやうを
去程に日も暮かたになりけれは数万人まいりあつまりきやうを
をめせとそいのり給ふ

よむ人もあり念佛をしゆする人もあり
よむ人もあり念仏を誦する人もあり
よむ人もあり念佛を申する人もあり
念佛をしゆする人もあり念仏を誦する人もあり拝をかみを申する人もあり
★通夜の人／＼申人もあり申人もあり拝をかみを申する人も有
おもひ思ひおもひ

＼＼こゝろ／＼＼心々＼＼
たつとくこそきこえけれたつとくそ□□しにきねん申けり
夜もふけかたになりけれは夜も深かたになりけれは又夜更方になりしかは

人々のなかより物かたりひとつはしめたり人々の中より物かたり一つはしめたり
その中にほみねとをり給ひ中に大たうとをりたまふ
中にも中に

たるこはうたち十人はかりまいられたりたつときき事共
たる御坊たち十人はかり参られたりたつときき事ともかたり給ふ
御はうたち十人はかりまいられけり
かたり給ふ中にその中に

ける はかゝる所にまいりてこそなにともなき事
ける はかゝる所に参りてこそなにともなき事共
ける はかゝる所にまいりてこそ何ともなき事も
申
申

十七八のしんほつ申
十七八の新発意申
十七八のしんほつ申されけるはかゝる所にまいりてこそ何ともなき事も申
候へこの國より外に國候へさいかくにもなり候へこの國より外に國候へ此国より外に国候
候へ★此国より外に国候

いたしてふしむをもさんし出してそあらんさん／＼候へきいかゝにもなり候へ★とそ申ける
いたしてふしんをもひらき又さいかくにもなり候へ

はぬやらん★★★六十はかりのそう
はんやらん六十斗の老僧
やらん★★★六拾はかりの老僧の
★★★六拾はかりの老僧の給ひけるは国はいくらも
ABCと申けれは此国のほかにはいくらも国有り
ABCこはけれは外にはいくらも國あり
物はよみ給はぬかこはうとこに候いまた見すくしやと申
物をよみ給はぬか御坊とこたへたこと給ふ
讀たまはぬか御房とこの給へは未見候はんとのたまふ扨は★ABCしらぬ
★ABCしらぬ
★もこと給ふ★

たうりなりいて／＼道理なりいて／＼
ことはりなりいて
けちゑんのためにすこしやくしてきかせんとてけちゑんのためにすこしやくしてきかせんとて
さらはけちゑんのためにすこしやくしてきかせんとて

おいのなかよりまき物ひとつ取いたしてよまれたり十六の大國五百の
おいの中より巻物一巻と出してよまれたり十六の大国五百之
おいの中より巻物一巻取出して讀たまふ十六の大国五百之

中國十せんの小國むりやうのそくさん國なんとゝ申て國のおほき事
中国せんのほかの国無量のそくさん国なんとゝ申て国のおほき事
なん国無量のそく三国なとゝ申て国のをゝきことかす

かきりなしとうしの人は三百年
かきりなし東の人は三百年
かきりなし彼国の人は三百年のたもち西州の人は三百六十年かくの
さいしうの人は三百六十年かくの
西州の人は三百五拾年を★
★如此たもちまふ

ことくいのちなかしこの國なんしうの人はちやうみやう六十年とは申
せしかとも此国に南州の人は定命六拾年と申
せともむまれて三四にてしするもありおいかゝまりてとまるもありわかきかゝ
せしかとも生れて三つ四つにて死するも有★おひかゝまりてわかきかゝ
共生れて三四にて死するもあり★三十廿にてしするもあり十七八にて死するも有

さきにたつもあり
さきにたつるも有
さきにたち
さためなきしやうらうひやうしのならひなれ
定なき生老病死のならひなれ
老たる留り老少ふ定の国也
されは

ともきやうをよみ共経をよみを讀
念佛を申かへは念仏を申誦候へは念佛を申は
かならすわうしやうをする也かならす往生するなり
わうしやうをする也

とこそよまれたほくしのせんねんと申也
とこそよまれたこと仰はは千年と申
とこそよまれたこと北州の千年と生れて三月を
我★一年とは彼北州の国の人は五百年
まゝにて世をたもちこをうみ事はこかせいしんすれは五百と申
儘たもちて子を生み候はは子か成人す百と申とし
にて子をまうけては其子に五百と申年

我か

C　より
B　より
A　より

C　して
B　子に
A　かゝりて

C　こに
B　にか
A　四百五十年を

C　かゝり
B　かゝり
A　すきぬ

C　て
B　て
A　四百五十年を

C　四百
B　四百五十年を
A　九百五十年を

C　五十年
B　五十年
A　はかくて

C　過ぎぬ
B　過ぎぬ
A　すきぬ

C　候はゝ
B　候はゝ
A　かくて

C　いま五十年はふそくにしてこかありて
B　いま五十年はふそくにして子あつて
A　五十年はかけたてまつりぬ

C　五十年はかけたてまつりぬ
B　五十年はかけたてまつりぬ
A　四百五十年はかけたてまつりぬ

C　四百五十年はかけたてまつりぬ
B　四百五十年はかけたてまつりぬ
A　四百五十年はかけたてまつりぬ

C　たらす
B　して子はありて
A　★★四百五十年はかけたてまつりぬ

C　★★四百五十年はかけたてまつりぬ
B　★★四百五十年はかけたてまつりぬ
A　★★四百五十年はかけたてまつりぬ

C　おやしなひ奉り候ぬ
B　おやに申様
A　おやに申様

C　おやに申様
B　おやに申様
A　おやに申様

C　いまはやしなひたてまつるへきたよりも候はすとて
B　いまはやしなひに奉るへきたよりも候はすとて
A　いまはやしなひたてまつるへきたよりも候はすとて

C　今はやしない奉
B　今
A　【Cへぎたよりも濁点ノ位置ヲ誤ル】なしとて

C　【Cへぎたよりも濁点ノ位置ヲ誤ル】なしとて
B　【Cへぎたよりも濁点ノ位置ヲ誤ル】なしとて
A　【Cへぎたよりも濁点ノ位置ヲ誤ル】なしとて

C　親
B　親
A　をやをおひたし

C　をやをおひたし
B　をやをおひたし
A　をやをおひたし

C　おひ出シ
B　おひ出シ
A　おひ出シ

C　は子に
B　は子に
A　は子に

C　おひたされて
B　おひ出されて
A　おひ出されて

C　★★九百五十年に成ぬはとしゆきたり
B　★★九百五十年に成ぬはとしは行
A　★★九百五十年に成ぬはとしは行

C　奉る也
B　奉る也
A　候也

C　候なり
B　候なり
A　候也

C　は此おやは子におひ出
B　は此おやは子におひ出
A　されは

C　されは
B　されは
A　されは

C　されて
B　されて
A　されて

C　★★大たうにかけのやうにやせおとさきも行すあとへもかへらすたゝいたつらに影のやにやせおと
B　★★大たうにかけのやうにやせおとさきへもゆかすあとへもかへらすたゝいたつらに影のやにやせおと
A　★★大たうにかけのやうにやせおとさきへもゆかすあとへもかへらすたゝいたつらに影のやにやせおと

C　さきたてゝゆかすあとへもとゝまらすして
B　さきたてゝゆかすあとへもとゝまらすして
A　さきたてゝゆかすあとへもとゝまらすして

C　大道の辻に行出て
B　大道の辻に行出て
A　大道の辻に行出て

C　ろへてかなしめとものの國のならいにて
B　ろへてかなしめとものの國のならいにて
A　ろへてかなしめとものの國のならいにて

C　なしめとも彼のくにひにて
B　なしめとも彼のくにひにて
A　なしめとも彼のくにひにて

C　なしめとも其のくにひにて
B　なしめとも其のくにひにて
A　なしめとも其のくにひにて

C　国のならひなれは身はゐたる所をはなれすかやうなれぬれはか様
B　国のならひなれは身はゐたる所をはなれすかやうなれぬれはか様
A　国のならひなれは身はゐたる所をはなれすかやうなれぬれはか様

C　におとろへかなしめ
B　におとろへかなしめ
A　におとろへかなしめ

C　とも
B　とも
A　とも

C　ともあはれみむさんやとて他人は物もあたむくはねともうへてもしなすかなしみなからつゐにせん年
B　ともあはれみむさんやとて他人は物もあたむくはねともうへてもしなすかなしみなからつゐに千年
A　ともあはれみむさんやとて他人は物もあたむくはねともうへてもしなすかなしみなからつゐに千年

C　とも
B　とも
A　とも

C　とて他人は物もあたもうあてもしなすかなしみなからつゐに千年
B　とて他人は物もあたもうあてもしなすかなしみなからつゐに千年
A　とて他人は物もあたもうあてもしなすかなしみなからつゐに千年

C　なしみたへとも
B　なしみたへとも
A　なしみたへとも

C　他の人／＼物をあたへすされとも
B　他の人／＼物をあたへすされとも
A　他の人／＼物をあたへすされとも

C　★★ゆゑことさらになし
B　★★ゆゑことさらになし
A　★★ゆゑことさらになし

C　をへてしにけり
B　をへてしにけり
A　をへてしにけり

C　を経てしにけり
B　を経てしにけり
A　を経てしにけり

C　のきはめてしする国なりされはくうのふかきことはあの国に名をえたりとこそ
B　のきはめてしする国なりされはくうのふかきことはあの国に名をえたりとこそ
A　のきはめてしする国なりされはくうのふかきことはあの国に名をえたりとこそ

C　事
B　事
A　事

C　かきりなし御はうとそ
B　かきりなし御はうとそ
A　かきりなし御はうとそ

C　ふかき事余にすくれたり御ほうとそ
B　ふかき事余にすくれたり御ほうとそ
A　ふかき事余にすくれたり御ほうとそ

C　つゐにつゐにせん年
B　つゐに千年
A　つゐに千年

C　つみ
B　つみ
A　つみ

C　はくうけ給はりぬ
B　はくうけ給はりぬ
A　はくうけ給はりぬ

C　かく承候ぬ
B　かく承候ぬ
A　かく承候ぬ

C　はかくうけ給はりぬ
B　はかくうけ給はりぬ
A　はかくうけ給はりぬ

C　これはこれ是
B　これは是
A　これは是

C　ほつ申されけるはこれ
B　ほつ申されけるはこれ
A　ほつ申されけるはこれ

C　しんほつ申されけるはこれ
B　しんほつ申されけるはこれ
A　しんほつ申されけるはこれ

C　★★申すやうは是はかやうに候ぬ
B　★★申すやうは是はかやうに候ぬ
A　★★申すやうは是はかやうに候ぬ

C　給ふ月日はいつくの國をめくらせ給ひ候そと申せはしゆみの山を
B　給ふ月日はいつくの國をめくらせ給ひ候そと申せはしゆみの山を
A　給ふ月日はいつくの國をめくらせ給ひ候そと申せはしゆみの山を

C　月日はいつくの國を何所の国をくらせ給しそ須弥山
B　月日はいつくの國を何所の国をくらせ給しそ須弥山
A　月日はいつくの國を何所の国をくらせ給しそ須弥山

C　ふ月日はいつくよりして何所へまはらせ給ふやらんと申せはしゆみせんの
B　ふ月日はいつくよりして何所へまはらせ給ふやらんと申せはしゆみせんの
A　ふ月日はいつくよりして何所へまはらせ給ふやらんと申せはしゆみせんの

C　ありとよまれたり新発又
B　ありとよまれたり新発又
A　ありとよまれたり新発又

C　しんほつかれはうけ給はりぬ
B　しんほつかれはうけ給はりぬ
A　しんほつかれはうけ給はりぬ

C　★★うけたまはりて候ぬ
B　★★うけたまはりて候ぬ
A　★★うけたまはりて候ぬ

C　此日本てらさせ
B　此日本てらさせ
A　此日本てらさせ

C　日のもとより出させ
B　日のもとより出させ
A　日のもとより出させ

C　也
B　也
A　也

C　さかひとして四しをまはらせ給ひ候也ほくしゆはにしより
B　さかひとして四しをまはらせ給ひ候也ほくしゆはにしより
A　さかひとして四しをまはらせ給ひ候也ほくしゆはにしより

C　堺として北州はにしより
B　堺として北州はにしより
A　堺として北州はにしより

C　さかひにして
B　さかひにして
A　さかひにして

C　よも
B　よも
A　よも

C　をめくりたまふなり
B　をめくりたまふなり
A　をめくりたまふなり

C　ほくしゆはみなみより
B　ほくしゆはみなみより
A　ほくしゆはみなみより

C　日いてゝひかしに入給ふ
B　日いてゝひかしに入給ふ
A　日いてゝひかしに入給ふ

C　日出て東に入給ふ
B　日出て東に入給ふ
A　日出て東に入給ふ

C　也あれのひるは是のよる
B　也あれのひるは是のよる
A　也あれのひるは是のよる

C　これのひるはこれのよる
B　これのひるはこれのよる
A　これのひるはこれのよる

C　これのひるはあなたの夜
B　これのひるはあなたの夜
A　これのひるはあなたの夜

C　はれの夜
B　はれの夜
A　はれの夜

C　神通方便の身をうけて国土をてらさせ給ふ日月たに
B　神通方便の身を請て国土を照し給ふ日月たに
A　神通方便の身を請て国土をてらさせ給ふ日月たに

C　なり
B　なり
A　なり

C　もしゆしやうけとのために一時のひまもなくおはします須弥山
B　もしゆしやうけとのために一時のひまもなくおはします須弥山
A　もしゆしやうけとのために一時のひまもなくおはします須弥山

C　せん
B　せん
A　せん

C　衆生のくゐとのためにしゆしやうけとのためにもなく
B　衆生のくゐとのためにしゆしやうけとのためにもなく
A　衆生のくゐとのためにしゆしやうけとのためにもなく

C　をさかひとして
B　をさかひとして
A　をさかひとして

C　あけてもくれてもやすますめくり給ふまして
B　あけてもくれてもやすますめくり給ふまして
A　あけてもくれてもやすますめくり給ふまして

C　明
B　明
A　明

C　てもやすみたまはてはまはりたまふまして
B　てもやすみたまはてはまはりたまふまして
A　てもやすみたまはてはまはりたまふまして

C　暮
B　暮
A　暮

C　ほんふの身にものゝくさきひまもなきなとゝはもろ／＼申ましき
B　ほんふの身にものゝくさきひまもなきなとゝはもろ／＼申ましき
A　ほんふの身にものゝくさきひまもなきなとゝはもろ／＼申ましき

C　凡夫の身にものくさきひまなきなとゝはもろ／＼申間敷
B　凡夫の身にものくさきひまなきなとゝはもろ／＼申間敷
A　凡夫の身にものくさきひまなきなとゝはもろ／＼申ましき

C　ほんふの身として隙もなきはものくさき
B　ほんふの身として隙もなきはものくさき
A　ほんふの身として隙もなきはものくさき

C　事にて候そ
B　事にて候そ
A　事にて候そ

C　御はうとよみ給ひぬ
B　御はうとよみ給ひぬ
A　御はうとよみ給ひぬ

C　事にて候やと御坊よとよみ給ふ
B　事にて候やと御坊よとよみ給ふ
A　事にて候やと御坊よとよみ給ふ

C　しんほつ
B　しんほつ
A　しんほつ

C　たまふ新発意
B　たまふ新発意
A　たまふ新発意

C　これはかく
B　これはかく
A　これはかく

C　しぬほち是はかやうにうけ
B　しぬほち是はかやうにうけ
A　しぬほち是はかやうにうけ

C　給はりぬ又
B　給はりぬ又
A　給はりぬ又

C　候ぬ此この國の
B　候ぬ此この國の
A　候ぬ此この國の

C　国の下したに
B　国の下したに
A　国の下したに

C　たまはりて候らぬ國は候はぬ
B　たまはりて候らぬ國は候はぬ
A　たまはりて候らぬ國は候はぬ

C　国は候はぬやらん
B　国は候はぬやらん
A　国は候はぬやらん

C　★これより下
B　★これより下
A　★これより下

C　にもこの國の
B　にも國の
A　にもこの國の

C　國ありねの國ゆいまんこく
B　國ありねの國ゆいまんこく
A　國ありねの國ゆいまんこく

C　にも国ゆいまん国
B　にも国ゆいまん国
A　にも国ゆいまん国

C　そこのくに野へのくに
B　そこのくに野へのくに
A　そこのくに野へのくに

C　祢の国
B　祢の国
A　祢の国

C　★なとゝはふとてとて候そかし
B　★なとゝはふとてとて候そかし
A　★なとゝはふとてとて候そかし

C　そこの国野邊の国
B　そこの国野邊の国
A　そこの国野邊の国

C　とて候そかし
B　とて候そかし
A　とて候そかし

C　そってんたうりへはこれらみなせかいなれはこの國
B　そってんたうりへはこれらみなせかいなれはこの國
A　そってんたうりへはこれらみなせかいなれはこの國

C　率天切利天なとゝて三十三天
B　率天切利天なとゝて三十三天
A　率天切利天なとゝて三十三天

C　てんさひりむ天
B　てんさひりむ天
A　てんさひりむ天

C　とて三十三尺此等はみなせかひなれはこの國
B　とて三十三尺此等はみなせかひなれはこの國
A　とて三十三尺此等はみなせかひなれはこの國

C　うてんとて都
B　うてんとて都
A　うてんとて都

C　より上
B　より上
A　より上

C　に国は候はぬやらん
B　に国は候はぬやらん
A　に国は候はぬやらん

C　是
B　是
A　是

C　より
B　より
A　より

C　うへに国はあり
B　うへに国はあり
A　うへに国はあり

C　夜摩天
B　夜摩天
A　夜摩天

C　【C発原本發以下同】
B　【C発原本發以下同】
A　【C発原本發以下同】

C　これより
B　これより
A　これより

C　ケ様に承候ぬ
B　ケ様に承候ぬ
A　ケ様に承候ぬ

C　さては是
B　さては是
A　さては是

C　とはれけれは
B　ひけれは
A　申せは　そうして道道みちはいくつもあり我朝のすいしやく達の一年に
C　とのへ國へかよひ
B　一度野辺の国へかよはせ給ふ道
A　一度の祢のくにかよはせ給ふみちは八十六あるそかし神の一年に八拾六候なり★これは神のかの国へ
C　一度かの國にましまたる御跡／＼
B　ましまし／＼
A　あとにに四方の衆生
C　一度彼国
B　一
A　ゆしやう
C　衆生
B　の参りてしよ
A　の参りて所
C　まいりてのそみ
C　まうの事をいのりしに
B　望の事をいのりしに
A　の事をいのりしに
C　かなはねは
B　かなはねは
A　けんもおはしまさぬ
C　しるしもましまさぬなんとゝて
B　しるしもおはしまさぬ
A　と申て
C　と申て

C　うらむる也
B　うらむる也
A　神を
C　あるしなき家に行てよこしまを
B　あるしなき家に行てよこしまを
A　いふとも人かいへとも人かゝ
C　★あるしなき家に行てようしよをもゆいたるにぬしは
B　★あるしなき家に行てようしよをもゆいたるにぬしは
A　★かるしめたて奉る事ありそれは
C　あらは　こそ返事をもしよこしよをもきかめ
B　あらは　こそ返事をもしよこしよをもきかめ
A　そのやうに神も
C　あらはやこそ返事をもすへきに　用所をもきかめ
B　あらはやこそ返事をもすへきに　用所をもきかめ
A　そのやうに神も
C　かやうにかみ
B　かやうにかみ

C　おはしまさぬやしろにまいりて
B　おはしまさぬやしろにまいりて
A　申時きゝいれ給はぬ也
C　おはしまさぬ跡に参りて
B　おはしまさぬ跡に参りて
A　申時きゝ入給はんなり
C　ていのり申時聞
B　ていのり申時聞
A　かゝる
C　入給はんなり
B　入給はんなり
A　かゝる

C　事をしらすしてその神は人の申事なんと
B　事をしらすしてその神は人の申事なんと
A　かなへ給はぬとうらみ
C　事をしらすしてそのかみは人の申事をかなへさせ給ひ候ぬなんとゝもろ／＼
B　事をしらすしてそのかみは人の申事をかなへさせ給ひ候ぬなんとゝもろ／＼
A　とかなへ給はぬとうらみ

C　申ましき事にて候そと
B　申ましき事にて候そと
A　ときゝ給ふ
C　申ましきことそやとそ
B　申ましきことそやとそ
A　の説給ふ又新発さては其道は何十里はかり
C　候や　こともおろかや百五十年百六十年百三十年百二十年の
B　候やらんそうしての事もおろかや百五拾年百四十年百三十年百廿年は一の
A　みちは
C　みち也　とそよまれける　そのなかにちかきも候やらん
B　道也　とそよまれける　其中にちかきも候やらん
A　我朝くまのゝ
C　道なりと　の給ふ
B　又熊野
A　権現のすくに野辺へかよはせ給ふ道　こそちかけれそれは何十十
C　権現のすくに野辺へかよはせ給ふ道　こそちかけれそれは何十十
B　権現の國へかよはせ給ふ道　こそちかけれそれは何十十
A　こんけん

C　里候やら
B　里候やら
A　里候やらむ　なん十里とは
C　ちかきちやう九十年のみちより
B　★ちかきちやう九十年のみちより
A　★近くとも九拾九年のみちより　その道より
C　ねの國へかよふ事の候やらんと申せは生おちて
B　祢の国へかよひ候事の候やらんと申せは生おちて
A　★いかにそれ候はんより行とも行
C　人の祢の国へ行かよふ
B　人の祢の国へ行かよふ
A　つき候はしとそとき給ふ
C　つくへきやと説給ふ
B　つくへきやと説給ふ
A　さも候へふしきにてさる事の候はんやかし
C　つくましきとそ仰られける
B　つくましきとそ仰られける
A　新発申けるはともかくもして
C　こうふしきにてはゆく事もあり
B　こうふしきにてはゆく事もあり
A　これへかへり
C　こさふしきにては行事も有こそせめ
B　こさふしきにては行事も有こそせめ
A　是へ帰りこれに帰り
C　ふしきにもゆくこともありこそせめ又しんほちゆきて★
B　ふしきにもゆくこともありこそせめ又しんほちゆきて★
A　さふらはんに又
C　候はんやそれはゆきはつきたるともかへり
B　候はんやそれはゆきはつきたるともかへり
A　神の
C　てんやそれは行きはつきたりとも帰りおもふましきなり
B　てんやそれは行きはつきたりとも帰りおもふましきなり
A　神の
C　候　やそれは行こともあり共帰　ましき也それは如何にと申に神の
B　候　やそれは行こともあり共帰　ましき也それは如何にと申に神の

C　★にておはし候へは神の本地はへひしやにておはし
B　★にておはし候へは神の本地はへひしやにておはし
A　候へは神の
C　とにておはしまし候へはかみの
B　とにておはしまし候へはかみの
A　神の
C　国にてましませは　神の本地はへひ也しやたいにてはたらせたまへ神の
B　国にてましませは　神の本地はへひ也しやたいにてはたらせたまへ神の

C　★しやうと　まいる物をしきしてあらんにはかへるましき也
B　★しやうと　まいる物を食してあらんにはかへるましき也
A　ふしきにて
C　まひるものをくひてあらんには帰るましき也★★拔　★新発又申けるは不思儀にても
B　まひるものをくひてあらんには帰るましき也★★拔　★新発又申けるは不思儀にても
A　さて
C　くうてかへらんにはいかゝ候へきそれは帰らんにはいかゝ候へきそれは帰らん
B　くうてかへらんにはいかゝ候へきそれは帰らんにはいかゝ候へきそれは帰らん
A　するそとそ
C　日本の物を　くうて帰らんにはいかゝ候へきそれは帰らん
B　日本の物を　くうて帰らんにはいかゝ候へきそれは帰らん
A　ふしきにて
C　此日本の物をもちくひてかへり候はんすらん
B　此日本の物をもちくひてかへり候はんすらん
A　□
C　くうてかへり
B　くうてかへり
A　とそ
C　よませたり又しんほつこの國物をくいてかへり
B　よませたり又しんほつ此国の物さやうにかへりて
A　の親類
C　候はゝわか國のしんるい
B　候はゝわか國のしんるい
A　の給ひける新発
C　又しんほつ此国の物さやうにかへりて
B　又しんほつ此国の物さやうにかへりて
A　此国の親類
C　兄弟なんとのみしられ見しり候はんや
B　兄弟なんとのみしられ見しり候はんや
A　あのくににてきたる物をぬかん
C　兄弟　見しられ候はんするやらんそうしてあの国にて着たるる物をぬかん
B　兄弟　見しられ候はんするやらんそうしてあの国にてきたらん物をぬかん
A　す
C　すはしるましき也人にてはありともきたる
B　すはしるましきなり人にては有ともきたる
A　はへひにて見えなんする
C　んは見知るましき也人にてはあるとも物はへひのすかたに見ゆる
B　んは見知るましき也人にてはあるとも物はへひのすかたに見ゆる
A　あなうれ
C　也御はうとそとき給ふ
B　也御はうとそとき給ふ
A　三郎殿これをきゝ給ひて
C　也とそ仰られける其時新発よろつの不審をひらき候とそ申ける去程三郎殿嬉
B　也とそ仰られける其時新発よろつの不審をひらき候とそ申ける去程三郎殿嬉
A　三郎殿是を聞給ひて
A　あなうれ

C しやかね家か観音の利生　ゑは観音の御りしやうはやかうふりたりこれ　こそ
B しや兼　しやかね家は観音の御りしやうはやかふりこれかれこそ
A 御たくせんよと　よろこひ給ふ事かきりなし　あはれはや／＼
C 御たくせんよと　よろこひ給ふ事かきりなし　あはれはや／＼
B 御たくせんとて　よろこひ給ふ事かきりなし　あはれはや／＼
A 夜のあけよかし　わかきたる物をぬきすてゝ見んとおもひて明
C 夜の明よかし　わかきたる物をぬきすてゝ見むと思ひ給ひて　あくる
B 夜の明よかし　わかきたる物をぬきすてゝ見むと思ひ給ひて　あくる
A をおそし　とまち給ふ　あけれはまいりの人かうしけり　あとに
C をおそし　と待給ふはや夜も　明けれは参の人下向しけり
B をおそし　と待給ふはや夜も★あけれは参たまふ人／＼皆下向し給ふ其時
A ゑんのしたを　くゝりいて給ひてき給　つる三のこそてをぬきて
C ゑんの下を　くゝりてゐて給ふき給　へる三つのこそてをぬきて
B ゑんの下　よりくゝり出て　きたまひたる　白小袖をぬきて
A すて給ひて御らんすれはあをのつゝといふ三　のへひになりて三はうに
C すて給ひ　御覧すれはあせのろしといふみすちのへひとなりて三方へ
B　見たまへは　あけのへ　といふ　このへひになりて
A ゆきうせぬ　三郎殿このほとかゝるをそろしき物　をきてあり
C 行うせぬ　三郎殿これほとかゝるおそろしき物　をきて有
B うせにけり其時　三郎殿これほとかゝるおそろしきものをきたりつらん★
A けるそや　きのふのあした　おちられけるもことはり也　とそおほし★ふしきさよ
C けるそや　昨日のあした　おちられけるもことはりなりとそおほし
B　昨日　をぢられし事はことはり也　とそおほし
A めしける　ゑんにはたかに　てこしうちかけておはしけり　さる
C て　えんにはたかに　てこしうちかけておはしける　去
B て　ゑぬにはたかにして　おはしける
A ける御堂の　ほとにみたうのうしろ　より六十はかりのらうそうのくろき衣　を
C 御堂の後の方　程に御たうのうしろとより六十はゆうの老僧　くろころも
B　より六拾はかりの老　僧
A きゆひてとをり給ひけるか三らん殿を御らんして　いかに　とのはは
C きゆひて通り給ひけるに三郎殿を見つけ奉りて　いかに　殿はは
B 出給ひけるに行逢て　いかにやとのはは
A かにておはしますそとおほせられけれは　このみたうにまいり
C かにてはすそと仰られけれはゆうへこの御たうに参り
B かにておはしまし候とその給ひは★夕部あの御堂にまいりて
A ★三ら殿仰られけるは

A　／＼いまいりてきたのかた小太郎殿に　かくと申せは　たゝゆめのこゝち
B　／＼★参ていりきたのかた　小太郎殿に　かくと申せは　たゝ夢の心ち
C　／＼★御まへにはしりきたの御かたにも小太郎殿にも　かくと申けれは　たゝゆめの心ち

A　して　さらにうつゝとも　おもひたまわす
B　して　うつゝともおも　はす
C　して　さらにうつゝと　おもひたまはす

A　さりなからいかなるてんまきたりてもあれ　まさしく三ら殿の御
B　さりなから　天魔外道にてもあれ　まさしき三郎殿に御
C　如何なるてんま来りてもあれ　まさしく三ら殿の御

A　すかたにておはしませ　はとてはしりいてきたの御かたも小太ら殿も
B　対面たいにておはしますなれはとていそきわたりて北の方　小太郎
C　すかたにておはしませ　はとて　出てきたの御かたも

A　さうの御てにとりつきてうれしきにも｜なみたつらきにもなみた　たゝ
B　さうの　てにとりつきてうれしき　もなみたつらき　も　たゝ
C　左右の御手にとりすかりて嬉しきに★涙なりけり　たゝ
★もつらきにさきたつものは

A　なみたをおさへてなくより外のことそなき　さるほとに三ら殿
B　涙をおさへて
C　なくよりほかのことそなき　さる程に三郎殿

A　御さしきになをり給ひて　ありしむかしの事を　なみたにむ
B　有　しむかしの事共を
C　御座敷　になをり給ひて　ありむかしの事を　なみたをおさへて

A　せひうちなき／＼そかたり給ひける　はしめ二人のしやきやうに
B　の給ひて　二人の舎兄　に
C　うちなき／＼かたり給ひける　はしめ二人の兄の

A　あひてあらそひの事わかさのくにかうかけ山にて　きりんわうを
B　あひてあらそひの事　からかけ　山にて　きりんわう
C　あらかひの事若　狭の国からかけの山に入てきりん王を

A　うちとり給ひし事　あなのそこのひめきみの事　かゝみのゆ
B　うち給　ことあなの中　のひめ君　の　かゝみ　ゆ
C　うちとりしやう　穴のそこのひめ君の事　鏡　のゆ

A　へにふたたひあなにいり給ひし事　しやきやうにすてられ
B　へに二たひ穴に入給し事　さてしやきやうにすてられ
C　へに二度あなにいり給ふことさてあにの人々にあなにすてられ

A　給ひし事　祢のくにのあり様　なきの松はらにてあき人には
B　し事
C　し事　祢の国　の有　様　なきの松原　にてあき人にわ

A　らはれし事又きのふのあしたへひとて　うたれし事　こさゝ
B　昨日のあしたへひとて　うたれ給し事
C　らはれし事又きのふの朝　へひといはれて　あまつさへ小さゝ

A　女にふすめられしおもひのこゝろにかなしみ給ふ事　ゆうへ
B　ゆふへ
C　女にふすめられしおもひのこゝろにかなしみ給ふこととも

A　みたうにまいりて　観音の御りしやうにより　いしやうをぬき
B　御たうに参　て　観音の御りしやうによりて　いしやうをぬき
C　

A　給ひし事｜かたり給ひけれはみなく／＼一日一夜そあかし給ふ
B　給　し　かたり　けれは　一日一夜そかたり給ふ
C　かたりてなき／＼し給へは★上下万民袖をそしほりける
★ねうはうたちをはしめて

A　さて太郎殿二ら殿は　おはしますかととひ給ひけれはゆきいゐさん候
B　さても太郎殿二郎殿　いまたおはしますか　さん候
C　扨★兄の殿原はいまたおはしますかととひ給ひけれは☆まし／＼候
★三郎殿仰られけるは☆きやう人いまた

A　と申　たとひしやきやうにてもおはしませ　このとし月のむくひを
B　と申　舎兄にてもおはしませ　此とし月のむくゐを
C　と申　其時三郎殿　兄にても御わたり候へ★此年月のむくひを
★つらかりし事

A　しらせ申さてはえもこそあるましけれとて　とうを　きもくし
B　しらせ申まてはしはしそあるましけれとてらうとふ　きもくし
C　おもひしらせたてまつらんとて　わかたうともは一人もつれ

A　給はす　たゝ御身一きにて太郎殿　たちへそおしよせ給ふさて
B　給はす　たゝ御身一騎にて太郎殿のたちへ　おしよせ給ふ　えんのきわへ
C　給はすして　たゝ壱人　太ら殿館　ゐそ押　よせて　ひろゐんのきはに

A　★つんたちて　ゆ　つへ　つきてその給ひける　かうかの
B　馬うちよせ給ふ★つゝたちあかりゆんつえをつゐて　の給ひけるはかうかの
C　馬うちよせ　つたちあかりゆ　つゐにすかりての給ひけるはかうかの
★ABあふみふんはり

A　太郎殿二ら殿おはしまし候やらん　いてさせ給へけんさん申さんかく
B　太郎殿二郎殿おはしまし　やらん　ゐてさせ給へ見参申さむかく
C　太ら殿　おはしまし候か　はや／＼出させたまへと仰られて是ケ様に

A　申ものは　かうかけ山にてきりんわうかいはやのうちにすてられ
B　申物をいかなる物とは★からかけ山にてきりんわうの岩屋のうちにすてられ
C　申候は如何なるもの☆からかけの山にてきりん王　を岩屋の内にて打とりし
★おもひ給ふらんひとゝせ若狭の国　☆とかおほめし候是こそ一とせ若狭の国

A　たてまつりしかうかの三郎かねいゐこそけふと申にふしきに　ま
B　給ゐし　かうかの三郎かねいゐこそ　ふしきにけふと申すに参
C　かうかの三郎兼　家　こそ今日と申に不思儀に是まて　ま

C いり候へとたいおんをあけて　の給へは　上下あはて　まとふ事
B りて候へと大をんあけてそ名乗給ふ　上下あはてゝさわくこと

C かきりなし　はや／＼御いて候へ　見くるしく候物かなと　おそく候そとせ
B かきりなし　はや／＼御ゐて候へ　見くるしく候物かなと　おそく候そとせ
A かきりなし　はや／＼御出　候へ　見くるしく候物をやとて

C めき給　ふふ　おりし太郎殿二郎殿すくろくうちておはしましけるかこのよし
B めき給　ふふ　折節太郎殿二郎殿すくろくうちにおはしけるか此よし
A めたまふ　おり　ふし二郎殿も参り給いて双六うちてまし／＼けり此よし

C をきゝ　おほきにおとろき給ひて　仰られけるは物きゝ給へ二郎殿
B を聞給ひて大　おほきにおとろき給ひて　仰られけるは物きゝ給へ二郎殿
A を聞給ひて大　おほきにおとろき給ひけり　仰られけるはもの聞たまへ二郎殿

C 三郎殿の我　ら殿にわれらうちいてゝいくさするとてもうかうち出ていくさするとても　★★太郎殿　かたん事せんまんに打かたん事千万に
B 三郎殿の我　わうかうち出ていくさするとてもうちかつ事
A 三郎殿の我　わうかうち出ていくさするとてもうちかつ事

C ひとつもあるへからすいさやしし□いひとつも有へからすいさやしかいあるへからすいさやしかいをせんとのたまへは　せんせんとの□二郎殿殿も　二ら殿と仰られけれは
B ひとつもあるへからすいさやしし□いひとつも有へからすいさやしかいあるへからすいさやしかいをせんとのたまへは　せんせんとの□二郎殿殿も　二ら殿と仰られけれは
A ひとつもあるへからすいさやしし□いひとつも有へからすいさやしかいあるへからすいさやしかいをせんとのたまへは　せんせんとの□二郎殿殿も　二ら殿と仰られけれは

C もつとも　か　こそそんし候へとの□　ひてこしのかたな　たかひに
B もつとも　か　う　こそ存候へとの給　ひてこしのかたなを　たかひに
A 尤　我等もかやうにこそ存候へとのたまひて　てこしのかたなを　たかひに

C ぬきいたして　すく六　はんのうへにてさしちかへ　うせ給　ふ　三郎殿殿
B ぬきちかへ　すくろくはんの上　にてさしちかへてそうせ給　ふふ　三郎殿殿
A ぬきちかへ　すくろくはんの上　にてさしちかへてそうせたまふふ　三郎殿殿

C 此事を　見給　ひていかに候　一たんのうらみをこそ　申て候へ　御し
B 此事を　見給　ていかに　一旦のうらみ　こそ　申て候へ　御し
A うちにいりて見給　ていかに物を申さんためにこそかやうに申て候へは御し

C 事よとてなけき給　へと
B 事よとてなけき給　へと
A 事よとてなけき給　へと

C かい候　かひそなし
B かひ　かひもなし
A かひこそ　なけき　いり候へとありけれ共　甲斐そなき

C さてあるへきにあらねは　やくはひにおくりたてまつり　ふもとの
B さて有へき　ならねは　やく　いにおはりたてまつり　ふもとの
A 霞　かすみとやきあけ　ほのおの　しめりけれは　こつをひろい　御へうに
B 霞　とやきあけ　ほのを　としめりたれは　こつをひろい　御廟に

C おさめたてまつる三ら殿　たちへかへらせ給ひしにいわ屋のうちよりとり
B おさめ奉り三郎殿わかたちへ帰らせ給ひしに岩屋のうちよりとり
A 去程に岩屋の内より取

C いたしまいらせ給ひしひめきみのそのときも十二三はかりに見え給ひしか
B 出しまいらせ給ひしひめ君のそのときも十二三はかりにて見え給ひしか
A 出シ奉りし姫君の其時十二三はかりに見え給ひしか

C いまも十二三のほとのよわひにてたちいてさせ給て　三ら殿にあひま
B 今も十二三のよわひにて　てさせ給て　三郎殿にあひ参
A いまも十二三のよはいにて　むかひ給ひて

C らせて仰　せ有けるは　いかに／＼三郎殿聞給　ま／＼てわらはこそ是に
B 仰られけるは　いかにや　三ら殿今　まてわらはこそ
A

C あり　とくにもかへりぬへかりしかともとのゝいらせ給　をまちま
B あり　とく　帰りぬへかりし　とも殿の入　せ給ふを待ま
A ゐて候へ　くに　かへり候へかりしを　とのを　まち奉りて

C いらせて候つるそわらはゝいかなるものとかおほしめす　今はなにを
B いらせて候へはそわらはゝいかなる物とかおほしめす　今はなにを
A いまゝて★★候そわらはをはいかなるものとかおほしめされ候今はなにをか

C かくし申へきわらはゝこゝにまことのほんふにてはさふらはす山とのくにすきたて
B かくし申へきわらは誠の凡夫にてはさふらはす大和国杉たて
A かくし奉り候へきわらはまことのほんふにて候はぬなりやまとの国すきたて

C る門　のひめみやの大明神とはみつからか事　にてさふらふそ　なとかみ
B のかと　ひめみや　大明神とはみつからか事也　にてさふらふそ　されは神鏡

C はおにとられけるかとそおほしめすらん　みつからかおにゝとられし
B はおにとられけるかとそおほしめすらん　みつからかおにゝとられし
A は鬼神にとらるゝそとおほしけん事は　みつからかおにゝとられし

C ゆへはわらは見めかたちよきとて日本のすいしやくたちのふさいに
B ゆへはわらはかみめかたちよきとて日本の垂迹とたちのふさいに
A みめのすかたよく候程に日本のすいしやくたちの

C せんとて　きよくしやうをかよはし給　ひしかとも　もちひさりしに
B せんとて　きよ　しやふをかよはし給　ひしかとも　もちゐさりしに
A 玉つさをかよはしたまひしか共　もちいす候に

C て　すいしやくたちはらをたゝせ給ひて　きりんわうにとらせて
B よつて　すいしやくたちはらをたゝせ給ひて　きりん王にとらせて
A よつて　すいしやくたちのはらをたてさせ給ひて彼きりん王にとられて

C　いわやのうちに三とせかほとうちこめておかせ給ひしを
B　岩屋のうちに三年のほと打こめてをかせ給ふをわらはかおちを
A　三とせかほと岩やのうちにおしこめられておかれしをわらはかをち

C　こせんうはこせんしゆきにあのひめみやをいは屋のうちにてはうこせんおはこせんをしゆきしあひ屋の内にてはて
B　御せんうは御前のあつまりてひめみやを岩屋のうちはて
A　御せんひめみやを岩

C　らせ給ふへきかとのせんきありし時わらはかおうち御せん
B　させ給ふへきかとのせんきありしときわらはかおうちこせんかましの
A　させたまふへきとのせんきわらはかおはこせんにしかのしまの

C　大明神のおほせには たゝしきりんわうをついたうすへきものは
B　大明神の仰に たゝし麒麟王をつゐたふすへきものは
A　大明神の仰に たゝしきりん王をうちとるへきものは

C　かうかのものともこそあるらめ かうかのもの にたましゐをいれよとて
B　かうかの物ともにこそあるらめ かうかの物ともにたましゐを入よとて
A　かうかのもの共 こそあらめとて彼 ものともにあらかいをさせて

C　とのはらに神のいるゝたましゐにて 山うみのおそろしき物おとり
B　殿原に神のいれたましゐにて 山海のおそろしき物のおとり
A　殿原に神のいれたましゐにて 山と海との

C　まさりのあらそひ給ひしも とのはらのほんたましゐにてはな
B　まさりのあらそひしし給ひし也 殿原本にたましゐにてはな
A　あらかいをしたまふたりし給し也 更々との原ほとのたましい

C　きそさて太ら殿二ら殿わらはをふさいにせんとし給ひしにわらはほふ
B　きそさて太郎殿二郎殿わらはをふさいにせんとし給ひしてわらはほふ
A　かりし太郎殿二郎殿はわらはをはふさいにせんとしたまひしを凡夫に

C　二世のちきりをこめて神に成
B　二世のちきりをこめて神になる
A　ちきりをこめては神になる

C　★★によつて へし又ほんふのおもひをして 神にはふのおもひをかふりても神に
B　★まし程に ★まし又ほんふのおもひをかふりても神に
A　★ましき程に ★ましほんふのおもひをかふりても神に

C　よもならしとおもひ おく山に入てかしの木をきりよせ てわらわかか
B　よもならし★おもひにて おく山に入てかしの木をきりよせ てわらわかか
A　なりかたし★おもひにて おく山に入てかしの木をきりて みつからかか

C　かたちにつくり なんろたんのたましゐをいれて太ら殿二ら殿にはあは
B　たひにつくり なんろたんのたましゐを入て太郎殿二郎殿にはあは
A　顔に作 なしてろたんのたましひをいれて太ら殿二郎殿に あは

C　せて候しそ ひとへにわらはにあふとそおもひ給ひつらんさてとのはら
B　せて候しそ たゝのほんにわらはにあふとそおもひ給ふつらんさてとのはら
A　せて候けるも ひつやうに自 にあふとそおもひ つらん とのはら

C　まわうの物見えすとて かへり給ひしにくろひめの
B　まわうの物見えすとて かへり給ひしにくろひめの
A　広王の物を見んとて ★★帰りたまひしにくろ姫の

C　おきなのわさの國かうかけ日本をめくりて給ふ時広王のなしとて
B　おきなのわさの國かうかけ山にあるとの給ひしこそくろひめのこんけんよ
A　翁の若狭国からかけ山にあるとの給ひしこそくろ姫の権現よ

C　それを　あなのそこにて見しそかし　又かうかけ山のくちにてくみなわ
B　それをそれを　あなの底にて見しそかし　又からかけの山のくちにてくみなわ
A　それをもそれをも　あなのうちにて見しそかし　又からかけの山のくちにてくみなわ

C　をこしにつけて　をのうちかつきておはしましし候おきなこそ山のこそ山の
B　をこしにつけて　おのうちかつきておはしましし翁　こそ山の
A　★★わらはをこしにつけて　おのうちかつきておはしましし翁　こそ山の

C　さんしんこうにておはしませ　又称の國にてあわのしゝ　おはせ給ひし
B　山　こうにておはしましゝか　又禰の国にてあはのしゝ　おはせ給ひし
A　神よ　こうにておはしましゝか　又称の国にてあはのしゝ　おはせ給ひし

C　おきなこそ わらはかちゝかたのおほち御せんよ　いとこ御せんあつまりて
B　おきなこそ わらはのちゝかたのおほち御せんよ　いとこ御せんあつまつて
A　翁★称の国にをちつきましまし候おきなこそ わらはかちゝかたのおほち御せんよ★

C　せんきに三郎殿は称の国へ落たるしよく　おはかちゝかたのおほち御せんよ　いとこ御せんあつまりて
B　せんきに三郎殿は称の國に　おはかちゝかたのおほち御せんよ　いとこ御せんあつまつて
A　せんきに三郎殿は称の国に　おはかちゝかたのおほち御せんよ　いとこ御せんあつまつて

C　せんきある時わらはかおちゝ御せんかしまの大明神にて
B　せんきあるわらはかおちゝ御せんかしまの大明神にて
A　せんきあるわらはかおちゝ御せんかしまの大明神にて

C　せんき有とき　わらはかおふこせんかの嶋の大明神の御はからひにいそき
B　せんき有とき　わらはかおふこせんかの嶋の大明神の御はからひにいそき
A　せんき有とき　わらはかおふこせんかの嶋の大明神の御はからひにいそき

C　＜くまのゝこんけんにまいり給ひてしゝを一ひき申おろし給ひし
B　＜熊野ゝ権現にまいり給ひてしゝを一疋申おろさせ給ひし
A　熊野ゝ権現にまいり給ひてしゝを一疋申おろさせ給ひし

C　しゝそかしとのいさせ給ひ　しゝはそれ也　さておきな松はらに
B　しゝそかし殿のいさせ給ひたりし　しゝはそれなりさてなきの松原にて
A　しゝなり　又なきの松原にて

C　牛　二ひきにしほをつけし　あき人こそかしまの大明神にて
B　うし　にしほゝつけ　あき人こそかしまの大明神にて
A　牛　なときしあき人こそかしまの大明神よ

C　おはしませ　たゝのほんふなはとのをはへひとしりたらはこそ
B　おはしましゝかたゝのほんふからはとのをへひともいはて見しりたれはこそ
A　おはしましゝかたゝのほんふからはとのをへひともいはて見しりたれはこそ

C　せて候けるも　ひとへにわらはにあふとそおもひ給ひつらんさてとのはら
B　せて候しそ　たゝのにわらはにあふとそおもひ給ふつらんさてとのはら
A　せて候けるも　ひつやうに自　にあふとそおもひ　つらん　とのはら

C　みちをしへめたてまつらんためにこそあき人とはへんし
B　道をおしへめ　みちををしへたてまつらんためにこそあき人とはへんし
A　をもおしゑれとのに道をおしへたてまつらんかためにあき人にへんし

C　給へ　てほかには國は候はぬかと申給ひしんほつ
B　なり　にてほかにはは候はぬかと申給ひしんほつ
A　たまひたる也　さて観音堂　たうにてほかにはは国は候はぬかと申給ひしんほつ
C　又観音堂　にて　こまかにことわりをとひし新　発

C　こそちさうほさつにておはしませ
B　こそ地蔵　菩薩にておはしましか
A　こそ地蔵　菩薩　にてまし／＼候へ

C　きるものかへひに見ゆるをぬきて
B　きる物　へひに見ゆるとぬき

C　すつれは人に見ゆると　の給ひしそこそ観音にてまし／＼　候へ
B　すつれは人に見ゆると　の給ひし僧　こそ観音にてまし／＼か
A　よろつのふしん　おしへたまひし　こそ観音にてわらせたまひしか

C　さて祢の國にてあわのしゝ　おはせ給ひしおきなの　ふみたひし　か
B　さて禰の国にてあはのしゝをおはせ給ひし翁　の　文　たひしは
A　又　の御　文　たひしは

C　なとたひ　候はぬかとありしかは　これに候とてとりいたしまいらせさせ
B　なとたひ給ひ候ぬかとありしかは　候とてとり出　し参らせ
A　なと　給　らぬそとの給へは　そのとき候とて　まいらせ

C　給ふ　ひきひろけて御らんして
B　給ふ　ひきひろきて御覧して
A　たまふ　引　ひろけて御覧　して

C　戀　しくはとひてもきませやまとなるみわの山本　杉たてる門
B　こい　しくはとふてもきませ大和なる三輪の山もと杉たてるかと
A　恋　しくはとひてもきませ大　和なる三輪の山もと杉たてるかと

C　と　かゝれたるはほんふなりとも二世御
B　　かゝれたるは凡　夫なりとも二世のちきりをこめよと也それはおち
A　　★★かゝれたるは凡　夫なり共　二世のちきりをこめよと也それはおちこ

C　せんの　をしへにあらすともわらはは　か命　にかはりておはしましたる
B　せんの　をしへにあらすともわらはは　かいのちにかわりておはしましたる
A　せんの御　をしゑにあらすともみつからかいのちにかはり　まし／＼たる

C　人なれは　わらはをふひにせんとおほしめさはは　やまとの國杉　たて
B　人なれは　わらはをふさいにせんとおほしめせは　大　和国杉　たて
A　人なれは　わらはをふさいにせんとおほしめせは　大　和の国すきたて

C　る門　をたつねておはしませ　わらはかかゝみは何とて給はらぬかとの
B　る門　をたつねておはしませ　わらわかかゝ鏡　みはなとかとはなかとの
A　人　をたつねておはしませ　わらわかかゝ鏡　みはなとや給はり候はんそや

C　のか　にたつねておはし候へ又わらはか鏡　をはなとや給はり候はんそや

C　給へは　とりいたしてたてまつり給ふ　このかゝみをてんになけあけ
B　給へは　とりいたしてたてまつり給ふ此　かゝみを天　になけあけ
A　其時是に候とて　まいらせさせたまふ姫君の鏡　みとて　なけ

C　させ給ひたれは　てんへはるかにまひかりて八りう一ひきまいりたり
B　させ給ふたれは　てんにはるかにまいあかりて八りう一足まいる
A　させ給ふたれは　天　にはるかにまいあかる　八りう一足　まいる

C　彼かの八りうにめして一時かほとにやまとの國杉たてる門へいらせ給ふそのの
B　★★かのはちうにめして一時の程に大和国杉たての山へいらせ給ふされはそのの
A　★★ひかのはちうにめしてたゝ一時とき大和国杉たての山へいらせ給ふされはそのの

C　夜夜からすけるはこのとし月からすはや
B　夜からすけるはこの年　月からすのはや
A　夜★★にかからすけるはこの年　月からすの林

C　一二千御とのゝ申てかゝめきたり
B　一二千御とのゝ申てかゝめきたり☆
A　一二万御とき　申　かゝめきたる☆

C　☆BC神人申
B　☆BC神人申
A　☆BC神人申

C　しにとまらぬかこよひはしめてとまりたるは神のこよひ御とへいらせ
B　しにとまらぬかこよひはしめてとまりたるは神のこよひ御とへいらせ
A　にとまらんかこよひはしめて留　りたるは神の　いらせ

C　給ひたるあひた御とのゝ申とおほゆるいさやわれら／もも御かくらまいらせ
B　給ひたるあひた御とのゝ申とおほゆるいさやわれら／も御神楽参まいらせ
A　給ひたる間　御とのゝ申とおほゆるいさやわれら　★★御神楽まいりて

C　むとて神人ともまいりて三日三夜の御かくらをまいらせけりて大くうし
B　めの七さいになるけるに大明神のらせ給　ひて御たくせんありけるは
A　かむ　めの七さいになるけるに大明神のらせ給　ひて御たくせんありけるは

C　候はんとて神人ともまいりて三日三夜の御かくらを参らせけり★大宮司
B　のむけるに成　ける　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　
A　のむすめの七歳　になりけるに大明神のらせ給　　　　　　　　　　

C　★さるほとに
B　
A　

C　まいりて三日三夜の御かくらをまいらせ
B　しんへうなれ　まことに
A　まい天　にはり七枚地にも　七まいしきて三日三夜の御神楽まいらする
B　妙　なれ　まことに
A　枚　地に　七まいしきて三日三夜の御かくらをまいらせよ

C　山に入て　さいもくをとり
B　山に入て　さいもくをとり
A　山ゑ行て　さいもく　とりて

C　七まけんにまいりて　のをつくりて
B　七間　にまいりて　をつくりて
A　七けんにしやたん　つくりて

C　あらこも七
B　あらこも七
A　あらこも七

C　みつからをみつからとおもはゝこよひあら人
B　身つからを身つからとおもはゝ今夜あら人
A　みつからをみつからとおもはゝこよひあら人

C　のいらせ給ひんとするなり
B　のいらせ給ひんとする也
A　みつからをみつからとおもひ★★こよひあら人神のいらせたまはんとする也

C　いかになんちとも御かくらまいらせたるこそ
B　いかになんちとも御神楽まいらせたるこそ
A　いかになんちとも御かくらをまいらせたること★神　妙にうれしき也されは

C　しんへうなれ　まことに
B　妙　なれ　まことに
A　御かくらをまいらせたまこと　まことに

C　のむすめの七歳　になりけるに大明神のらせ給　ひて御たくせんありけるは
B　のむすめの七さいに成　ける　　　　　　　　　　　　　　　　　　
A　のむすめの七歳　になりけるに大明神のらせ給　ひて御たくせんありけるは

C　候はんとて神人ともまいりて三日三夜の御かくらを参らせけり★大宮司
B　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　
A　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　

C　物ならはしんとく　あたへてまほらんする也　と御たくせんそあらたなる
B　物ならはしんたく　あたゑてまもらんするなりと　たくせんそあらたなり
A　さあらは神のとくをあたへ　たゑてまもらんする也　御たくせんこそあらたなれ

C　神人かゝる御たくせんをうけ給はり　山にいりてさいもくを取　御
B　神人かゝる御たくせん　承　材　木　を　とり　御
A　神人ともに御たくせん　承て　山にいり　さいもく　とりて　御

C　たくせんにまかせてまひとのをたて御かくらをまいらせけり　さて三ら殿
B　詫宣にまかせまいとのをたて御神楽を参せける　さて三郎殿の
A　侘せんにまかせて　社をたて御かぐらまいらせけりさるほとに三ら殿の

C　ちゝくしの小太郎殿に　こほり三千八百町の所を一ゑんにゆつり
B　摘　子の小太郎殿にかうかのこほり三千八百町の所を一ゑんにゆつり
A　御ちゝくし　小太ら殿にかうかの郡　三千八百町のところを　ゆつり

C　たてまつり女房に　いとまゝいらせてたかひに御なこりをおしみ　て
B　たてまつり女房に　いとまゝ参せてたかひに御名残　をおしみ給ひて
A　たてまつる女房にも御いとまゝいらせて　御名残　おしみ給ひて

C　あら人神　はま　の國杉たてる門　につかせ給ふ
B　あら人神　は　大和の國杉たてる門　につかせ給ふ
A　あら人神となりてやまとの國杉たてのか門にいりかせ給いぬ　ひめ宮大明神の★
C　かうかの★こもらせ給ひたりしところに　をなしく御こもりありけり　されは
B　かうかのにようはう御なこりおしませ給ひて　こちんにつゝかせ給ひて
A　かうかの女房御なこりをおしみ給ひて　こちん　つゝかせ給ひ

C　てやまとの國杉たてる門につかせ給ひて　ひめ宮の明神あら人かみ
B　てやまとの國杉たてる門につかせ給ひて　ひめみやの明神あら人神
A　て大和国杉たてる門につかせ給ひて　ひめみやの明神あら人神

C　二人こもらせ給ひたる　ひとつほくらに三所の神たちこもらせ
B　二人こもらせ給ひたる　一ほくらに三ところの神たちこもらせ
A　一ほうつゝにこもりける給ひけりさる程に三所の御かみこもらせ

C　給ひてはなにとかすませ給ふへき　この所
B　給ひてはなにとはすませ給ふへき　此所
A　給ひていかゝして過させたまふへき　このところをは江夏の女房にゆつり
C　★★　されは
B
A

C　たてまつりて我らは天ちくにゆき　てすまんとてあらかみひめ宮の
B　奉りてわれらはてんちくに行　てすむとてあらかみ神ひめみやの
A　たてまつりて我々は天ちくにわたりてすきぬとてあらかみ姫宮の

C　大□神うちつれて天ちくへおもむかせ給ふに　てんちくの人あめ
B　明神うちつれて天竺におもむき給ふに　てんちくの人あめ
A　大明神うちつれて天竺に越させ給ふ　天竺の人はかみをあかめ

C　まいらせる事おろそかなれは　あらかみ仰られけるは此國は
B　参らする事おろかなりけれは　あらかみおほせられけるは此國は
A　まいらする事おろかなりしかは　あらかみおほせられけるは此國は

C　ひろしといへとも人の心か犬にて　すいしやくをあかめたてまつ
B　ひろしといへとも人の心かいぬにて　すいしやくをあかめ奉
A　ひろしといへとも人の心かなはすして　すいしやくをあかめ

C　らむ也　我朝日本國なれとも　人の心　かし
B　らぬなり　我朝日本國なれとも　人こゝろ　かし
A　ぬなり　我国日本は小国なれ共　人の心　も　かし

C　こく　てすいしやくを　おなしくは我朝
B　こく　てすいしやくを　あかめまいらする也
A　こくしてすいしやくをふかくあかむる所　なりされはかなしくわかてう

C　をまほらんとて　又日本國へかへり給ふ
B　をまもらむとて　又日本國へかへらせ給ふ
A　をまほらむとて　又日本国に帰らせたまふに天竺と唐とのさかひに

C　一りうしゆのたうけとて　あり此此一りうしゆのたうけに
B　一りうしゆのたうけとて　あり此一りうしゆのたうけに
A　一りうしゆのたうけとて　あり　あら人かみ明神

C　ひめ宮の神二所の神おりさせ給ひてやすみ給ふ　此一りうしゆの
B　ひめみやの明神二所の神おりさせ給ふてやすませたまふ　此一りうしゆの
A　ひめみやの明神二所の神おわさせ給ひてやすませたまふ　一りうしゆの

C　たうけの南のこしに二所の御神の仰に
B　たうけのみなみのこしに二所のおほせに
A　たうけのみなみのこしに神二所のおんかみたちまします此神御仰られけるは

C　あら人神　日本より　てんちくにわたりてすきさせ給はんとてわたり
B　あら人神こそ日本よりして　天竺にわたりて過させ給はんとて渡たり
A　荒人神こそ日本よりして　すきさせたまはんためにわたらせ

C　給へたれとも人あかめまいらせぬとて　又日本へおもむかせ給ふ也
B　給ひたれとも人あかめまいらせんとて　又日本えおもむかせ給ふ也
A　たまふたれとも人あかめたてまつらす候程に又日本に御かへりあるなれ

C　いさやわれ／も御とも申て日本へゆき　てすまんと　仰られはもつとも
B　いさやら我／も御供申て日本へ行　てすきんとて　尤
A　いさや我等／も御供申て日本へわたりてすきんとて　★越させたまはん

C　しかるへしとの給ひれは　日本には　はま松　ひめ松と申て所の御神
B　しかるへしと仰せ有けれは　日本には　濱　まゝつ　姫松と申て
A　しかるへしと仰せ有けれは　日本には　松　はまつ　ひめ松と申て　松はあれ

C なれとも唐松はなれは　B から松はなき　A 也わかいたらん　C われらかるて所の林候はんにうそたて

B 見候はんとゝ　A くれ松から松三本こして　C もち給て

B 候はんとて　A くれ松から松三本こして　C 持給ひて

B はんとて　A くれ松から松三本こして　C もたせたまひて

C あら人神とうちつれて日本へおもむかせ給ふ

B あら人神とうちつれて日本へおもむき給ふ

A あら人神とうちつれて日本へおもむきまいらせ給ふさるほとに

C ゆんてめてにさけて

B ゆんてめてにさけて

A 一所の御神は我朝に

C 一所の御神は我朝に

B 一所の御神は我朝に

A 一所の御神は我朝に

C つかせ給ふて　B 給ひて　A 給ひて　C 津の國　B 津の國　A 住すみよしの郡　C 住すみよし　B 住すみよしの郡　A 住すみよし　C つのくに　B にに　A の吉　C 吉　B おちつき給ふて　A おちつき給ふ　C のこほりに　B こほりに　A こほりに　C おちつき給ひて　B おちつき給ひて　A おちつき給ふ　C 住すみよし　B 住すみよし　A 住すみよし

C の大明神のこもらせ給ふ　B の大明神のこもらせ給ふ　A の大明神のこもらせ給ふ　C こもらせ給ひて　B こもらせ給ひて　A こもらせ給ふたるほくらに御こもり住吉の　C すみよしの大明神の仰せ　B すみよしの大明神の仰せ　A すみよしの大明神の仰せ　C おほせ　B おほせ　A おほせ

C には　B には　A には　C かくてひとつ　B かくてひとつ　A かくてひとつ　C ほくらに四所の神　B ほくらに四所の神　A ほくらに四所の神　C こもらせ給ひて　B こもらせ給ひて　A こもらせ給ふ　C ては　B ては　A ては　C なにと　B なにと　A なにと　C 如何

B かくて一ほくらに四所の神のこもらせ給ふ　A かくて一ほくらに四所の神のこもらせ給ふ　C ほうつゝに　B ほうつゝに　A ほうつゝに　C 三所之御神　B 三所の御神　A 三所の御神　C わたらせたまふて

C してすき給ふへき　B してすくさせ給ふへき　A して過させたまふへき　C この松をなけておちつかん　B 此松をなけてをちつかむ　A 此松をなけておちつきてあらん　C ところに行て　B ところに行て　A ところに行て

C すみ給へとてすみよしの明神　B すみ給へとて住吉の明神　A すきさせたまへとて住吉の大明神のくれ松　C くれ松　B くれまつ　A くれ松

C 一ほんゆんてにもたせ給ひて　B 一本ゆんてに持せ給ひて　A 一ほん左の手にもたせ給ふて

C 一ふりふりてなけ給へは　B 一ふりふりてなけ給へは　A 一ふりふりてなけさせたまふたれは越　C 越ゑちこの國くいて七かうかその中にまつ　B 越ゑ國くいて七かうかその中にまつ　A 越後國くいて七かうかその中にまつ　C 後の國くひき七かうの其中に松　B 後の國くひき七かうの其中に松　A 後の國くひき七かうの其中に松

C のお六十六かうかそのうへのせんちやうにおちつき給ふ　B のを六十六かうかそのうへのせんちやうに落つき給ふ　A の六十六かうかそのうへのせんちやうにおちつきて　C 尾の六拾六かうの其うへのせんちやうにおちつきて　B 尾の六十六かうの其うへのせんちやうにおちつきて　A 尾の六十六かうの其うへのせんちやうにおちつきて　C みね七たに　B みね七つたに　A 嶺七谷

C 七おちたてたてる時に　B 七つにおちたてたてまつる時に　A 七つにおちたてたてまつる時に　C 二所の御神　B 二所の御神　A 二所の御神　C 松の　B 松の　A 松の　C 尾の　B 尾の　A 尾の　C 山へわたらせ給ひて　B 山へわたらせ給ひて　A 山へわたらせ給ひて　C たつるときに　B たつるときに　A たつるへ　C 二所の御神は　B 二所の御神は　A 二所の御神は　C 松の　B 松の　A 松の　C 山にわたらせ給ひて　B 山にわたらせ給ひて　A 山にわたらせ給ひて

C かのせんちやうにおちつかせ給ひて　B かのせんちやうにおちつかせ給ひて　A かのせんちやうにおちつかせ給ひて　C むかしより今にいたるまてそのせんちやうにをちつかせ給ひて　B むかしより今にいたるまてそのせんちやうにをちつかせ給ひて　A むかしより今にいたるまてそのせんちやうにをちつかせ給ひて　C ★★権現とあらはれたまひて　B ★権現とあらはれたまひて　A 此

C しゆしやうをしゆこせさせ給ふ　B しゆしやうをしゆこせさせ給ふ　A しゆしやうをしゆこせさせ給ふ　C 衆生　B 衆生　A 衆生　C 松のおこんけんこれ也　B 松の尾の權現是なり　A 松の尾の權現是なり　C をまほり　B 守渡せ給ふ　A 渡せ給ふ　C 浅間の　B 浅間の　A あさまの　C 去程にあさまの

C こんけんは　B 權現は　A すみよしにしやをたてられたり　C 住吉に使者をたてられたり　B 住吉に使者をたてられたり　A 大ほうしこほ　C 大法師こほ　B 大法師こほ　A 五社をたてられたり　C 仰られけるは　B 仰られけるは

C うしをもてまことにて候やらん　B うしをもてまことにて候やらん　A うしを以てまことにて候やらん　C まことにて候やらん　B めつらしき　A めつらしき

C 松もたせ給ひて候とうけ給はり候　B 松をもたせ給ひて候とうけ給はり候　A 松をもたせ給ひて候と承候　C 一本給はりてみつからかゝて候山の　B 一本給はりてみつからかゝて候山の　A 一ほん給はりてみつからかゝて候

C 南のうしろのさひしく候へそたてゝ見候はんと申給ふすみよし　B 南の腰のさひしく候はゝそたて見候はんと申給ふすみよし　A みなみの★さひしく候に植たて見候はんと申させたまへはすみよし候とて　C ★こしの　B　A

C くれ松本まいらせ給ふて★★★★　B くれ松本参まいらせ給ふて★★★★　A くれ松本まいらせさせたまふてなきにうつさせ給ふて★★★★　C 一一今に　B 一一今に　A 一一今に　C ★★ABCしていまに　B ★★ABCしていまに　A ★★ABCむかしより

C いたるまてなきの松はらとはこれ也　B いたるまてなきの松はらとはこれ也　A いたるまてなきの松はらとはこれ也　C 至てなきの松原　B 至てなきの松原　A 至てなきの松原　C とはこれなり　B とはこれなり　A とは是也　C さてあらあらあの仰　B さてあらあらあの仰　A いたるまてなきの松原　C 人神の仰せには　B 人神の仰せには　A あらあらあの仰せには　C まこと　B まこと　A まこと

C やらんほとけもまつわらへぬきたる所　B やらんほとけもまつわらへぬきたる所　A やらんほとけもまつわらへぬきたる所　C をまほり給ふなれはわ　B をまほり給ふなれはわ　A をまほり給ふなれはわ　C れらかなれは　B れらかなれは　A れらかなれは　C ★★やらん仏の　B ★★やらん仏の　A ★★やらん仏の　C ねの國あないてしたりしところは　B ねの國あないてしたりしところは　A ねの國あないてしたりしところは　C しなのゝ國あさまの　B しなのゝ國あさまの　A しなのゝ國あさまの　C 彌の國より　B 彌の國より　A 彌の國より　C あなゐてしたりし所は　B あなゐてしたりし所は　A あなゐてしたりし所は　C 信濃国浅間の　B 信濃国浅間の　A 信濃国浅間の　C 祢の国より　B 祢の国より　A 祢の国より

C たけなきの松はらに　B たけなきの松はらに　A たけなきの松はらに　C そいて　B そいて　A そいて　C たりしかおなしくはその所　B たりしかおなしくはその所　A たりしかおなしくはその所　C のしゆしやう　B のしゆしやう　A のしゆしやう　C なきの松原　B なきの松原　A なきの松原　C こそ出　B こそ出　A こそ出　C なきにつかせ給ふ　B なきにつかせ給ふ　A なきにつかせ給ふ　C 衆生　B 衆生　A 衆生　C 其所　B 其所　A 其所　C しかおなしくは　B しかおなしくは　A しかおなしくは　C 王子二人三人まうけ給ふ　B 王子二人三人まうけ給ふ　A 王子二人三人まうけ給ふ　C をまほらんとて　B をまほらんとて　A をまほらんとて　C なきに着て　B なきにて　A なきにて　C 【以下A無シ】　B 【以下A無シ】　A 【以下A無シ】　C 十数行　B 十数行　A 十数行　C 太郎の王子　B 太郎の王子　A 太郎の王子　C 二郎の王子　B 二郎の王子　A 二郎の王子　C 三郎の王子とて　B 三郎の王子とて　A 三郎の王子とて　C 太らの王子　B 太らの王子　A 太らの王子

C　おはしますかくてなきに　しはしすみ給　しかあら人神の仰せには太郎の
B　ましましけりかくてなきに　しはしすみたまいしか　太ら
C　王子　二郎　王子　二人　よひよせておほせ　けるは
B　王子　二郎の王子　二人をはよひ奉りて仰　られけるは
C　此ところは水のたよりよき所なれとも★やしきところを
B　彼所　は水のたよりもよそなれともよきやしき所　を見
C　★大道ちかき所にてむまのひつめかけさせるはむけなり
B　たづねてまいれ王子たちと仰　られけれは承候とて二人の王子たちはな
C　たつねてまいれ　とおほせられけれは　二人の王子たちな
B　きをうち出て　しなのゝ国をめくりて御覧　するに　さくの郡
C　きをうち出て　信濃国の内を　御らんするに　さくの郡
B　しもの郷たなか　むらに　つき給　ふ　太郎　王子二郎
C　しもの郡田中　の郡の村　にそ着　たまふ　太らの王子二らの
B　王子に仰られけるはやとの二郎殿　所は　よき所　なり　父
C　王子に仰られける　此所こそよきところなれは父御前母御前
B　はたかき大神にておはしませは　いかに渡　らせ給ふとも
C　はたかき大臣にておはしませは　何所にわたらせ給ふとも
B　人しんかうしたてまつるへし　われ／＼かやうなるせうしんを★ちゝ
C　人しんかうしたてまつるへし　我等　かやうの　所を　ちゝ
B　に申　とも　此所ほとの所をは給はらむすらん
C　御せんは申さす共　これほとの所をは給とせんすらん
B　たゝ此所にて過給ひ候とおほせ　けれは　二郎の王子　尤とて
C　たゝ此所にて過給へと仰　られけれは　二郎の王子　尤とて
B　太郎王子二郎王子そのまゝにたなかのむらにそと　まり給　ふ
C　二人の王子達は　其　侭に田中　の　村に　とゝまりたまひける
B　あら人神の仰せに三郎の王子めしよせて仰　せ有　けるは太郎の王子次郎
C　荒　人神　三郎の王子　をほせられけるは太らの王子二ら
B　の王子を　やしきところを　たつねてまいれとて　つかはしたれは
C　の王子に　屋敷　所　を　見て　まいれとて　つかはしたれは
B　今　まて見えぬそ　たつねてまいれとて仰せ　けれは　三郎　王子　な
C　いままて見えぬなり　尋　てまいれと　仰ありけれは　三郎の王子　な
B　きを打出て信　濃国　をめくりて御覧　すれは　さくの郡
C　きを　出て　しのゝ国内を　たつね　御らんする　に　さくの郡
B　しものかう田中のむらへつき給ふは太郎の王子　二郎の王子
C　しもの郡　田中の村　に着　たまふ　太らの王子　二郎　王子
B　の仰には　や　との三郎殿　ちゝは高　き大神
C　おほせられけるは　　三郎の王子聞給へ　ちゝはたかき大臣
B　にて渡　らせ給　へは　とても人　しんかうし参　らせ
C　にてわたらせたまへは　とても人　しんかうしまいらせ
B　んすらむとて此所よき所　なりちゝ　に申ともくるしからしと思ふなり
C　すらんと★此所にゐて候也　父御前　に　は申さす
B　　此所★おもひ申て　にて過給へ　われ／＼も諸　共　に過候はんするなりと仰せ
C　とも此ところにて過給へかし　もろともにすきぬと
A　◆【以上A無シ　目移ニ因ル落丁ナルヘシ　ナホ考フヘシ】
B　られけれは　三郎の
C　られけれは　三郎の
A　うし申されけるはこれらほとの所はちゝに申とも　給はり候はんすらん
B　王　子申されけるはこれ　ほとの所は父　に申共　給　候はん
C　王　子の給ひけるは是　程　の所をは父　に申候共　給候はんするに
A　ちゝのふけうをかふむりては大事にて候へし　ちゝの屋しきところ
B　ちゝのふけうをかふむりては父の候へし　ちゝの屋敷　所
C　ちゝの御ふしんかうふりては大事にて候へは　ちゝの御屋敷　所
A　を見おき　まいり　て申てこそ又まいり候はんと仰　られ　たなかの村　をは
B　を見おきてまいり候て申てこそ又まいり候はめと仰せられてたなかのむらを
C　を見奉りて参　候はんとて
A　たゝ給ひてすわのこほりかみのみさ山　しものみさ山　よきところ
B　たゝ給ひてすわのこほりかみのみさ山　下のみさやま　よき所
C　たゝ給ひてすわのこほりかみのみさ山　上のみさやま　よき所
A　立たまふ　諏訪の郡　の御しやたんを　よきところ
B　立たまふ　諏訪の郡　上　の御しやたんを　よきところ
A　と見たてゝ　ちゝ　にまいりて　御屋しき所は見たてゝ候よし申
B　と見たてゝ　父　に参　りて　御屋敷　所は見立て　候よし申
C　に見たてゝ候　ちゝ御せんに参　て　御やしき　所を見たてゝ候　申
A　給へはあら人かみ　こわたりはわたり　さきとして　さきに　なきには
B　給へはあら人神　こわたりやわたり　さきとして　さきに　なきには
C　其時　三郎の王子　父母たちを　さきとして　さきに　なきには
A　大ほうし小ほうし　てなかあしなかを　とゝめおかせ給ひてあら人神
B　大法　師小法　師　てなかあしなかを　とゝめおかせ給　てあら人神は
C　あら人神は

A　かみの村山　もと山の木のもとにつかせ給ひて御はんしやうありかたし
B　かみのむらやまやまもとやすのきのもとにつかせ給ひて御繁昌有かたし
C　うゐのしやたん　本やすの木の下につかせたまひて御はんしやうあるなり忝

A　けなく御ほんちふけん　ほさつ　すはの大明神これ也　ひめ宮
B　けなく御本地普賢大菩薩　諏訪大明神是也　ひめの宮
C　も本地ふけんほさつと　諏訪大明神とは是也　姫宮

A　の大明神は　しものみさ山　もとやすの木のもとにたゝせ給ひて
B　の大明神は　下のみさやま　もとやすの木のもとにたゝせ給ふて
C　大明神　下のしやたん　本やすの木のもとにたゝせたまひて

A　御はんしやうあり　かたしけなくも御ほんちせんしゆ観音　しも
B　御繁昌有　本地千手観音　下
C　御はんしやうありて　せんしゆ観音　下

A　の宮　これ也　三らのわうしはちゝにいとま申給ひて　さくのこほ
B　のみさ山　是也　三郎の王子は父にいとま申給ひて　さくの
C　の御やしろ是也さて三郎のわうしちゝ御せんに御いとまを申て　さくのこほ

A　りたなかのむらにおちつかせ給ふ　七日御まつりに　三らのわうしの
B　たなかのむらにおちつかせ給ふ　七日御まつりに　三郎の王子の
C　り田中村に　つかせたまひて　七日の御祭には　三郎のわうし

A　御まつりはちゝにゆるされありけれはゆゝしくまつられ給ふ　太らの
B　御まつりはちゝにゆるされありけれはゆゝしくまつらせ給ふ　太郎の
C　は父御せんに御ゆるされなりけれはいかめしくまつられたまいける　太らの

A　わうし二らのわうしの御まつりは　ちゝの御ゆるされなかりけれは
B　王子次郎の王子　御まつりは　ちゝのゆるされなかりけれは　夜に
C　わうし二らの王子の御祭は　ちゝの御ゆるしなけれは　夜る

A　ひそかにこゐもたてすまつる也　かうかのこほりにて　しかいし
B　ひそかにこゐもたてすまつらせ給ふなり　かうかの郡にて　しかひし
C　ひそかに　御まつり奉るなり　江夏の郡にて　しかいし

A　給ひし太郎殿二ら殿　その所のさんわう七しやとなり給ひて　かの
B　給ひし太郎殿二郎殿は　其所の王子七社となり給ひて　その
C　たまふ太ら殿二郎殿は　そのところの山のわう　となりたまいて　其

A　所のしゆしやうをまほらせ給ふ　あら人かみはかみの　みさ山にて御
B　所の衆生をまもらせ給ふ　あら人神はかみの　御佐山にて御
C　所の衆生を守たまふなり★さてあら人神は上の御しやたんにて御

★彼女は大和ノ国杉立の門にて御年七拾と申にわうしやうして

本地あみた佛けんして御すひしやく三わうの大明神これなり

A　とし七十三にて御わうしやう　とけ　給　ひて大明神とあらはれて
B　年　七十三にて御往生　とけ　給　て大明神とあらはれて
C　年　七拾三にて　わうしやうをとけさせたまひて大明神と　いはれて

A　一さいしゆしやうのくはんをみてさせ給ふ也　大明神のおほせ
B　一切の衆生の願をみてさせ給ふなり　大明神の仰
C　一切衆生のねかひをみてさせ給ふ也　大明神の御ちかひ

A　には七月三十日　あらはたいみてまいらせよ　しんとくをあたへて
B　には七月三十日　あらはたいみて参らせよ　神徳あたへて
C　には七月廿五日　あらはたをゆみて

A　まほらんとちかひ給ふそのゆへはわかほんふにてありし時　ある女の
B　まほらむとちかひ給ふそのゆへは凡夫にてありしとき　あるおんなの
C　我凡夫にてありし時に　女の

A　もとにかよひ給ひし時女房のいふやう　とのゝちゝ　もわらはかもとに
B　もとへかよひ給し時女房のいふやう　とのゝちゝ　もわらわかもとへ
C　もとへかよいしにかの女いゝけるは　とのゝちゝこせんの我もとへ

A　いらせ給ふとかたりけるにさてはちゝのかよはせ給ふにはをやにてこそ
B　入せ給ふ　かたりけるにさてはちゝのかよわせ給ふにはおやにてこそ
C　いらせたまふ★かたりけるさてはおやのかよはせたまはんにはおやにてこそ

★なりと

A　わたらせ給へ　そのゝちはかよひ給はすそれよりあらはたをふかくとかめ
B　渡らせ給へとてその父はかよひ給はすそれよりあらはたをはいみ
C　わたらせたまふとて其後かよはす　あらはたふかく御とかめ

A　給ふ也　又大明神のおほせにふく　むかはり月にかけていみてま
B　給ふ　又大明神の仰にふく　むかはり月にかけていみて参
C　あるなれまた大明神の★　ふんくおはむかはれ月かけてゆみ給ひてま

★おふせらるゝは

A　いらせよしからはしんとくをあたへてまほらむ　そのゆへはわれほんふにて
B　らせよしからは神徳あたへてまほらむ其故はわれ凡夫にて
C　いらせよすなはちこれ徳をあたへてまほらん★其故は我凡夫にて

★するなり

A　ありし時山にしゝかりにゆきたりしにあるこいゐによりてや
B　有し時やまにしゝかり　したりしにある小家によつて宿
C　ありし時かりおしに行たるしに★ある小家立よりてや

★あめきひしくふりて日もすてに暮たりしに

A　とをかるほとに　あるしいてゝこれはをやのしゝて候かいまた三十
B　をかるほとに　あるし出てゝ是はおやしゝて候か三十
C　とをかりたまひしに　あるし出て申やうこれはおやのしゝて候かいまた三十

A　五日にもなり候はねは　やとかしまいらせ候ましとかたく申ていれ
B　五日になり候はねは　かし参らせましとかたく申て入
C　日にもなり候はん間　宿をはまいらせ候ましとてかたく申て終入れ

A　たてまつらさりしゆへにふくをはとかめ給ふ也　さんやをは三十
B　たてまつらさりしゆへにふくをはとかめ給ふなり　さんや三十
C　たてまつらんゆへなり　さんをは三十

C　五日よりほかに五日よりほかのほか
B　はいみ給はぬはいみ給はぬはゆみたまはんゆへはならひの少家
A　はならひのいゑにやとをかり給ひしに宿をかり給ひしに

C　あるし申るは
B　あるし申けるは
A　さんをしていまた三十五日にさんをしていまた三十五日になり候はねとも
C　あるし申様
B　これはさんをして未三十日にもなり候はねとも

C　日くれ
B　日暮て
A　雨風これほときひしく候へは
C　雨風是程
B　雨風是程にきひしく候へは
A　なにかくるしく候へき
C　何かはくるしく候へき
B　御入

C　らせ給へとて入
B　せ給へと入
A　たてまつりしによりてさんを三十五日より
C　候へき
B　とていれ給ひしゆへ也それにによつてさんをは三十五日より

C　外はいませ給はす
B　ほはいませ給はす
A　さんをせんするもの物みつからか御はしらにとり
C　外はゆませたまはす
B　さんのさんをせんする人はみつからか身つからの御はしらにとり

C　つきてさんをするとも
B　つきてさんをするとも
A　とかめおほしめす事あるましきと御
C　付て
B　とかめおはします事あるましきと御
A　うみたりとも
C　あるましきと

C　ちかひあり
B　ちかひ有
A　大明神の御まへにあるふたつのかまはねの國にて
C　ちかひあり
B　大明神の御前の二つのかまは彌の国にて
A　扨大明神に二つ鎌をまいらせゆへたるは祢の国にて
C　【C　たるハ後補】

C　しゝのかはこなしし給ひて
B　しゝをやめ給ひたりしかまの
A　うへをやすめ給ひたりしかまの
C　しゝをおろさせたまひて御うへをやすめたまひし

C　ゆへ也
B　ゆへなり
A　さていまにいたるまてよろこひおほしめす也
C　さる間今の代にいたるまてもよろこひおほしめす也
B　さとさど

C　みやと申
B　みやと申
A　はきはまれる月にいりてかうかの女房のかみのみさ山の
C　みやと申すことはしはす
B　はきまれる月に入てかうかの女房の御左山の
A　上の御しやたんの

C　大明神
B　大明神
A　しものみさ山の大明神三所の大明神
C　下
B　しものみさ山の大明神三所の世の中の
A　の御しやたんの大明神三所の御神たち世の中のことを

C　せんきせ給はんとておはします所を
B　せんきせ給はんとておはします所を
A　せんきせ給はんとておはしますところをさとみやと申也
C　せんきせぬ
B　せんきせ候はんとておはしますをさと宮とは申也

C　五日よりほかに五日よりほかのほか
B　はゆみたまはんゆへはならひの少家
A　はならひのいゑにやとをかり給ひしに宿をかり給ひしに

C　あるし申るは
B　あるし申けるは
A　さんをしていまた三十五日にさんをしていまた三十五日になり候はねとも
C　あるし申様
B　これはさんをして未三十日にもなり候はねとも

C　日くれ
B　日暮て
A　雨風これほときひしく候へは
C　雨風是程
B　雨風是程にきひしく候へは
A　なにかくるしく候へき
C　何かはくるしく候へき
B　御入

C　らせ給へとて入
B　せ給へと入
A　たてまつりしによりてさんを三十五日より
C　候へき
B　とていれ給ひしゆへ也それにによつてさんをは三十五日より

C　外はいませ給はす
B　ほはいませ給はす
A　さんをせんするもの物みつからか御はしらにとり
C　外はゆませたまはす
B　さんのさんをせんする人はみつからか身つからの御はしらにとり

C　つきてさんをするとも
B　つきてさんをするとも
A　とかめおほしめす事あるましきと御
C　付て
B　とかめおはします事あるましきと御
A　うみたりとも
C　あるましきと

C　ちかひあり
B　ちかひ有
A　大明神の御まへにあるふたつのかまはねの國にて
C　ちかひあり
B　大明神の御前の二つのかまは彌の国にて
A　扨大明神に二つ鎌をまいらせゆへたるは祢の国にて
C　【C　たるハ後補】

C　しゝのかはこなしし給ひて
B　しゝをやめ給ひたりしかまの
A　うへをやすめ給ひたりしかまの
C　しゝをおろさせたまひて御うへをやすめたまひし

C　ゆへ也
B　ゆへなり
A　さていまにいたるまてよろこひおほしめす也
C　さる間今の代にいたるまてもよろこひおほしめす也
B　さとさど

C　みやと申
B　みやと申
A　はきはまれる月にいりてかうかの女房のかみのみさ山の
C　みやと申すことはしはす
B　はきまれる月に入てかうかの女房の御左山の
A　上の御しやたんの

C　大明神
B　大明神
A　しものみさ山の大明神三所の大明神
C　下
B　しものみさ山の大明神三所の世の中の
A　の御しやたんの大明神三所の御神たち世の中のことを

C　せんきせ給はんとておはします所を
B　せんきせ給はんとておはします所を
A　せんきせ給はんとておはしますところをさとみやと申也
C　せんきせぬ
B　せんきせ候はんとておはしますをさと宮とは申也

C　さても
B　大明神の御まへにせんつのいきものまいる事は
A　大明神の御前にせんつのいきものの参る事は彌の国にて
C　大明神の御
B　に𝍏まいることは祢の国にて

C　いさせ給
B　いまさせ給
A　ひたりしこしのこしやうをとふらはせ給はんためにかけ
C　いさせたま
B　ひたりしゝのおしやうをとふらはせ給はんためにかけて
A　ひたりしゝのこしやうほたひをとひたまはんに𝍏に
C　☆★御ちかひにより
B　☆★御ちかひにはしまりてよろつの生類を御前に
A　☆かけて

C　させて
B　させて
A　𝍏むをむすひてすくわせ給ふ也
C　𝍏縁ををむすひてすくはせ給ふ也
B　𝍏縁ををむすひてすくひ給ふとされはかみは本地を

C　あらはし申せ
B　あらはし申せ
A　三ねつのくるしみをやすめおほしめす也
C　申せは
B　申せは
A　三ねつのくるしみをやすめおほしめすなり
C　三ねつのくるしみ
B　やすめさせたまふ也

C　あいかまへて〳〵大明神をしんかうしたてまつる人はとうしんに
C　あひかまへて〳〵大明神をしんかうしたてまつる人は同心に
C　されは大明神をあかめたてまつらぬ人に同心に

C　御ほんちをたつねきく人々に御地聞徳
C　御ほんちを伝聞て人々にもかたりきかせて神のけんをかふむるへし

C　おにゝ神のとらるゝとはたとへはきりんわうのひめみやの大明神を
C　おにゝ神のとらるゝとはたとへはきりんわうにひめみやの大明神を
C　又きしんのするなとゝ申事はきりんわうにひめみやの大明神の

C　とり給ひて三とせかあたいわ屋のそこをしこめられて
C　とりて三年かあたいわ屋のそこにおしこめられて
C　とられさせ給ふて三年かほと岩屋のうちにをしこめられて

C　おはしましし候事也世はしまりていまの人まても申也
C　おはしましし候事なり世はしまりていまの世の人も申なり
C　おはしまし候事なる世はしまりていまの世の人にもつたへる事にてあるなれ

C　又物をくりことにいふを申ならはしたるも観音
C　又物をくり事にねんとひと申ならはしたる事も観音
C　又物をくる事にとふ事をはねんとひなとゝ申たる事くわん音

C　たうにて
B　たうにて
A　しんほついくらともなくをしかへし〳〵祢の國の
C　たうにて
B　たうにて
A　新発意のいくらともなくおしかへし〳〵祢の国の
C　新発意のいくらともなくおしかゑし

C　事をとひきめ給ひけるとかや
B　事をとひきめ給ひける事のゆへを申
A　事をとひきめ給ひける事のゆへなり
C　とひたまひたる